山形県埋蔵文化財センター調査報告書第107集

向河原遺跡

第4次発掘調査報告書

2002

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

向河原（むかいがわら）遺跡

第４次発掘調査報告書

平成14年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

調査区遠景

巻頭図版２

完掘状況

ＳＴ１竪穴住居跡カマド

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、向河原遺跡の調査成果をまとめたものです。

向河原遺跡は、山形市の北西部明治地区に立地します。付近は豊かな田園地帯を形成し、近年は果樹・野菜栽培なども盛んに行われています。本遺跡の北側には白川（馬見ヶ崎川と村山高瀬川が合流）が流れ、対岸には渋江、田中などの集落があります。本遺跡周辺には国指定史跡の嶋遺跡をはじめ、今塚遺跡、服部遺跡、藤治遺跡、馬洗場Ｂ遺跡など、古墳から平安時代にかけての遺跡が数多く点在し、古くから人々がこの地で生活を営んでいたことがうかがえます。

この度、特定道路山形羽入線道路改築工事に伴い、工事に先立って向河原遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代の竪穴住居跡、井戸跡、旧河川跡、溝跡、土坑などが検出され、平安時代の須恵器や土師器、鉄製品などの遺物が出土しました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　木　村　　宰

例　言

1　本書は、平成13年度特定道路山形羽入線道路改築工事に係る「向河原遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は山形県の委託を受けて、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名　　向河原遺跡　遺跡番号　平成２年度登録
所　在　地　　山形県山形市大字渋江字向河原
調 査 主 体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
受 託 期 間　　平成13年４月１日～平成14年３月31日
現 地 調 査　　平成13年７月10日～平成13年10月12日
調査担当者　　調 査 第 二 課 長　　尾形與典
　　主任調査研究員　　伊藤邦弘
　　調 査 研 究 員　　黒沼昭夫（調査主任）
　　副　調　査　員　　竹田純子

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、村山総合支庁建設部道路課、村山教育事務所、山形市教育委員会、及び山形県教育庁社会教育課文化財保護室など関係諸機関にご協力をいただいた。

5　本書の作成・執筆は、黒沼昭夫、竹田純子が担当した。編集は須賀井新人、竹田純子が担当し、全体について尾形與典が監修した。

6　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測　　株式会社ジーアイエス仙台
遺物保存処理　　株式会社ニッテツ・ファイン・プロダクツ
　　釜石文化財保存処理センター
基準点測量　　株式会社工藤測量設計

7　出土遺物・調査記録類については、報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居跡　ＳＫ…土坑　ＳＤ…溝跡　ＳＰ…ピット　ＳＧ…河川跡
ＳＥ…井戸跡　ＲＰ…登録土器　ＲＭ…登録鉄製品　ＲＱ…登録石製品
Ｐ……土器　Ｓ……石

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

（１）概要図・遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系による。図中の方位は座標北を示す。

（２）遺構実測図は１/40～１/200の縮尺で採録し、各々スケールを付した。なお、遺構実測図中の●は、遺物出土地点を表す。

（３）遺構実測図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。
炭化物層：　焼土：

（４）土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については、算用数字を付して区別した。

（５）本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

（６）遺物実測図・拓影図は、１/１・１/２・１/３の縮尺で採録し、各々スケールを付した。

（７）遺物観察表中の（　）で示した計測値は、図上復元による推定値を示す。出土地点欄の層位では、「Ｆ」は遺構覆土内出土、「Ｙ」は遺構底面出土を各示する。なお、遺物実測図中、土器断面の黒ベタは須恵器を表している。

（８）遺物実測図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。
黒色処理：　すす：　墨：
朱墨：　使用痕跡：　金属部分：

（９）遺物図版については任意の縮尺で採録した。

（10）遺物番号は、遺物実測図・遺物図版ともに共通したものである。

（11）遺構覆土の色調の記載については、1999年農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　遺跡の概要
　1　遺跡の層序……7
　2　遺構と遺物の分布……7
Ⅳ　検出された遺構
　1　竪穴住居跡……8
　2　井戸跡……26
　3　土坑……28
　4　溝跡……29
　5　河川跡……30
Ⅴ　出土した遺物
　1　平安時代……39
　2　古墳時代……41
　3　弥生時代……41
Ⅵ　まとめと考察……59

報告書抄録……61

表

表1　竪穴住居跡観察表……14
表2　出土遺物観察表1……56
表3　出土遺物観察表2……57
表4　弥生土器観察表……58
表5　石製品観察表……58
表6　金属製品観察表……58

挿　図

第１図　調査概要図……2
第２図　遺跡位置図……4
第３図　遺構配置図……5
第４図　ＳＴ１竪穴住居跡・カマド……15
第５図　ＳＴ１竪穴住居跡掘方・
　　ＳＴ３竪穴住居跡……16
第６図　ＳＴ３竪穴住居跡・カマド・
　　ＳＴ４竪穴住居跡……17
第７図　ＳＴ５竪穴住居跡・
　　ＳＴ５竪穴住居跡掘方……18
第８図　ＳＴ190・157竪穴住居跡……19
第９図　ＳＴ186竪穴住居跡・カマド……20
第10図　ＳＴ２竪穴住居跡・カマド……21
第11図　ＳＴ94竪穴住居跡・カマド……22
第12図　ＳＴ147・150・162竪穴住居跡……23
第13図　ＳＴ161・179・157竪穴住居跡……24
第14図　ＳＸ431土器捨て場……25
第15図　ＳＫ23・24土坑……30
第16図　ＳＥ281・247・276井戸跡……31
第17図　ＳＥ215・201・280井戸跡……32
第18図　ＳＥ284・273・243井戸跡……33
第19図　ＳＥ214・244・208井戸跡……34
第20図　ＳＥ268・218井戸跡・
　　ＳＫ220・221土坑……35
第21図　ＳＤ40・429溝跡……36
第22図　ＳＤ235・163溝跡……37
第23図　ＳＤ18・217・222溝跡……38
第24図　出土遺物（１）……42
第25図　出土遺物（２）……43
第26図　出土遺物（３）……44
第27図　出土遺物（４）……45
第28図　出土遺物（５）……46
第29図　出土遺物（６）……47
第30図　出土遺物（７）……48
第31図　出土遺物（８）……49
第32図　出土遺物（９）……50
第33図　出土遺物（10）……51
第34図　出土遺物（11）……52
第35図　出土遺物（12）……53
第36図　出土遺物（13）……54
第37図　出土遺物（14）……55
第38図　竪穴住居跡主軸方位及び
　　主軸長一覧……59

図　　版

巻頭図版１　調査区遠景
巻頭図版２　完掘状況
巻頭図版３　ＳＴ１竪穴住居跡カマド
図版１　作業状況他
図版２　井戸跡土層断面、完掘状況他
図版３　ＳＴ５竪穴住居跡完掘状況
図版４　ＳＴ３竪穴住居跡完掘状況
図版５　ＳＴ147竪穴住居跡完掘状況
図版６　ＳＴ４竪穴住居跡完掘状況他
図版７　ＳＴ186竪穴住居跡完掘状況
図版８　ＳＴ１精査状況
図版９　遺物出土状況
図版10　出土遺物（１）
図版11　出土遺物（２）
図版12　出土遺物（３）
図版13　出土遺物（４）
図版14　出土遺物（５）
図版15　出土遺物（６）
図版16　出土遺物（７）
図版17　出土遺物（８）
図版18　出土遺物（９）
図版19　出土遺物（10）
図版20　出土遺物（11）
図版21　出土遺物（12）
図版22　出土遺物（13）
図版23　出土遺物（14）
図版24　出土遺物（15）
図版25　出土遺物（16）
図版26　出土遺物（17）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

向河原遺跡は、山形市北西部、明治地区の大字渋江字向河原に所在する。本遺跡は立谷川扇状地の扇端部に立地し、北方100ｍに白川（馬見ヶ崎川と村山高瀬川が合流）、更に北方２㎞に立谷川、西方には須川と、最上川に注ぐ河川が近接して流れ、古くから水害に悩まされてきた地域である。

本遺跡は、平成２年度に山形県教育委員会が行った上山・山形・天童・東根地区基礎調査（表面踏査）によって発見され、新規登録された。同年、東北中央自動車道相馬・尾花沢線が、上山～東根間都市計画道路整備事業として計画された。自動車道が本遺跡に係ることから、平成11年３月、山形県教育委員会により詳細分布調査が行われた。引き続き同年４月に日本道路公団の委託を受けた財団法人山形県埋蔵文化財センターが、遺跡範囲や遺構数、深さを詳しく調べる第１次調査（予備調査）を行った。それを受け、同年５月から９月まで事業区域内の遺跡範囲のうち5,400㎡を対象に第２次調査を実施した。その結果、主に平安時代の遺構が確認され、多くの遺物が出土している。

平成12年度には前年度調査区の東側、市道諏訪線に係る3,200㎡について、平成12年８月から10月までの日程で第３次調査を実施した。前年度同様、平安時代を中心とする竪穴住居跡や溝跡などの遺構が確認され、平安時代の土師器や須恵器などが出土している。

平成13年度には、建設中の東北中央自動車道の東側に、特定道路山形羽入線道路改築工事が計画された。県教育委員会は、これに先立ち平成12年10月に事業予定地について詳細分布調査（試掘調査）を実施した。その結果、竪穴住居跡や柱穴等が検出され、遺跡範囲が前年度調査区の更に東側まで伸びることが確認された。

これらの資料をもとに、山形県教育委員会と事業主体者である山形県土木部との間で、遺跡の取り扱いについて協議が行われた。その結果、同事業との関連でやむをえず削平されると判断された、向河原遺跡の1,000㎡について緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなった。

平成13年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターが、県の委託を受けて第４次発掘調査を実施することになったものである。

2　調査の経過

平成13年７月３日、村山総合支庁建設部道路課において、向河原遺跡に係る遺跡発掘調査の打合会を開催し、発掘調査に至る経過報告、調査体制、調査の方法等が確認された。

今回の調査は、７月10日から９月４日までの実質35日間の予定で、道路部分1,000㎡を対象として実施された。７月10日に調査事務所を設置し、現地調査を開始した。７月12日には、重機による表土除去作業を行い、遺構確認面まで掘り下げた。その後、ジョレン等の道具を使用して面整理作業を行い、竪穴住居跡・井戸跡・柱穴・溝跡・河川跡等を確認した。

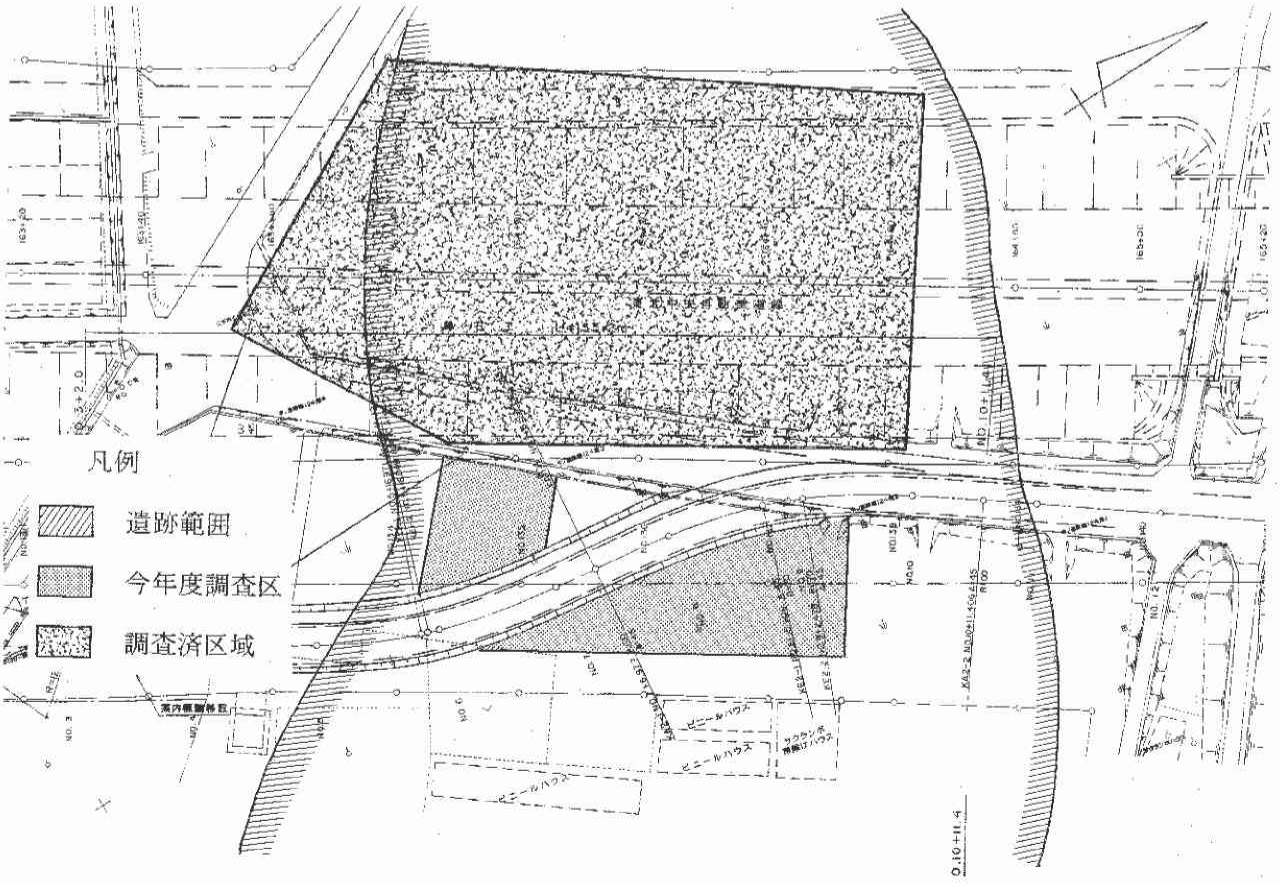
今回の調査は、調査区が既在の道路の東西に分かれているため、道路の西側をＡ区、東側をＢ区というように仮称した。７月24日、Ａ区より検出した遺構の精査を開始した。その後、記録作業等の進捗状況を勘案しながら、Ａ区とＢ区の調査を並行して進めていった。

出土した遺物は、登録した後、出土地点・レベル等の記録を行い取り上げた。その後写真撮影、断面図・平面図作成などの記録作業にあたった。

調査を進めていく過程で、Ｂ区に於いて遺構の重複が確認され、当初予定していた調査期間内で調査を終了することが困難なことが判明した。そのため、８月31日に調査期間の延長等について県教育委員会及び県土木部と協議を行い、10月12日まで調査を延長することとなった。

調査区を区画するグリッドは、平面直角座標系第Ｘ系により５ｍ×５ｍの大きさで設定した。グリッドの設定にあたっては、過去２カ年の調査結果をふまえ、遺跡全体の遺構の分布が連続してとらえられるように、昨年までの調査で設定したグリッドと連続するように設定した。Ｘ軸は西から東に12～24、Ｙ軸は南から北に19～29として座標を設定し、「12－19区」というように位置を標記した。なお、方位は座標北を表し、高さは海抜標高で表す。

10月11日には、遺構の空中写真測量を実施し、10月12日に調査を終了した。なお、10月９日に現地で調査説明会を開催したところ、約40名の参加が得られた。



第１図　遺跡概要図（Ｓ＝１：1,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

向河原遺跡の所在する山形市は、県域の東部中央に位置する。東は蔵王熊野岳を含む奥羽山脈によって宮城県との境を成し、西は白鷹山を主峰とする丘陵が取り囲む。

本遺跡が位置する山形市北部では、奥羽山脈を源とする立谷川・高瀬川が西流し、複合扇状地を形成している。また、同じく西流する馬見ケ崎川は七浦付近で高瀬川と合流し、白川となって須川に注ぎ込む。これらの河川によって形成された扇状地の扇端部には湧水地帯があり、その下流の前縁帯には、特に自然堤防の発達が見られる。扇頂部から伏流し扇端部で湧き出した水が流路を形成して、自然堤防の間をぬって網状に広がる。このため、古くから水害に悩まされた地域であるが、昭和25年頃から始まった土地改良事業や昭和34年からの白川沿岸畑地区画整理事業など、長年の大事業を通して水害や干害の克服に力を入れた農業先進地域である。

本遺跡は、白川左岸の自然堤防上に位置し、標高は約97ｍを測る。調査前まではりんごやさくらんぼの果樹園として利用されていたほか、市道諏訪線が走り山形市街と本遺跡が所在する明治地区とを結んでいた。現在は、建設工事中の東北中央自動車道が南北に走っている。

2　歴史的環境

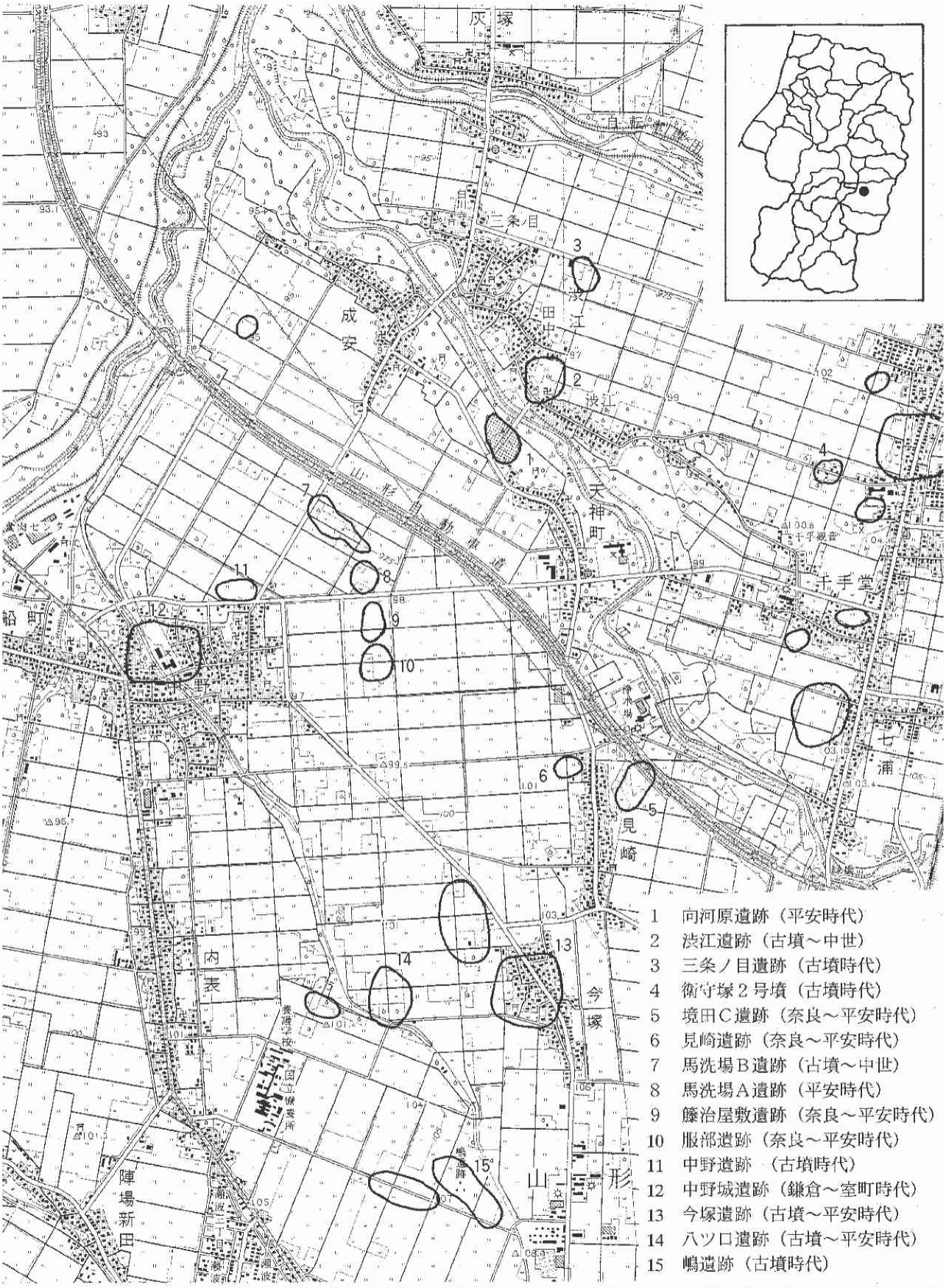
本遺跡周辺の自然堤防とその後背湿地には、弥生時代中期から平安時代にかけての多くの遺跡が存在する。

弥生時代の遺跡は、県内を代表する遺跡が多く存在する。七浦遺跡では、石包丁が３点出土し、水稲農耕が行われた証拠として重要視されている。

古墳時代に入ると遺跡数が増加し、さらに多くの集落が営まれたことがうかがえる。白川対岸の渋江遺跡では、焼失住居をはじめ多くの竪穴住居が検出され、長期間にわたって集落が営まれたことが明らかとなった。山形自動車道を挟んで２㎞南の馬洗場Ｂ遺跡からは内行花文鏡の破鏡が出土している。国指定史跡である嶋遺跡では、農耕具や機織具などの生産用具、容器をはじめとする生活用具など、多くの木製品が出土している。住居跡のほかに倉庫跡が検出され農耕集落跡として著名である。また、集落周辺には衛守塚２号墳などの古墳が分布している。

奈良・平安時代には、自然堤防上に立地する遺跡が増加する。本遺跡や境田Ｃ遺跡、見崎遺跡など、白川左岸に立地する遺跡が目立つ。これら遺跡の点在は、平安時代に入り後背湿地を利用した水田経営が一段と安定したことを示している。当該期の集落跡としては掘立柱建物・井戸・土坑等で構成される境田Ｃ遺跡があげられる。また、本遺跡の南東４㎞に位置する今塚遺跡では、仁壽三年（853年）の年号が記された木簡が出土し、役所的機能を備えた集落跡と捉えられる。

弥生時代以来、水に恵まれた当地が人々の生活の場として、また、地域内の政治的要所として利用され続けたことが想像できる。



第２図　遺跡位置図（国土地理院２万５千分の１地形図「山形北部」を使用）

基本層序
Ⅰ　10ＹＲ 3/3 暗褐色シルト（耕作土、下層に土器片を少量含む）
Ⅱ　10ＹＲ 2/1 黒色シルト
Ⅲ　10ＹＲ 4/4 褐色シルト（やや粘る）
Ⅳ　10ＹＲ 1.7/1 黒色粘質シルト（粗砂を少量含む）

第３図　遺構配置図・基本層序

Ⅲ　遺跡の概要

1　遺跡の層序

立地と環境でふれたように、向河原遺跡は山形市北西部明治地区に立地しており、調査区の北方100mを白川（馬見ヶ崎川と村山高瀬川が合流）が西流している。

第３図は、本遺跡の基本層序である。前述の通り、調査区が既存の道路の東西に分かれているため、道路の西側をＡ区、東側をＢ区というように仮称し、それぞれの層序について述べたい。ａ－ａ′はＡ区南側の基本層序である。Ⅰ層は耕作土で、暗褐色を呈するシルト質の土壌である。Ⅱ層との境に少量の土器片を含む。これは、区画整理の際に土の入れ替えなどが行われたことに起因するものと思われる。Ⅱ層は、黒色のシルト質層である。しまりが弱く少量の土器片を含む。Ⅲ層は、褐色を呈するシルト質の土壌で、この面を掘り込むようにして遺構が確認できる。

ｂ－ｂ′はＢ区南側の層序である。Ａ区と同様の堆積状況を示している。

ｃ－ｃ′はＢ区東側の層序である。堆積状況は他の２点の層序と同じ様相を示すが、Ⅱ層とⅢ層の間に、粘質を帯びた黒色のⅣ層が認められる。この層は、小粒の砂を含み、Ｂ区の北部にのみ堆積が認められる。これは、Ｂ区北端に旧河川跡と考えられる厚い砂の層が確認されており、この砂の層のⅠ層と同じ堆積物である。また、Ｂ区は中央から北方向に緩やかに傾斜しており、標高が低い北側にのみ堆積したのものと考えられる。

2　遺構と遺物の分布

1,000㎡を対象として実施した今回の調査では、竪穴住居跡、旧河川跡、土坑、柱穴、溝跡、井戸跡等、総数400基を越える遺構が確認された。

Ａ区の遺構の中心は井戸跡で、14基検出された。いずれも素堀の井戸で、下半が膨らんだ形状になっている。元々の形は下に行くに従って細くなる円筒形をしていたものが、水が湧き出る際に壁際の土が削り取られて崩落し、このような形状になったと考えられる。昨年度の３次調査で検出された溝跡に連続する溝跡が、２条検出されている。これらに連続すると考えられる溝跡が、Ｂ区でも検出されており、更に東側へと連続していることが確認された。

Ｂ区の遺構の中心は、竪穴住居跡である。確認された住居跡は17棟にのぼる。狭い範囲に重複して検出されており、何度も建て替えを行ったことがうかがえる。また、住居跡が確認されているのは、前述した溝跡と調査区北端の河川跡の間に限られており、この溝跡と河川跡が遺構の分布を規制する何らかの要因になっていることがうかがえる。

今回の調査に関わる出土遺物は、コンテナ30箱である。弥生土器、古墳時代の土師器や須恵器、平安時代の土師器や須恵器、紡錘車や刀子などの鉄製品、石製品等が出土している。弥生土器は、包含層よりの出土がほとんどで、桜井式や天王山式に比定されるものである。しかし、弥生時代の遺構は確認されておらず、断面が激しく摩耗していることからみて、周辺に立地する遺跡から流れ込んだものと考えられる。

Ⅳ　検出された遺構

1　竪穴住居

検出された竪穴住居は17軒であり、すべて平安時代に属する。平面形は、規模の大小に拘わらず方形または不整方形を呈する。一辺の長さは3.5～６ｍ程の範囲にあり、3.5～4.5ｍのものが主体を占める。カマドは９基検出した。ＳＴ３カマド（ＥＬ144）は、壁からの作り出しが比較的広く、煙道長80㎝、煙道幅70㎝である。これに対し、ＥＬ144を除くカマドの形態は、煙道長120～140㎝、煙道幅20～40㎝である。検出例は少ないが、袖幅は130～140㎝が標準と考えられる。住居の重複は、ＳＴ４→147→162→１→150などの切り合い関係から少なくとも５期は認められる。また、ＳＴ186下にＳＴ156･200が認められたが、床面または床面下の検出となり、２軒のプランおよび切り合い関係は確認できなかった。また、覆土の観察が可能であった竪穴住居すべてが、自然堆積であった。

ＳＴ１（第４図）

位置・重複　26・27－18・19区に位置する。ＳＴ150・161を切り、ＳＴ147・162に切られる。

平面形・規模　南北5.1ｍ、東西4.5ｍの方形を呈する。検出面から床面までの深さは、約30㎝である。

主軸方位　Ｎ－16°－Ｅを測る。

覆土　黒褐色シルトを基本とする。カマド部分以外は他の遺構に切られており、床面近くで検出した。

壁・床面　ＳＴ150覆土および地山を掘り込み、垂直に立ち上がる。中央部は地山を床面とし、周辺部は貼床と考えられる。

柱穴　ＥＰ425・456は主柱穴と考えられる。しかし、深さはＥＰ425が12㎝、ＥＰ456が17㎝と浅い。また、貼床除去後、挿図では破線で示したピットを検出している。

カマド（ＥＬ149）　南辺西部に位置し、煙道長120㎝、煙道幅20㎝、袖幅140㎝である。西袖付近に炭化層が広がる。被熱により褐色を呈する。

その他の施設　カマド近くに貯蔵穴と考えられるＥＫ379、また、ＥＫ379に切られる土坑がある。

遺物の出土状況　カマド煙道先端より須恵器坏（53）や土師器甕（57～60）が出土している。53は、内面に擦り痕、外面に墨書が施され、転用硯と考えられる。また、ＥＫ379から須恵器坏（54）、土師器坏（55・56）や鉄製紡錘車（114）が出土している。55は、口縁部内面にすすが付着するなど、灯明皿の可能性が高い。

ＳＴ３（第５・６図）

位置・重複　27－19・20区に位置し、ＳＴ147・150・162を切る。

平面形・規模　南北3.8ｍ、東西3.4ｍで、方形を呈する。検出面から床面までの深さは約20

cmである。

主軸方位　Ｎ－５°－Ｅを測る。

覆土　黒褐色シルト、黒褐色シルトおよびにぶい黄褐色砂質シルトとの混合層を基本とする５層からなる。

壁・床面　地山およびＳＴ２・147・162覆土を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床で、中央部に炭化層が広がる。

柱穴　３つのピットを検出した。

カマド（ＥＬ144）　北辺東部に位置し、右袖と考えられる粘土が残る。壁からの作り出しが他のカマドよりも広く、煙道長も短い。煙道長80cm、煙道幅70cm、袖幅は不明である。

その他の施設　炭化層を剥がした面に土坑（ＥＫ169・170）を検出したが、遺物は見られない。

遺物の出土状況　カマド煙道や床面から土師器が出土している。

ＳＴ４（第６図）

位置・重複　26・27－18・19区に位置し、ＳＴ１・147・161・162、ＳＧ171を切る。

平面形・規模　南北4.0m、東西4.3mの不整方形を呈する。西辺がやや広い台形である。検出面から床面までの深さは約30cmである。

主軸方位　Ｎ－84°－Ｅを測る。

覆土　暗褐色シルト、地山と同一の褐色シルト、黒褐色粗砂による堆積である。

壁・床面　北辺はＳＴ147・162・161覆土、南辺はＳＧ171覆土、東辺はＳＴ161、ＳＧ171覆土、西辺はＳＴ１と地山をそれぞれ掘り込み、斜めに立ち上がる。先行するＳＴ１・147・161・162、ＳＧ171の覆土を床面とし、中央部に炭化層が広がる。

柱穴　中央南西部に１つ検出した。

遺物の出土状況　床面より須恵器甕（44）、土師器甕（47・48）、高台付坏（46）、鉄製の紡錘車（115）などが出土している。

ＳＴ５（第７図）

位置・重複　27・28－21・22区に位置し、ＳＧ171を切る。

平面形・規模　南北4.3m、東西3.9mで、方形を呈する。検出面から床面までの深さは約13cm、掘方面までは約20cmである。

主軸方位　Ｎ－６°－Ｗを測る。

覆土　暗褐色シルトと地山と同一の褐色砂質シルトとの混合層からなる。

壁・床面　Ⅲ層と地山を掘りこみ、垂直に立ち上がる。硬化面上に焼土層が広がる。周溝を除く全面が貼床である。

柱穴　ＥＰ125～129が主柱穴と考えられる。すべて深さは20cm弱であった。

その他の施設　西辺から南辺西部にかけて周溝が検出された。幅25～40cm、深さ10cmである。

掘り方精査中に土坑（ＥＫ130）を検出したが、竪穴に伴う可能性は低い。

遺物の出土状況　床面から遺物は出土していない。

ＳＴ190（第８図）

位置・重複　26・27－20区に位置し、ＳＴ２およびＳＴ186内のＥＫ321・331、ＳＫ325に切られる。

平面形・規模　南北4.5m、東西4.5mの不整方形であり、検出面から床面までの深さは約20㎝である。西辺がやや広い台形である。

主軸方位　Ｎ－14°－Ｅを測る。

覆土　暗褐色シルトに褐色細砂が少量入る。

壁・床面　地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床で、中央部からやや南東寄りに炭化層が広がる。

柱穴　主柱穴と考えられるのはＥＰ349・460である。深さは46～48㎝である。支柱穴と考えられるＥＰ353は、深さ34㎝である。ＥＰ351はＥＰ460に対応するが、深さは25㎝である。

遺物の出土状況　床面より土師器甕（43）が出土している。

ＳＴ172（第８図）

位置・重複　25－18・19区に位置し、ＳＴ157・ＳＥ173に切られる。

平面形・規模　西半分以上が調査区外にあたり、規模は不明である。平面形は不整方形と考えられる。検出面から床面までの深さは、約16㎝である。

主軸方位　Ｎ－５°－Ｅを測る。

覆土　黒褐色シルトを基本とした５層からなる。

壁・床面　地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床である。

柱穴　ＥＰ194・195が共に深さ30㎝を測る。ＥＰ194を主柱穴と考えたいが、対応するＥＰ192やＥＰ193・196は15㎝未満であり、やや差がある。

遺物の出土状況　床面より須恵器甕の破片（62）、土師器甕（65）や鉢（64）が出土している。

ＳＴ186（第９図）

位置・重複　26・27－20～22区に位置する。ＳＴ94、ＳＤ187に切られ、ＳＴ156・200を切る。

平面形・規模　南北5.7m、東西5.3mの方形を呈する。カマド検出面から床面までの深さは、約35㎝、カマド以外の部分はほぼ床面で検出した。

主軸方位　Ｎ－14°－Ｅを測る。

覆土　暗褐色シルト、炭化物・焼土の混合層の２層を確認した。

壁・床面　壁は未検出である。先行するＴ156・200の覆土を床面とし、中央部に炭化層が広がる。硬く締まった掘り方を検出した。

柱穴　ＥＰ198・427は主柱穴、ＥＰ197・198・428は支柱穴か。

カマド（ＥＬ180）　南辺東部に位置し、煙道長130㎝、煙道幅35㎝、袖幅90㎝である。袖幅はさらに広くなる可能性が高い。煙道部は被熱により褐色を呈する。

その他の施設　中央南西部にＥＫ318、カマド両脇に焼土で埋まったＥＫ321・331を検出。

遺物の出土状況　床面から刀子（119・120）が出土した。

ＳＴ２（第10図）

位置・重複　26・27－19・20区に位置する。北辺をＳＴ186、南東隅をＳＴ３に切られ、ＳＴ190上層全体を切る。

平面形・規模　南北5.0m、東西3.7mの方形であり、さらに北へ伸びるものと思われる。検出面から床面までの深さは約30㎝である。

主軸方位　Ｎ－16°－Ｅを測る。

覆土　黒褐色シルトに炭化物・焼土が混じる。

壁・床面　地山を掘り込み、やや斜めに立ち上がる。地山とＳＴ190覆土を床面とし、薄い炭化層が僅かに点在する。

柱穴　確認できなかった。

カマド（ＥＬ148）　南辺東部に位置し、煙道長140㎝、煙道幅30㎝、袖幅は不明である。炊き口と思われる部分に焼土と炭化層が広がる。カマド芯材は礫である。

遺物の出土状況　カマド周辺の床面から土師器甕（39～41）、カマド煙道先端から土師器甕（42）、須恵器坏（35）が出土している。

ＳＴ94（第11図）

位置・重複　25・26－21・22区に位置し、ＳＴ186を切る。

平面形・規模　北辺は確認できずプランは不明である。確認できた規模は、南北4.3m、東西3.8mで、方形を呈するものと考えられる。検出面から床面までの深さは、約13㎝である。

主軸方位　Ｎ－76°－Ｗを測る。

覆土　黒褐色シルトの単一層である。

壁・床面　検出面が低く、壁は検出できなかった。先行するＳＴ186覆土を床面とし、カマド（ＥＬ153）付近に炭化層が広がる。

柱穴　確認できなかった。

カマド（ＥＬ153・154）　東辺南部（ＥＬ153）と南辺西部（ＥＬ154）に確認された。ＥＬ153は、煙道長130㎝、煙道幅32㎝、袖幅130㎝である。ＥＬ154は、煙道長60㎝、煙道幅20㎝、袖幅は不明である。ＥＬ153はＥＬ154に比べて遺存状態がよく、周辺に土器が点在する。ＥＬ154は袖であったと思われる粘土が残る程度である。住居廃棄の際に使用していたカマドはＥＬ153であり、ＥＬ154はすでに使用されていなかったものと考えられる。ＥＬ153袖下にも炭化層が広がることから、袖の作り替えが想定される。芯材として礫を使用している。

遺物の出土状況　床面、カマド周辺より須恵器坏（66）、土師器の坏（67・68）や甕（69～

71）が出土している。

ＳＴ147（第12図）

位置・重複　26・27－19区に位置する。ＳＴ１・150を切り、ＳＴ３に切られる。

平面形・規模　南北3.9m、東西3.8mの方形である。検出面から床面までの深さは約30㎝である。

主軸方位　Ｎ－24°－Ｅを測る。

覆土　黒褐色シルトを基本とする５層からなる。

壁・床面　ＳＴ１覆土を掘り込み、やや斜めに立ち上がる。先行するＳＴ１覆土を床面とし、中央部およびその東部に炭化層が広がる。

柱穴　３つを検出。

その他の施設　炭化層付近に土坑（ＥＫ165）が存在する。

遺物の出土状況　床面より須恵器坏（50）や墨書が見られる須恵器皿（51）、土師器甕（52）、鉄製の紡錘車（112）や鎌（122）、砥石（111）が出土している。

ＳＴ150（第12図）

位置・重複　25・26－19区に位置し、ＳＴ１・147、ＳＫ159に切られる。

平面形・規模　大部分が他の竪穴住居に切られる。北辺と西辺の一部以外は不明だが、方形と考えられる。検出面から床面までの深さは、約40㎝である。

主軸方位　Ｎ－70°－Ｗを測る。

覆土　大部分が掘削されているが、カマド覆土の観察から暗褐色シルトと考えられる。

壁・床面　地山を掘り込み、垂直に立ち上がる。直床と考えられる。

柱穴　不明。

カマド（ＥＬ151）　西辺中央部に位置し、煙道長140㎝、煙道幅20㎝、袖幅は不明である。煙道部は被熱により褐色を呈する。

遺物の出土状況　カマド付近より土師器甕（49）が出土している。

ＳＴ162（第12図）

位置・重複　27－19区に位置する。ＳＴ１・161を切り、ＳＴ３・４・147に切られる。

平面形・規模　大部分を他の竪穴住居に切られ、不明である。

主軸方位　不明。

覆土　黒褐色シルトを基本とする４層からなる。

壁・床面　地山およびＳＴ１・161覆土を掘り込み、垂直に立ち上がる。直床である。

柱穴　不明。

その他の施設　東辺に幅50㎝、深さ15㎝ほどの周溝を検出した。

遺物の出土状況　砥石（109）が出土している。

ＳＴ161（第13図）

位置・重複　27－18・19区に位置する。ＳＴ１・４・161、ＳＧ171に切られる。

平面形・規模　大部分を他の遺構に切られ、平面形・規模共に不明である。検出面から床面までの深さは、約40㎝である。

主軸方位　Ｎ－68°－Ｗを測る。

覆土　不明。

壁・床面　地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床で、カマド周辺に炭化層が広がる。

柱穴　不明。

カマド（ＥＬ155）　北東隅に位置し、煙道長120㎝、煙道幅23㎝、袖幅は不明である。袖の芯材と考えられる焼礫が残る。

その他の施設　炭化層を剥がした面に土坑（ＥＫ451）を検出した。

遺物の出土状況　床面より須恵器や土師器の甕（79～81）、刀子（115）が出土している。

ＳＴ157（第13図）

位置・重複　25－19区に位置し、ＳＴ172・179を切る。

平面形・規模　大部分は調査区外にあたり、東辺の検出にとどまった。規模は不明である。検出面から床面までの深さは、約45㎝である。

主軸方位　Ｎ－77°－Ｅを測る。

覆土　黒褐色シルトを基本とする５層からなる。

壁・床面　地山とＳＴ172・179覆土を掘り込み、斜めに立ち上がる。カマド周辺に炭化層が広がる。

柱穴　５つの柱穴を検出したが、深さはすべて15㎝未満である。

カマド（ＥＬ160）　東辺北部に位置し、煙道長120㎝、煙道幅40㎝、袖幅は不明である。

遺物の出土状況　遺物は出土していない。

ＳＴ179（第13図）

位置・重複　25－19区に位置し、ＳＴ157に切られる。

平面形・規模　西部は調査区外であり、東部も大部分をＳＴ157に切られ、平面形・規模共に不明である。

主軸方位　Ｎ－６°－Ｅを測る。

覆土　黒褐色シルトを基本とする４層からなる。

壁・床面　地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。カマド周辺に炭化層が広がる。

柱穴　ＳＴ157との境に１つ検出。

カマド　北辺東部に位置するが、大部分が調査区外にあたっている。

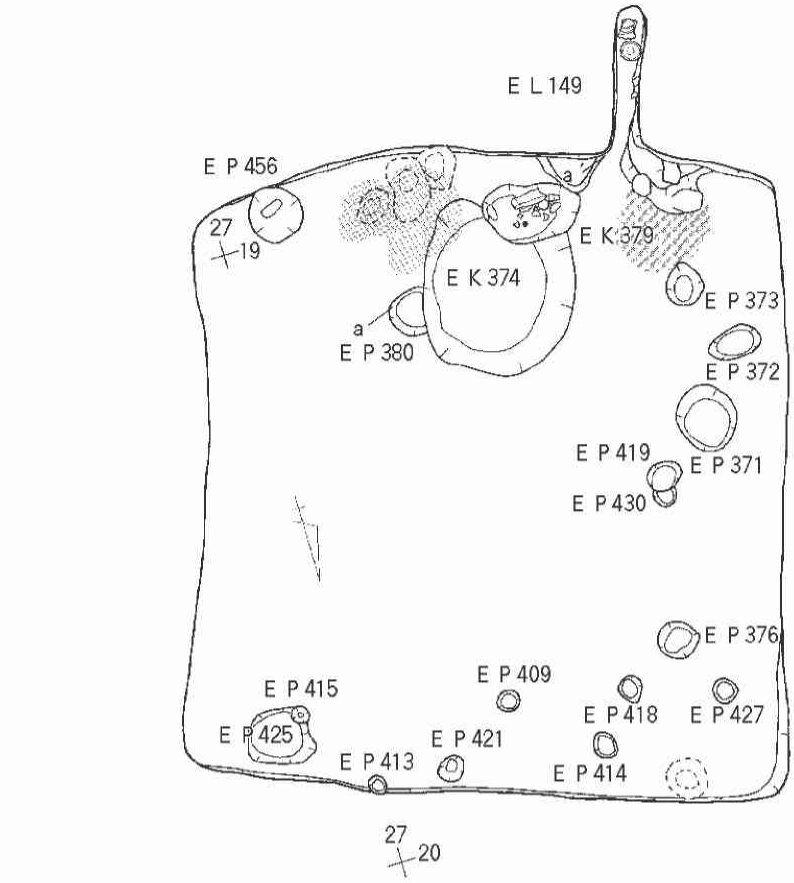
遺物の出土状況　床面より土師器甕（82）が出土している。

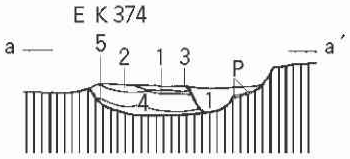
ＳＸ431土器捨て場（第14図）

26･27－20～22区に位置する。ＳＴ186周辺および覆土に炭化層が広がり、炭化層上に多くの土器が出土した。これらは、ＳＴ186埋没後にできた窪地に一括で捨てられた様相を示している。墨書土器（２・４・7. 11・12・17・24)、転用硯（10）などが出土している。

表１　竪穴住居跡観察表

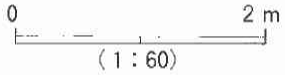
	平面形	主軸方位（長軸）	規模（m）	深さ（cm）	床面積（㎡）	床面状況	壁	周溝	カマド	煙道長（cm）	煙道幅（cm）	袖幅（cm）	ピット・貯蔵穴	出土遺物	備考
ＳＴ１ 26・27－18・19区	方形	Ｎ16°Ｅ	5.1×4.5		22.9	周辺部貼床	垂直	無	南辺西部 ＥＬ149 被熱強い	120	20	140	16 ＥＫ374、379	カマド煙道先端より53、57～60、ＥＫ379より54～56、114	ＳＴ147、162に切られる。ＳＴ150、161を切る。
ＳＴ３ 27－19・20区	方形	Ｎ５°Ｅ	3.8×3.4	20	12.8	炭化層有地山	斜	無	北辺東部に袖らしいもの残る	80	70	不明	3（ＥＰ458、462、465）ＥＫ169、170	床から77、カマド煙道から78、覆土から76	ＳＴ147、150、162を切る。
ＳＴ４ 26・27－18・19区	不整方形	Ｎ６°Ｗ	4.3×4.0	30	17.2	炭化層有	斜	無	無				1	床より44、46～48、115、116、覆土より45	ＳＴ１、147、161、162、ＳＧ171を切る。
ＳＴ５ 27・28－21・22区	方形	Ｎ６°Ｗ	4.3×3.9	床まで13掘方まで20	16.8	硬化面上に焼土層有貼床	垂直	有	無				5（ＥＰ125～129）	覆土より72	ＳＧ171を切る。貼床下にＥＫ130。
ＳＴ190 26・27－20区	不整方形	Ｎ14°Ｅ	4.5×4.5	20	20.3	炭化層有地山	斜	無	無				8	床より43	ＳＴ186内ＥＰ321、331、ＳＫ325、ＳＴ２に切られる。
ＳＴ172 25－18・19区	不整方形	Ｎ５°Ｅ		16			斜						6（ＥＰ191～196）、ＥＫ459	床より62、64、65、覆土より61、63	ＳＴ157、ＳＥ173に切られる。
ＳＴ186 26・27－20～22区	方形	Ｎ14°Ｅ	5.7×5.3		30.2	炭化層有	不明	無	南辺東部 ＥＬ180 被熱強い	130	35	90	9 ＥＫ318、321、331	床より119、120	カマド両脇に焼土で掘まるＥＫ321・331。ＳＴ94に切られる。ＳＴ156、200を切る。覆土から多くの土器が出土。
ＳＴ２ 26・27－19・20区	方形	Ｎ16°Ｅ	(5.0×3.7)	30		炭化層有	斜	無	南辺東部 ＥＬ148	140	30	不明	無	床より39～41、カマド煙道先端より35、42、覆土より34、36～38	ＳＴ３、186に切られる。北辺プラン未検出。
ＳＴ94 25・26－21・22区	方形	Ｎ14°Ｅ	(4.3×3.8)	13			不明	無	東辺南部EL153 南辺西部EL154	130 60	32 20	130 不明	無	床より66～71	北辺プラン不明。
ＳＴ147 26・27－19区	方形	Ｎ24°Ｅ	3.9×3.8	30	14.8	炭化層有	斜	無	無				3（ＥＰ167、168、ほか）、ＥＫ165	床より50～52、111、112、122	ＳＴ１、150を切る。ＳＴ３に切られる。
ＳＴ150 25・26－19区	方形	Ｎ20°Ｅ		40			垂直		西辺中央部 ＥＬ151 被熱強い	140	20	不明		床より49	ＳＴ１、147、ＳＫ、ＳＰ410～412、422が切る。
ＳＴ162 27－19区	不明	Ｎ16°Ｅ		22			垂直	有							ＳＴ１、161を切る。ＳＴ3，4，147に切られる。
ＳＴ161 27－18・19区	不明	Ｎ22°Ｅ		40		炭化層有	斜		北東隅 ＥＬ155	120	23	不明	ＥＫ451	床より79～81、115	ＳＴ１、４、161、ＳＧ171に切られる。
ＳＴ157 25－19区	不明	Ｎ12°Ｅ		45		炭化層有	斜		東辺北部	120	40	不明		無	ＳＴ172、179を切る。
ＳＴ179 25－19区	不明	Ｎ６°Ｅ		45		炭化層有	斜		北辺東部	不明	不明	不明		床より82	ＳＴ157に切られる。

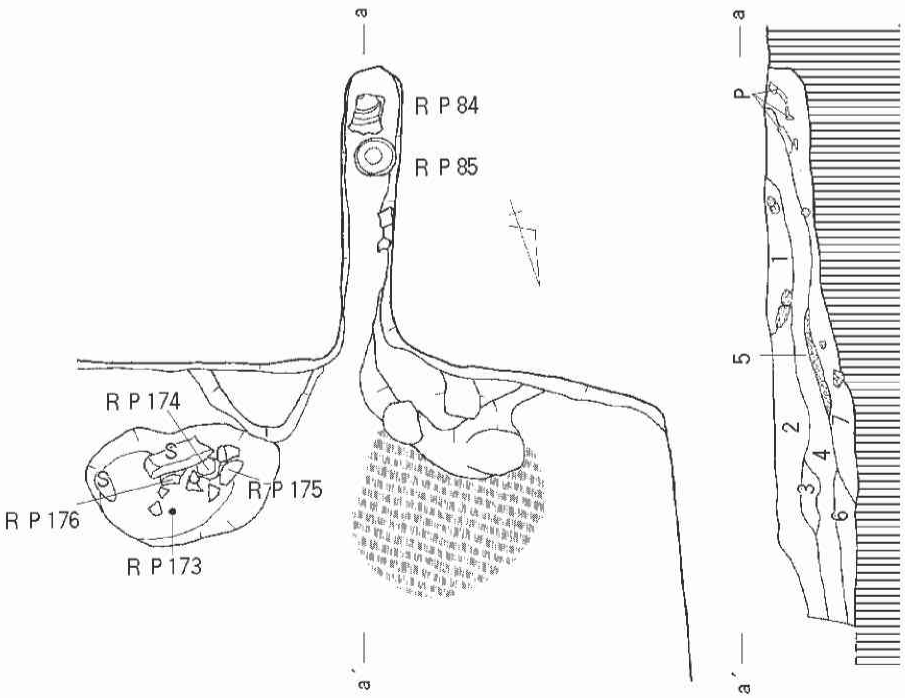




E K 379
1　10ＹＲ２/２黒褐色シルト（下層に炭化物を多量に含む）

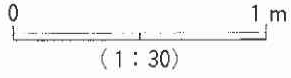
E K 374
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（少量の焼土を含む）
2　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックを３％含む
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックを30％含む
4　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックを５％含む、やや砂質を帯びる）



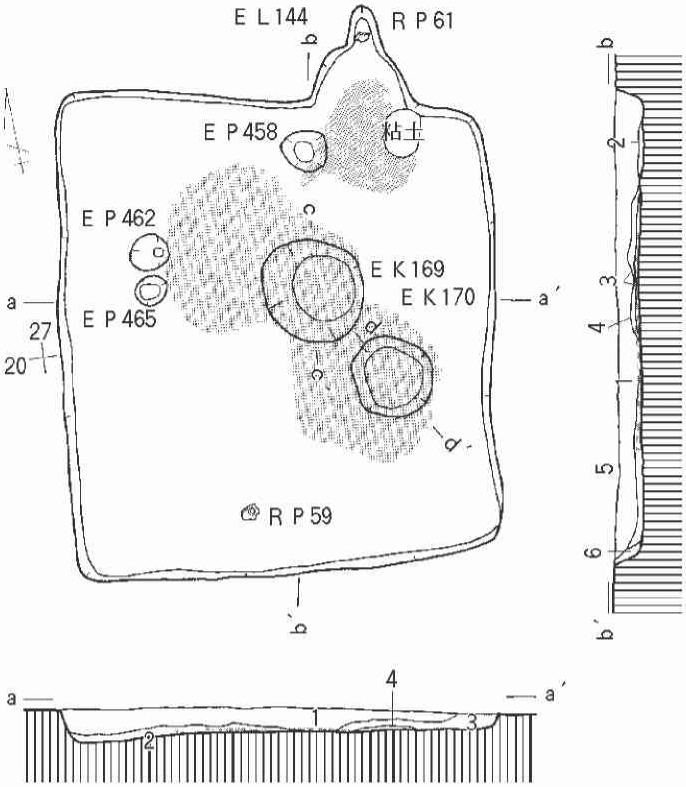


ＳＴ１－ＥＬ149
1　10ＹＲ３/４暗褐色シルト
2　10ＹＲ３/４暗褐色シルト（焼土、砂を含む、しまりあり）
3　10ＹＲ３/４暗褐色シルト（砂、炭化物を少量含む、しまり強い）
4　7.5ＹＲ３/２黒褐色粘質シルト（焼土と炭化物を含む、7.5ＹＲ５/６明褐色砂が斑に少量入る、しまり強い）
5　10ＹＲ２/３黒褐色粘質シルト（焼土がブロック状に、炭化物が斑に入る、しまり弱い）
6　7.5ＹＲ３/２黒褐色粘質シルト（焼土と炭化物を少量含みしまりあり）
7　10ＹＲ３/４暗褐色粘質シルト（大焼土ブロック、焼土が全体に混じる。炭化物を微量含みしまりあり）

水糸標高96.5m

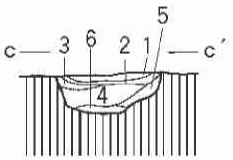


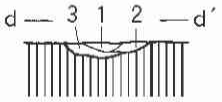
第４図　ＳＴ１竪穴住居跡・カマド



ＳＴ３（ａ－ａ´）
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（小粒の炭化物と土器片を含む）
2　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが20％混じる
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが20％混じる
4　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトに10ＹＲ２/３黒褐色シルトの小ブロックが10％混じる

ＳＴ３（ｂ－ｂ´）
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（小粒の炭化物と土器片を含む）
2　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが10％混じる
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが20％混じる
4　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトに炭化物が多量に混じる
5　３と同じ
6　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトに10ＹＲ２/３黒褐色シルトの小ブロックが10％混じる





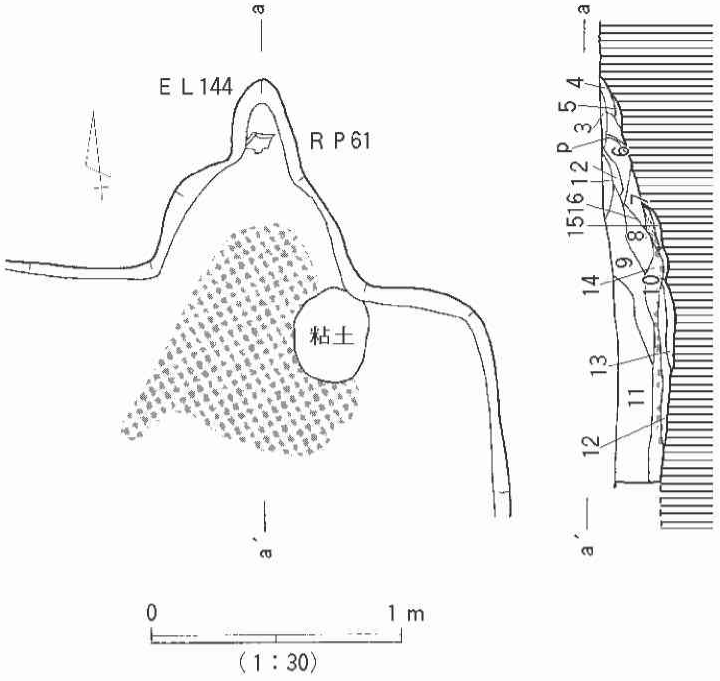
ＥＫ169（ｃ－ｃ´）
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルトと10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトが斑に混じり、やや鉄分を帯びる
2　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトが20％混じる
3　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトが５％混じる
4　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトが10％混じる
5　４に10ＹＲ２/１黒色粘質シルトの小ブロックが少量入る
6　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトに10ＹＲ３/３暗褐色シルトの小ブロックが３％混じる

ＥＫ170（ｄ－ｄ´）
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが５％混じる（焼土を少量含む）
2　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトに10ＹＲ３/３暗褐色シルトの小ブロックが20％混じる
3　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色砂質シルトに10ＹＲ３/３暗褐色シルトの小ブロックが５％混じる

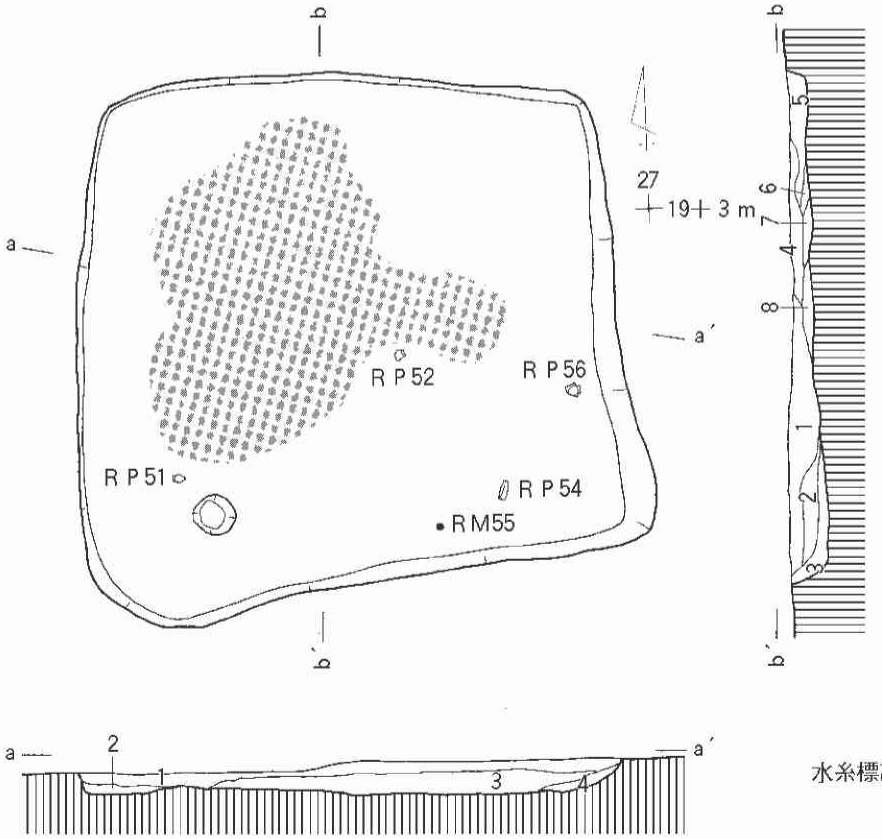
水糸標高96.5m

0　2 m
（1：60）

第５図　ＳＴ３竪穴住居跡



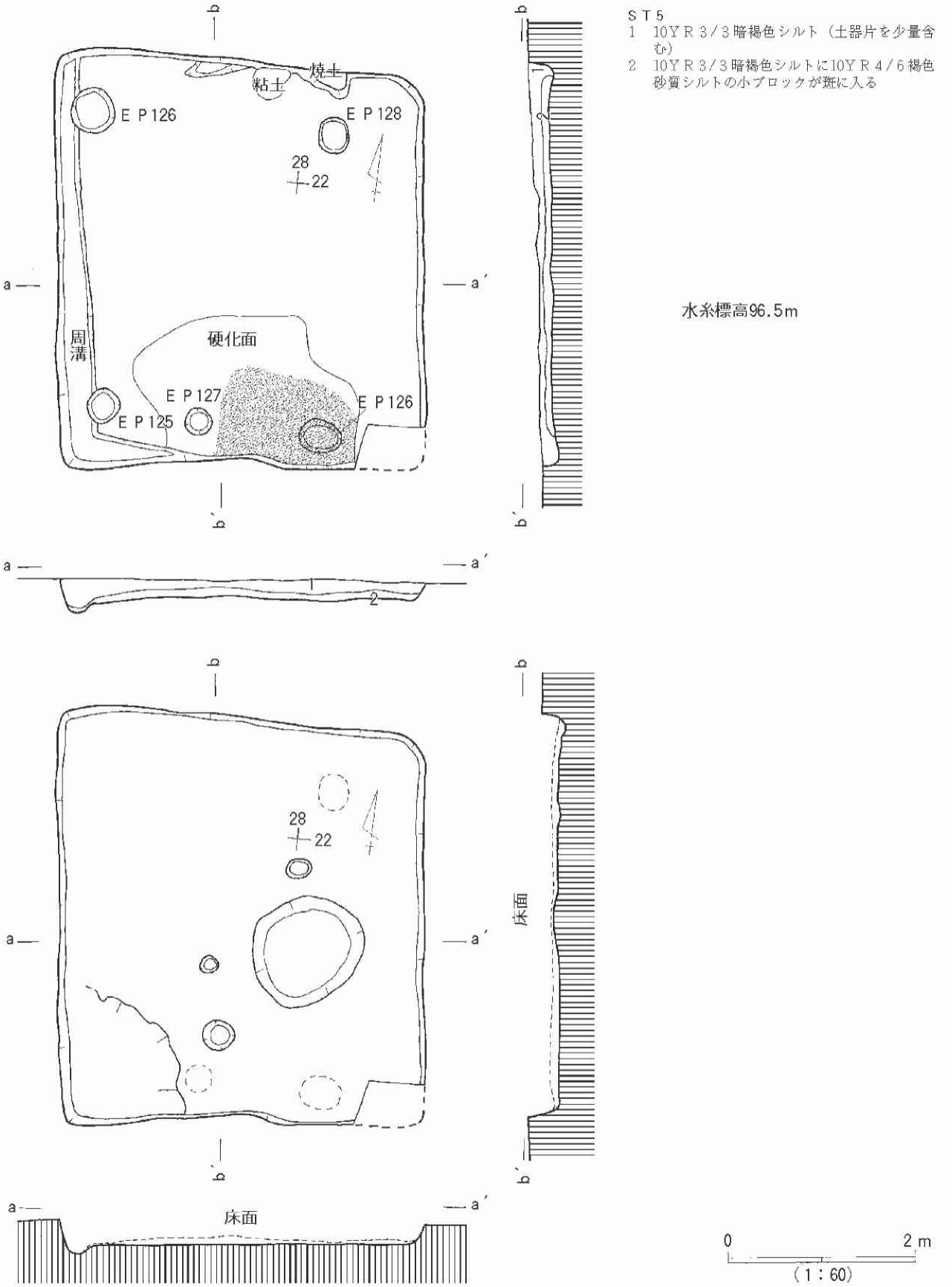
ＳＴ３－ＥＬ144
1　10ＹＲ３/２黒褐色シルト（被熱して極暗赤褐色に変色）
2　５ＹＲ２/４極暗赤褐色
3　10ＹＲ３/２黒褐色シルトに焼土の小ブロックが30％混じる
4　10ＹＲ３/２黒褐色シルトに焼土の小ブロックが10％混じる
5　10ＹＲ３/２黒褐色シルトに焼土の小ブロックが３％混じる
6　焼土に10ＹＲ３/２黒褐色シルトの小ブロックが３％混じる
7　４と同じ
8　10ＹＲ４/４褐色砂質シルトに10ＹＲ３/２黒褐色シルトの小ブロックが10％入る
9　10ＹＲ３/２黒褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色砂質シルトの小ブロックが10％入る（炭化物と焼土を少量含む）
10　９と同じ（炭化物を多量に含む）
11　10ＹＲ３/２黒褐色シルト（炭化物と焼土を少量含む土器片を含む）
12　炭化物（しまり弱い）
13　焼土と細砂が斑に混じる
14　10ＹＲ２/３黒褐色砂質シルト
15　10ＹＲ２/３黒褐色砂質シルトに焼土が少量混じる
16　焼土



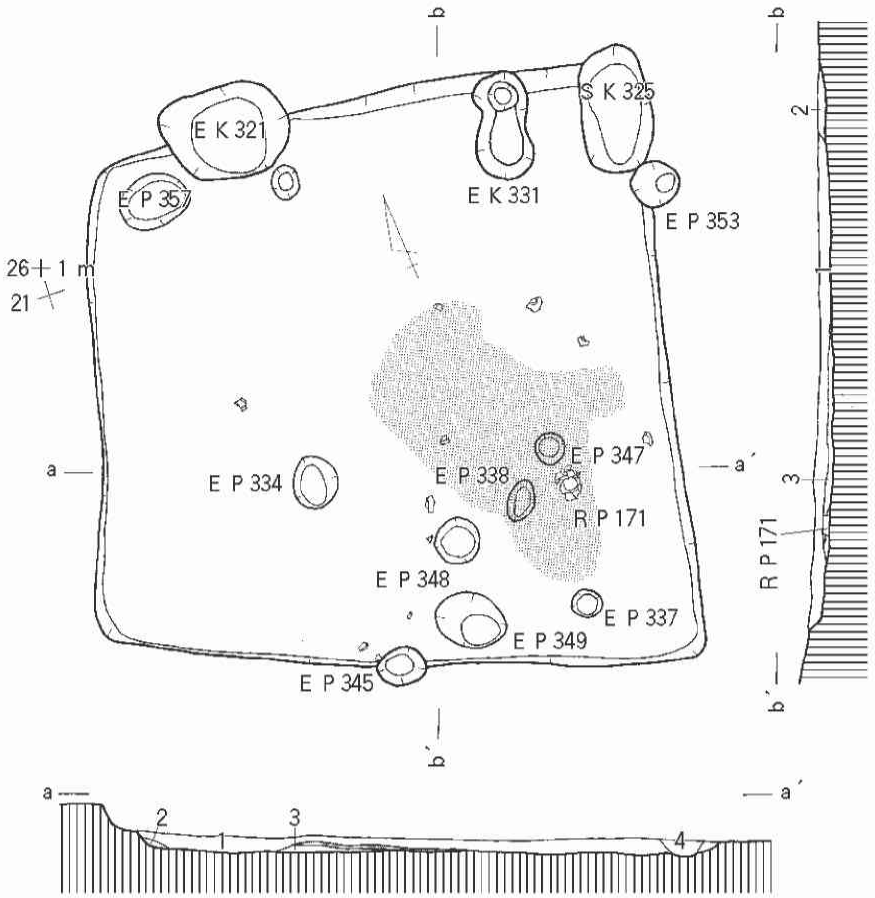
ＳＴ４（ｂ－ｂ´）
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（土器片と小粒の炭化物を少量含む）
2　１に10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックが斑に入る
3　１とほぼ同じ（焼土が入りやや粘る）
4　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに粗砂が入る
5　４に炭化物が入る
6　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに焼土の小ブロックが多量に入る
7　10ＹＲ２/３黒褐色粗砂
8　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックが斑に入る

ＳＴ４（ａ－ａ´）
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（土器片と小粒の炭化物を少量含む）
2　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックが斑に入る
3　10ＹＲ３/２黒褐色シルト（やや粘る）
4　２とほぼ同じ（やや粘る）

第６図　ＳＴ竪穴住居跡・カマド・ＳＴ４竪穴住居跡



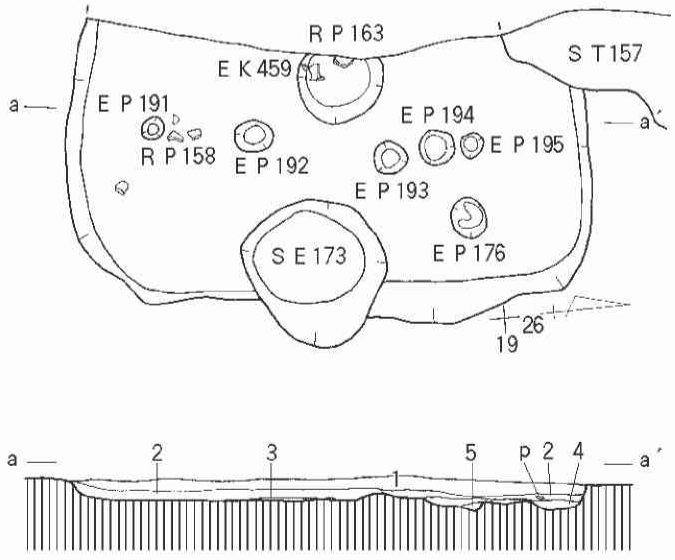
第７図　ＳＴ５竪穴住居跡、同貼床除去後



ＳＴ190（ａ－ａ′）
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（小粒の土器片を含む）
2　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色細砂が少量入る
3　２とほぼ同じ（焼土粒を含む）
4　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに焼土と10ＹＲ４/４褐色細砂が少量入る

ＳＴ190（ｂ－ｂ′）
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（小粒の土器片を含む）
2　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色細砂が少量入る
3　２とほぼ同じ（焼土粒を含む）

水糸標高96.4m

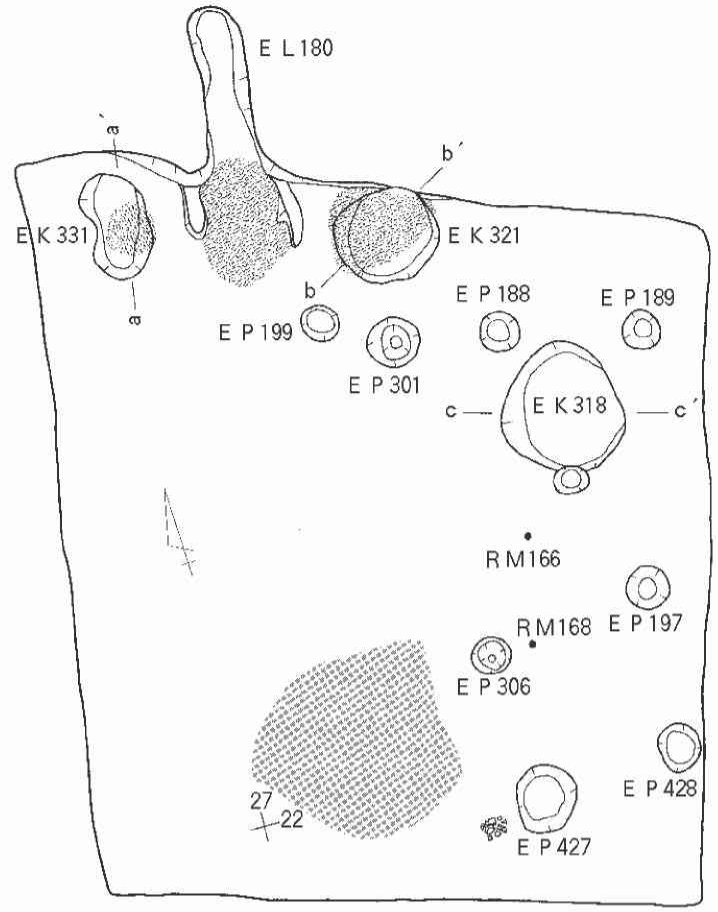


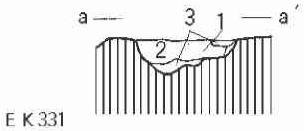
ＳＴ157
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（小粒の炭化物と土器片を少量含む）
2　10ＹＲ６/４にぶい黄褐色粘質土に10ＹＲ２/３黒褐色シルトの小ブロックが５％入る
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ６/４にぶい黄褐色粘質土が５％入る
4　炭化物に焼土が混じる（しまり弱い）
5　10ＹＲ２/３黒褐色粘質土
6　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに炭化物が多量に入る

水糸標高96.5m

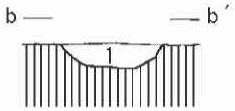
0　2 m
（１：60）

第８図　ＳＴ190・ＳＴ157竪穴住居跡

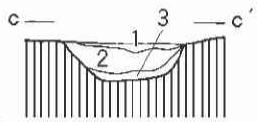




E K 331
1　10YR 2/3黒褐色シルト（炭化物を少量含む）
2　10YR 3/3暗褐色シルト（炭化物を微量含む）
3　10YR 2/3黒褐色シルト



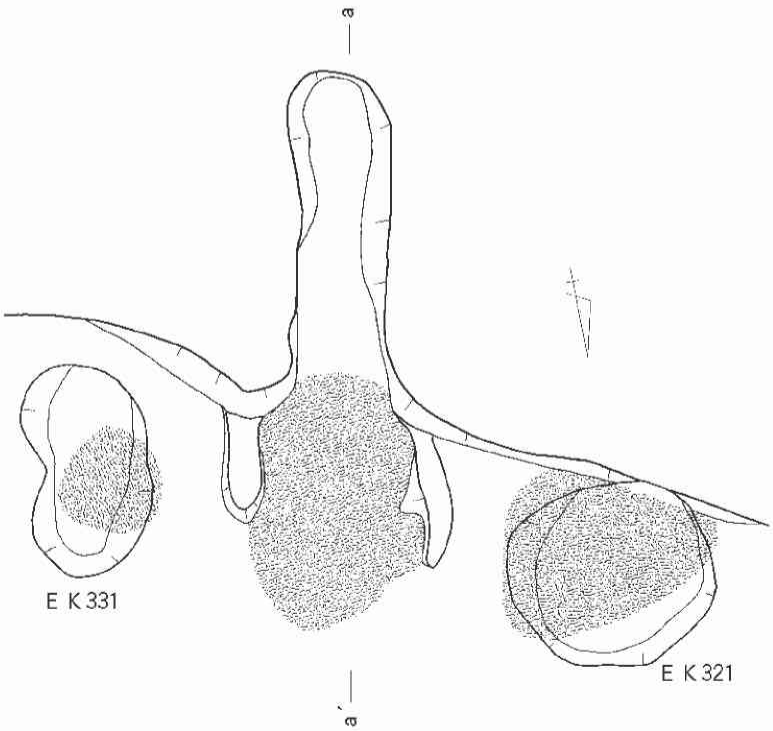
E K 321
1　10YR 2/3黒褐色シルトに多量の焼土が入る（炭化物を含む）

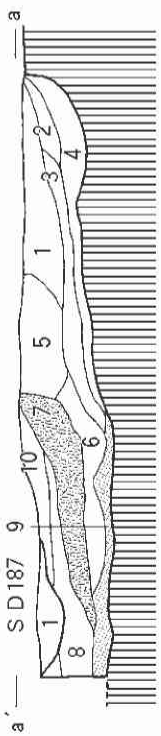


E K 318
1　10YR 3/3暗褐色シルト（炭化物と焼土を微量含む）
2　10YR 3/4暗褐色シルトに10YR 4/2灰黄褐色粘質シルトの小ブロックが入る（小粒の焼土、炭化物を含む）
3　10YR 3/4暗褐色粘質シルト（炭化物と焼土を微量含む）

水糸標高96.2m

（1：60）





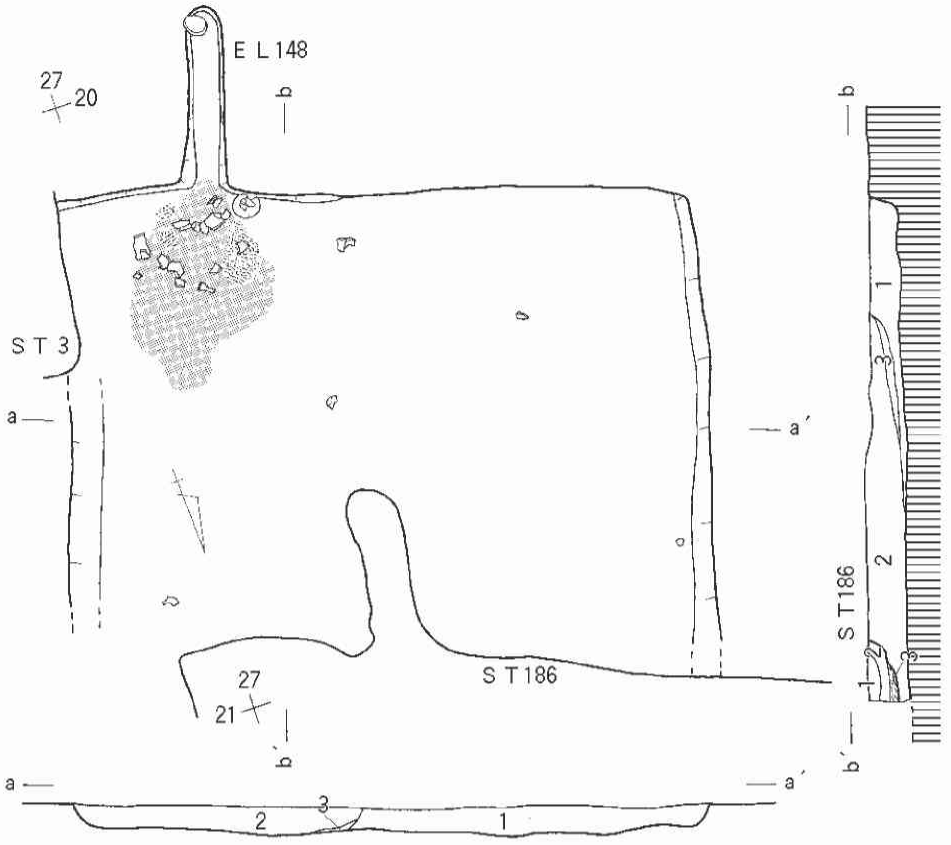
S T 186－E L 180
1　焼土に10YR 3/3暗褐色シルトの小ブロックが少量入る（しまり弱い）
2　10YR 3/3暗褐色シルトに焼土の小ブロックが50%混じる
3　2とほぼ同じ（やや砂質を帯びる）
4　3とほぼ同じ（焼土を多量に含む）
5　焼土（被熱のため硬化する）
6　1と同じ
7　10YR 3/3暗褐色シルト（小粒の焼土を少量含む）
8　10YR 3/3暗褐色シルト
9　炭化物層（少量の焼土を含む）
10　炭化物層（しまりなし）

S D 187
1　10YR 3/3暗褐色シルト（炭化物を少量含む）

水糸標高96.4m

（1：60）

第9図　S T 186竪穴住居跡・カマド

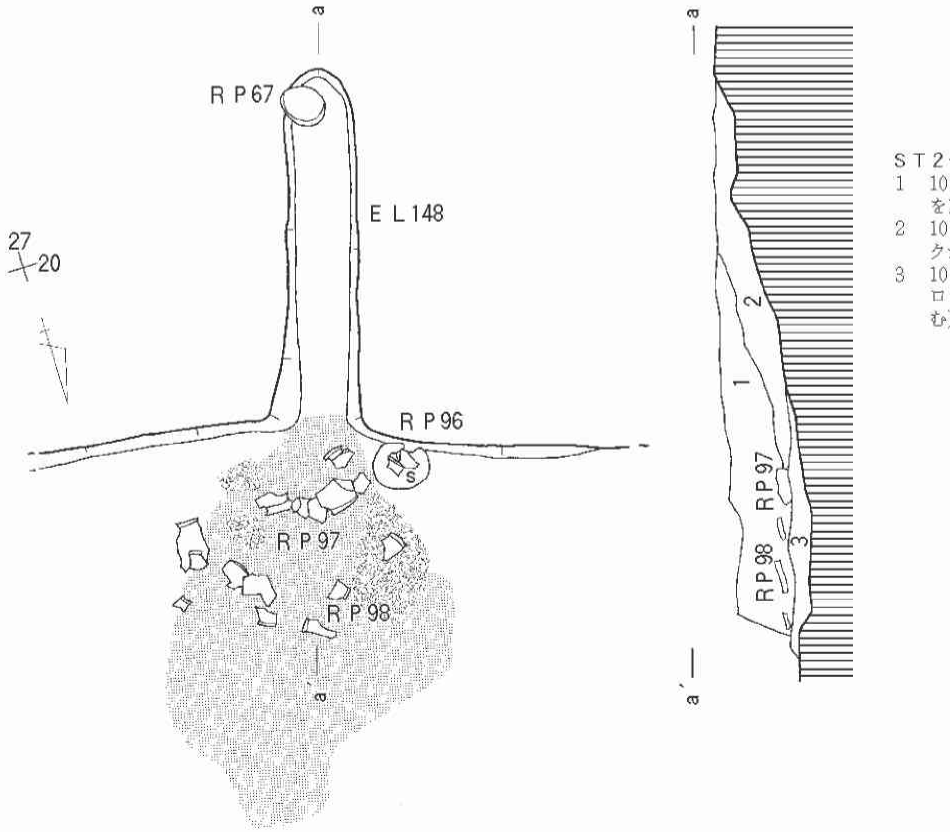


ＳＴ２（ａ－ａ´）
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（小粒の炭化物と焼土、土器片を含む）
2　１とほぼ同じ（１より炭化物の割合が高い）
3　１に焼土と炭化物が多量に混じる

ＳＴ２（ｂ－ｂ´）
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（小粒の炭化物と焼土、土器片を含む）
2　１とほぼ同じ（１より炭化物の割合が高い）
3　１に焼土と炭化物が多量に混じる

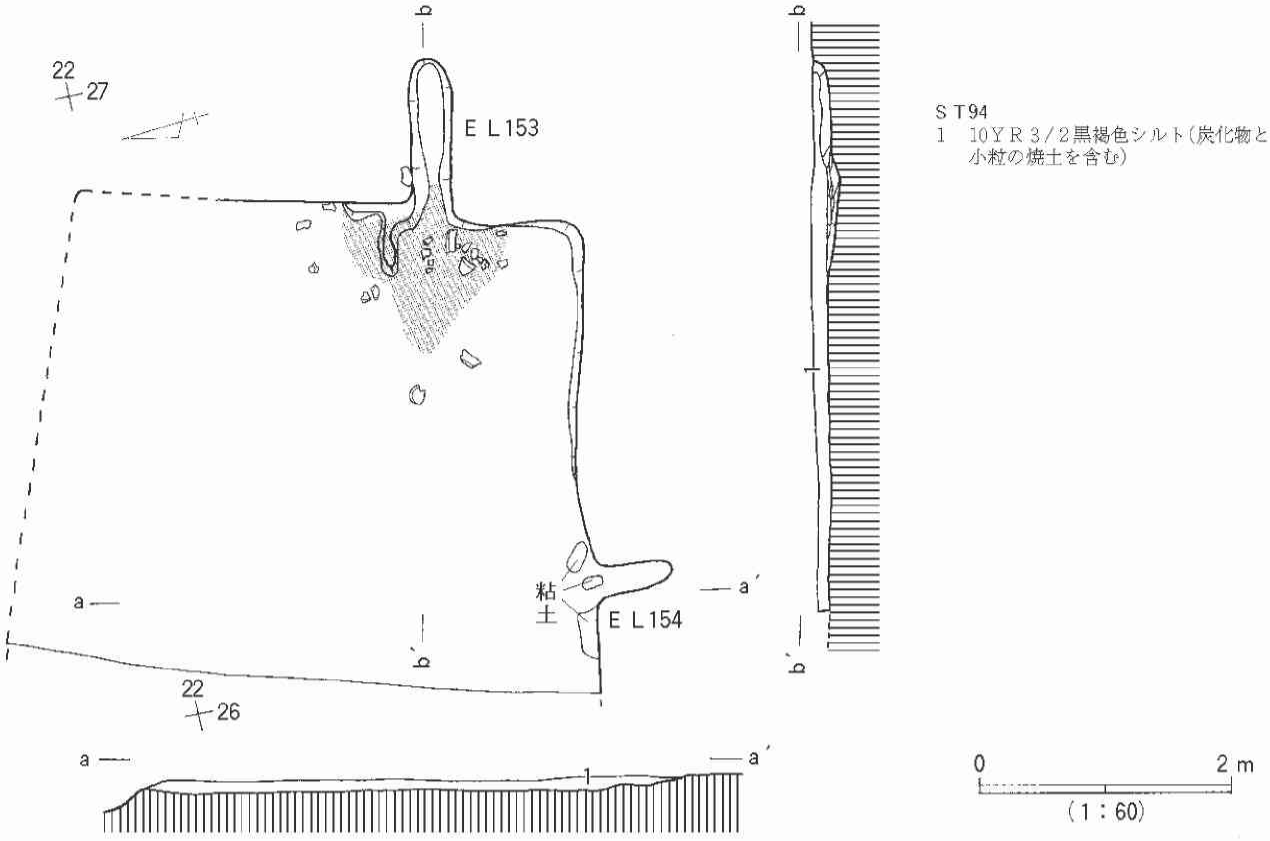
ＳＴ186（ｂ－ｂ´）
1　炭化物と焼土の混合層
2　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（炭化物が少量入る、底面に焼土を多量に含む）
3　焼土

水糸標高96.5m

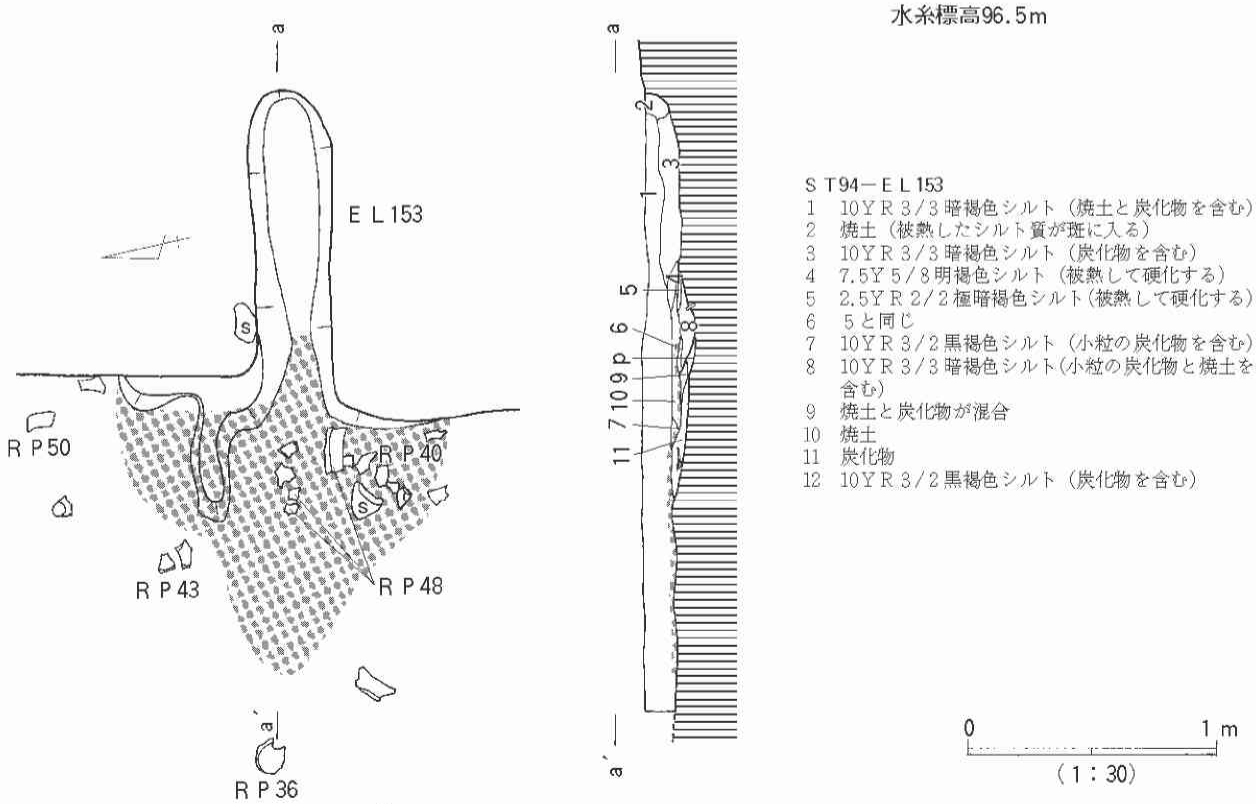


ＳＴ２－ＥＬ148
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（焼土ブロックを10％含む）
2　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに焼土ブロックが斑に入る
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに焼土の小ブロックが多量に入る（炭化物を多量に含む）

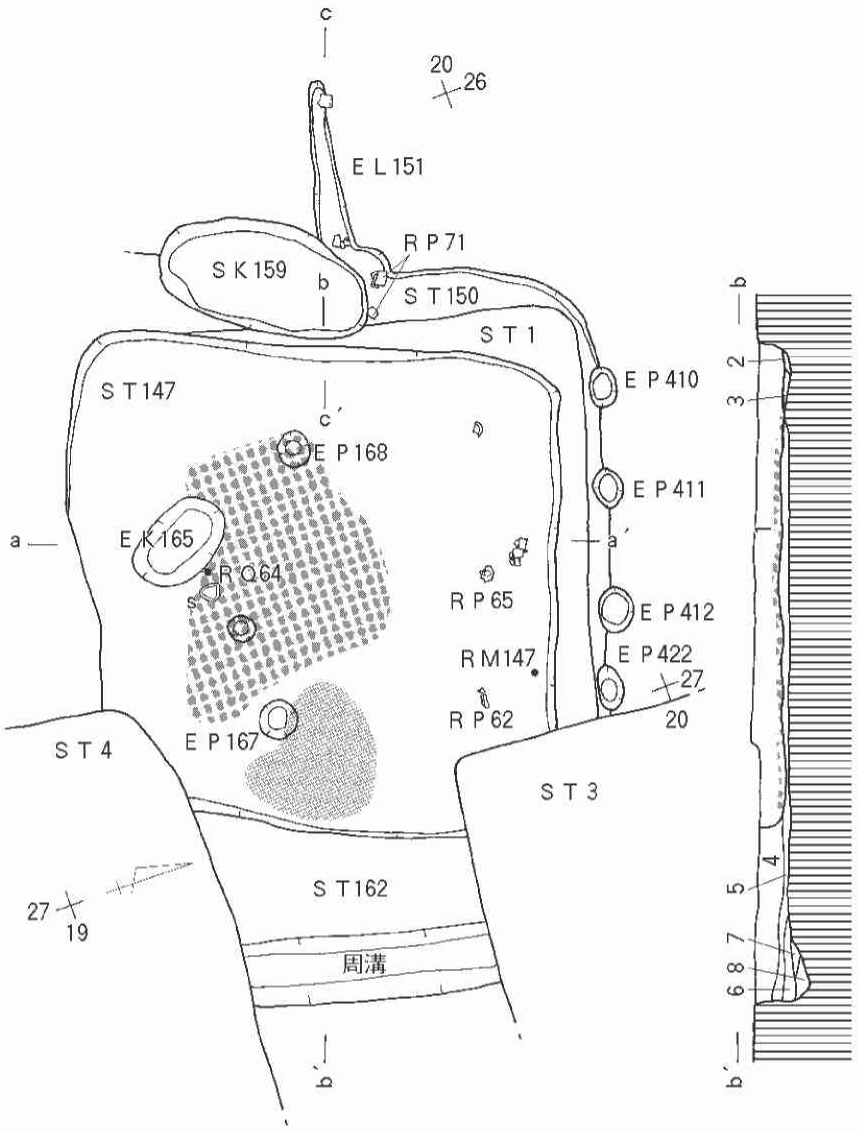
第10図　ＳＴ２竪穴住居跡・カマド



水糸標高96.5m

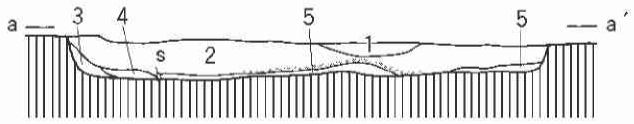


第11図　ＳＴ94竪穴住居跡・カマド

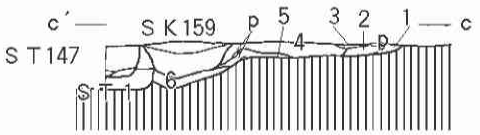


S T 162・147（b－b′）
1　10Y R 2/3黒褐色シルトに10Y R 4/4褐色シルトの小ブロックが30%入る
2　10Y R 2/3黒褐色シルトに10Y R 4/4褐色シルトの小ブロックが10%入る
3　10Y R 3/2黒褐色シルトに焼土と小粒の炭化物が斑に入る
4　3とほぼ同じ(炭化物を多量に含む)
5　10Y R 3/2黒褐色シルトに10Y R 4/4褐色砂質シルトの小ブロックが斑に入る

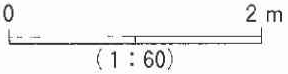
水糸標高96.5m



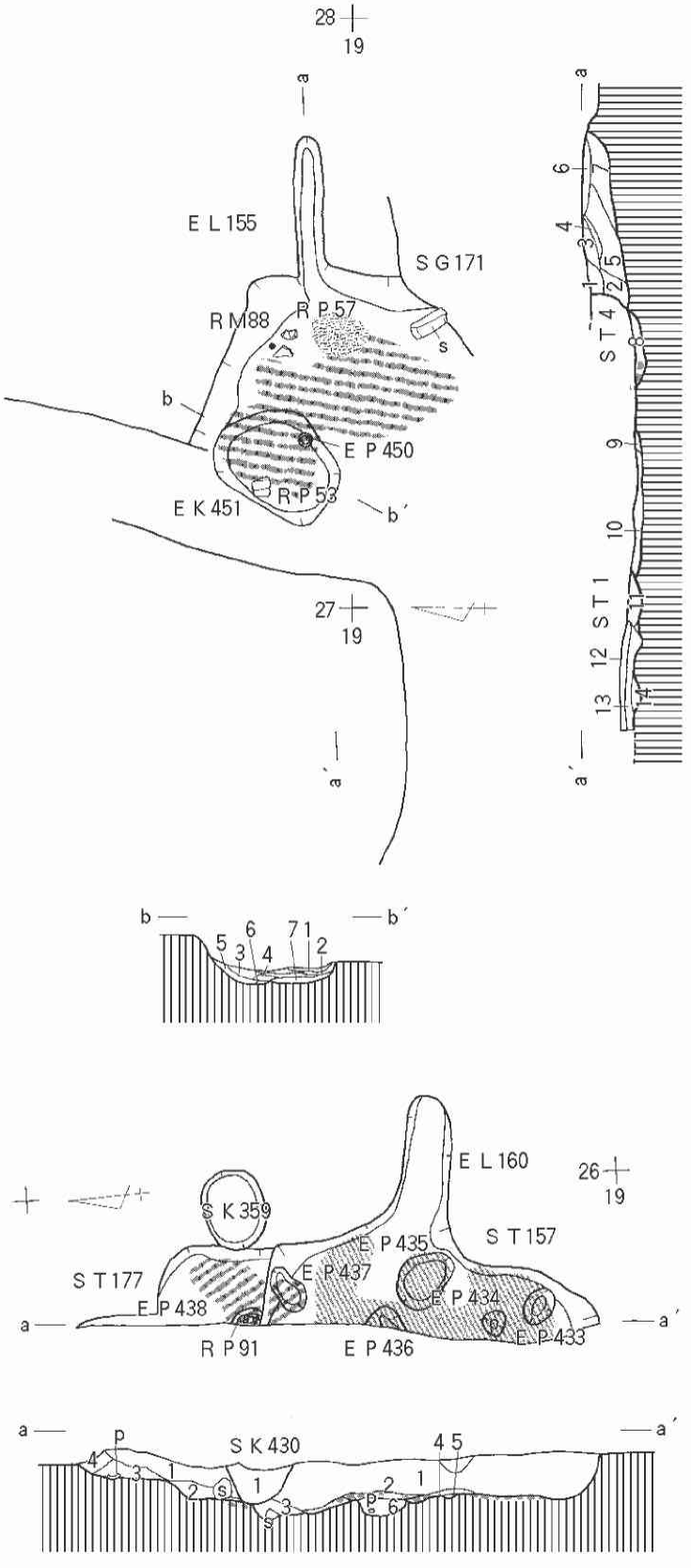
S T 147（a－a′）
1　10Y R 3/3暗褐色シルト（0.5～1㎝の炭化物、7.5Y R 5/8明褐色シルト10Y R 4/6褐色シルトが斑に混じる、焼土粒と土器片を含む）
2　10Y R 3/4暗褐色シルト（0.5～1㎝の炭化物を含み、10Y R 4/4褐色砂質シルト10Y R 5/3にぶい黄褐色シルトが斑に混じる）
3　10Y R 3/3暗褐色粘質土（小粒の炭化物、1㎝の焼土を含む）
4　10Y R 3/3暗褐色シルトに10Y R 5/4にぶい黄褐色粘質シルトが斑に混じる、7.5Y R明褐色シルトを微量含む
5　10Y R 2/3黒褐色粘質シルトに10Y R 5/4黄褐色粘質シルトと小粒の炭化物と焼土が混じる



S T 150－E L 151（c－c′）
1　5Y R 3/2暗赤褐色シルト
2　5Y R 3/2暗赤褐色シルトに10Y R 2/3黒褐色シルトの小ブロックが10%入る
3　10Y R 2/3黒褐色シルト
4　10Y R 2/3黒褐色シルトに小粒の焼土が斑に混じる
5　10Y R 3/3暗褐色シルトに小粒の焼土と炭化物が入る
6　10Y R 3/3暗褐色シルトに10Y R 4/4褐色シルトの小ブロックが斑に入る



第12図　S T 147・150・162竪穴住居跡



ＳＴ161－ＥＬ155ＳＴ1
1　10ＹＲ２/２黒褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックが30％混じる
2　10ＹＲ２/２黒褐色シルトに焼土の粒と炭化物が入る
3　焼土
4　10ＹＲ３/２黒褐色シルト
5　10ＹＲ３/２黒褐色シルトに焼土が多量に入る
6　10ＹＲ３/２黒褐色シルトに小粒の焼土が入る
7　10ＹＲ３/２黒褐色シルトに小粒の焼土と炭化物が入る
8　焼土層（西壁に炭化物を含む）
9　焼土と10ＹＲ２/３黒褐色シルトが斑に混じる
10　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/６褐色砂質シルトの小ブロックが斑に入る
11　10ＹＲ２/３黒褐色シルトと10ＹＲ４/６褐色砂質シルトの中ブロックが斑に混じる
12　10ＹＲ２/３黒褐色シルト
13　10ＹＲ２/２黒褐色シルトと10ＹＲ３/４暗褐色シルトの小ブロックが斑に混じる
14　６とほぼ同じ（やや粘る）

ＥＫ451
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（炭化物を少量含む上層が被熱して変色）
2　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ３/４暗褐色砂が斑に入る（炭化物と土器片を少量含む）
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトの小ブロックと10ＹＲ３/４暗褐色微砂と焼土粒が斑に入る
4　10ＹＲ３/３暗褐色シルト｜
5　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ２/２黒褐色シルトの小ブロックが３％入る（やや砂質を帯びる）
6　10ＹＲ４/４褐色微砂に10ＹＲ３/４暗褐色シルトの小ブロックが少量入る
7　10ＹＲ３/４暗褐色シルト（やや砂質を帯びる、小粒の炭化物を少量含む）

ＳＴ179
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト
2　10ＹＲ２/２黒褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色シルトの小ブロックが３％入る（土器片を少量含む）
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（焼土粒を多量に含む）
4　３とほぼ同じ

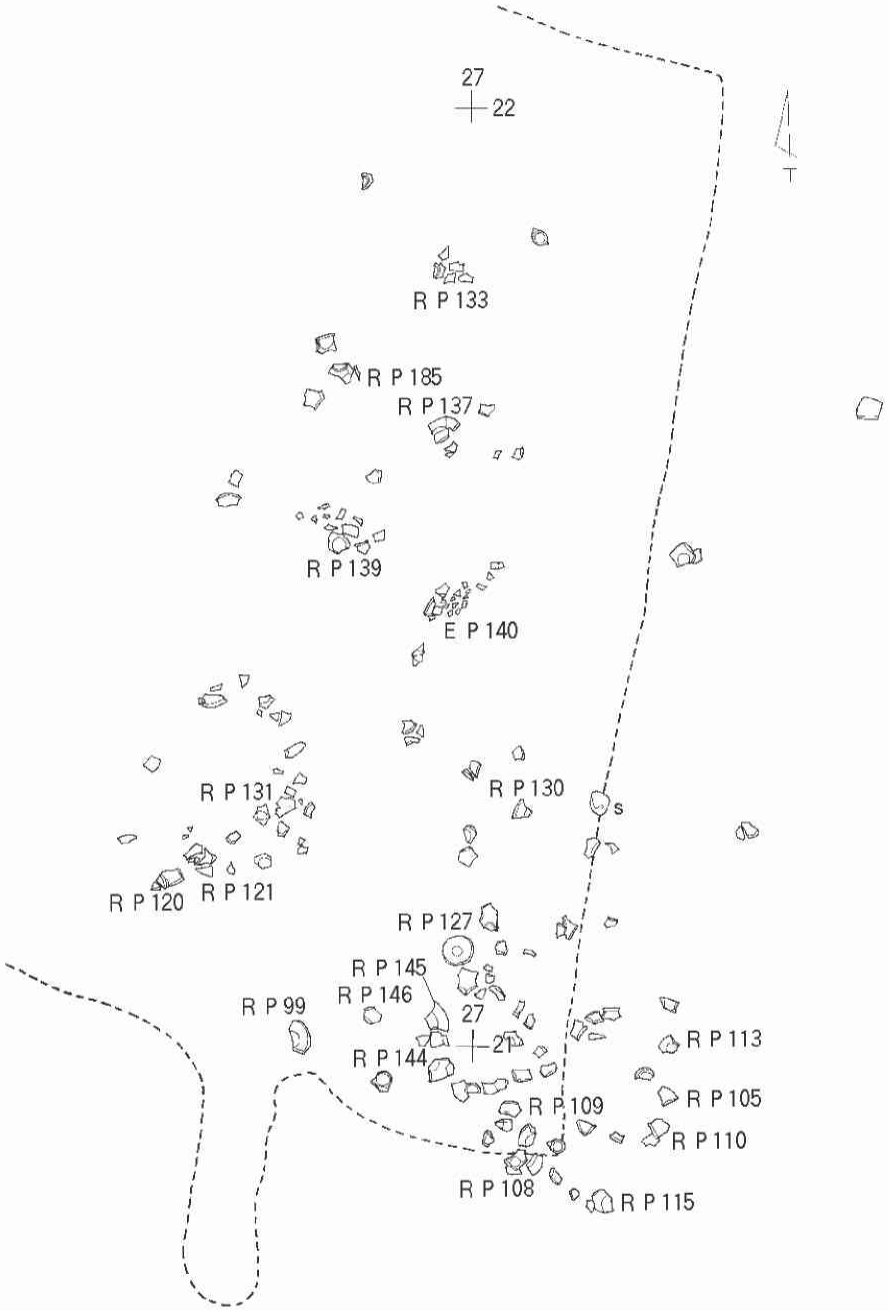
ＳＫ430
1　10ＹＲ２/２黒褐色シルト（煙道を切る）

ＳＴ157
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト（土器片と小粒の炭化物を含む）
2　10ＹＲ６/４にぶい黄褐色粘質土に10ＹＲ２/３黒褐色シルトが３％入る
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ６/４にぶい黄褐色粘質土が５％入る
4　炭化物に焼土が混じる（しまり弱い）
5　10ＹＲ２/３黒褐色粘質土
6　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに炭化物が多量に入る

水糸標高96.5m

0　2 m
（1：60）

第13図　ＳＴ161・179・157竪穴住居跡



0 1 m
(1：40)

第14図　ＳＸ431土器捨て場

2　井戸跡

今回の調査で検出された井戸跡は、総計14基を数え、Ａ区のＳＤ235溝跡の周りに分布している。どの井戸跡も素掘りの井戸跡で、下半が膨らんだ形状を呈するものが多い。

ＳＥ281井戸跡（第16図）

21－16区に位置する。平面形状は長軸1.6m、短軸1.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.1mを測る。南壁下部で壁面の崩落があり、南側に抉れが見られる。覆土は４層からなり、黒褐色のシルトを基調とする。１層に炭化物と焼土を含み、下層ほど粘性が強くなる。最下層には、黄褐色の地山ブロックの混入が見られる。覆土から平安時代の土師器片が出土している。

ＳＥ247井戸跡（第16図・図版２）

21－15区に位置する。平面形状は長軸1.9m、短軸1.8mの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.1mを測る。覆土は６層からなり、暗褐色のシルトを基調としている。各層で褐色の細砂と炭化物の混入が見られ、最下層は粘性が強くなる。覆土から平安時代の土師器片や須恵器の甕の体部が出土している。

ＳＥ276井戸跡（第16図）

21－14区に位置する。平面形状は直径１mの円形を呈し、確認面からの深さは0.7mを測る。今回検出された井戸跡の中では最小の規模である。底面より常時湧水が見られ、調査期間中も水が貯まっていた。覆土は４層からなり、暗褐色のシルトを基調としている。２層に炭化物の混入が認められ、下層ほど粘性が強い。覆土からの遺物の出土はなかったが、覆土の色調が他の井戸跡と似ていることから平安時代のものと考えられる。

ＳＥ215井戸跡（第17図）

22－17区に位置する。東側半分が調査区外のため西側だけの検出である。検出した部分から推定される平面形状は、長軸1.7m、短軸1.4mの楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは1.1mを測る。覆土は６層からなり、黒褐色のシルトを基調として、にぶい黄褐色の地山の混入が認められる。下層に行くほど粘性が強く、最下層は黒色の粘質土である。北壁下部で壁面の崩落による抉れが確認できる。遺物の出土はなかったが、平面形状及び覆土の色調が他の井戸跡と似ていることから平安時代のものと考えられる。

ＳＥ201井戸跡（第17図）

22－18区に位置し、南側部分のみの検出である。検出された部分から推定される平面形状は、長軸1.6m、短軸１mの楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは１mを測る。覆土は４層からなり黒褐色のシルトを基調とする。南壁下部で壁面の崩落があり抉れが確認できる。覆土から平安時代の土師器片が出土している。

ＳＥ280井戸跡（第17図・図版２）

21－17区に位置する。北側半分が調査区外のため、南側のみの検出となる。平面形状は不明であるが、検出された部分から推定される平面形状は、直径1.3mの円形を呈すると思われる。確認面からの深さは1.2mを測る。覆土は６層からなり、黒褐色のシルトを基調とする。上層で炭化物を少量含み、暗褐色砂質シルトの混入が認められる。下層ほど粘性が強い。東壁下部

に壁面崩落による抉れが確認できる。遺物の出土はなかったが、規模及び覆土の色調の類似等から平安時代のものと考えられる。

ＳＥ284井戸跡（第18図）

21－16区に位置する。平面形状は直径1.6ｍの円形を呈し、確認面からの深さは１ｍを測る。覆土は６層からなり黒褐色のシルトを基調とする。１層は炭化物を含み、３層には焼土の混入が見られる。下層ほど粘性が強く、最下層で黄褐色の土壌の混入が見られる。覆土から平安時代の土師器片や須恵器片が出土している。

ＳＥ273井戸跡（第18図・図版２）

20－15区に位置する。平面形状は直径1.6ｍの円形を呈し、確認面からの深さは１ｍを測る。覆土は暗褐色のシルトを基調とする５層よりなる。１層に小粒の炭化物の混入が認められ、２層にこぶし大の礫を多く含む。遺物の出土はなかったが、覆土の色調が他の井戸跡と似ていることから平安時代のものと考えられる。

ＳＥ243井戸跡（第18図）

21－16区に位置する。平面形状は長軸２ｍ、短軸1.7ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.1ｍを測る。覆土は14層からなり、暗褐色のシルトを基調とする。土器片や炭化物の混入が認められる層もある。北壁下部に壁面崩落による抉れが認められる。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。

ＳＥ214井戸跡（第19図）

22－17区に位置する。平面形状は直径1.4ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは1.2ｍを測る。覆土は５層よりなり、黒褐色のシルトを基調とする。１層に土器片を含み、下層ほど粘性が強くなる。壁面の崩落により下半が抉れた形状を呈する。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。

ＳＥ244井戸跡（第19図）

21－16区に位置し、平面形状は直径1.7ｍの円形を呈する。確認面からの深さは、1.2ｍを測る。覆土は７層からなり、暗褐色のシルトを基調とする。３層と５層の間に厚さ４㎝ほどの炭化物の層が確認でき、２層から４層まで炭化物の混入が認められる。東壁下部に壁面崩落による抉れが認められる。遺物の出土はなかったが、規模及び覆土の色調の類似等から平安時代のものと考えられる。

ＳＥ208井戸跡（第19図）

22－17区に位置する。平面形状は直径1.5ｍの円形を呈し、確認面からの深さは、1.2ｍを測る。覆土は６層よりなり、黒褐色のシルトを基調とする。１、２層に焼土と炭化物の混入が見られる。壁面の崩落と思われる黄褐色のやや粘質を帯びる４層が確認できる。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。

ＳＥ268井戸跡（第20図・図版２）

21－14区に位置し、平面形状は長軸1.8ｍ、短軸1.7ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.2ｍを測る。覆土は９層よりなり、暗褐色のシルトを基調とする。１層に炭化物の混入が

認められ、２～４層に黄褐色シルトの混入が見られる。下層に行くほど粘性が強い。下半に壁面崩落による抉れが認められる。遺物の出土はなかったが、規模及び覆土の色調の類似等から平安時代のものと考えられる。

ＳＥ218井戸跡（第20図）

22－17区に位置し、長軸1.8mを測る。短軸はＳＫ220土坑に切られるため断定できないが、推定で1.4mと考えられ、平面形状は楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは1.2mを測る。覆土は、黒褐色のシルトを基調とする８層からなり、褐色の細砂の混入が認められる。南壁中央に壁面崩落による抉れが認められる。遺物の出土はなかったが、覆土の色調が他の井戸跡と似ているため平安時代のものと考えられる。

３　土坑

ＳＫ23土坑（第15図・図版２）

26－17区に位置し、平面形状は長軸1.4m、短軸1.2mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.5mを測る。壁は西側のみが急に立ち上がり、他は緩やかに立ち上がる。覆土は３層からなり、暗褐色のシルトを基調とする。全ての層に焼土と炭化物の混入が認められる。下層ほど炭化物の混入量が多く、全体的にしまりは弱い。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。ＳＫ24土坑を切る。

ＳＫ24土坑（第15図・図版２）

26－17区に位置し、平面形状は１辺が1.9mの方形を呈する。確認面からの深さは、1.1mを測る。壁は４面ともほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ平坦である。覆土は１層で、暗褐色シルトに褐色砂質シルトの混入が認められる。全体的に炭化物と焼土の混入が認められ、均一な層であることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。底面より常時湧水が見られ、現地調査中も水が貯まっていることから井戸跡とも考えられるが、井戸枠の痕跡もなく、井戸跡と決定する要因に乏しい。ＳＧ171河川跡を切る。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が多数出土している。

ＳＫ220土坑（第20図）

22－17区に位置し、平面形状は、長軸1.5m、短軸1.3mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.4mを測る。覆土は２層からなり、１層は褐色の細砂である。２層は暗褐色のシルトで炭化物を少量含む。ＳＥ218井戸跡・ＳＫ221土坑を切る。覆土から平安時代の土師器片が出土している。

ＳＫ221土坑（第20図）

22－17区に位置する。ＳＫ220土坑及びＳＥ218井戸跡に切られ、全体が把握できないため、平面形状、規模、及び深さは不明である。覆土は１層の暗褐色のシルトで、土師器片を含んでおり、平安時代のものと考えられる。一部分だけの検出のため断定はできないが、北側の壁が緩やかに立ち上がっており、他の井戸跡とは明らかな違いが認められることから、土坑と推定している。

3　溝跡

今回の調査では７条の溝跡が確認されている。出土遺物から、古墳時代の溝跡が１条、平安時代の溝跡が６条である。古墳時代のものは、やや弯曲しながら南北方向に走る。これに対して平安時代のものは、いずれも東西方向に走っている。また、ＳＤ235・163溝跡は、昨年度の３次調査で検出された溝跡に連続すると考えられる。

ＳＤ429溝跡（第21図）

Ｂ区25－17～25－18区に位置し、南北方向に走る。幅0.3～0.5m、深さ0.4mを測る。壁は急に立ち上がる。覆土は暗褐色のシルトを基調とする３層からなり、黄褐色シルトの混入が認められる。底面から古墳時代（５世紀代）の土師器甕（96）が出土している。後述する平安時代の溝跡が東西方向に走るのに対して、このＳＤ429溝跡はやや弯曲しながら南北方向に走っている。南北端は、他の遺構に切られて確認できないため、全体は不明である。ＳＤ40溝跡、ＳＫ23・24土坑に切られる。

ＳＤ40溝跡（第21図・図版１）

Ｂ区25－18～27－17区に位置し、東西方向に走る。幅0.5～0.9m、深さ0.3mを測る。覆土は暗褐色のシルトを基調とし、全体に褐色シルトの混入が認められ、下層ほどその混入量が多くなっている。壁は緩やかに立ち上がる。東西端が調査区外に伸びており全体をうかがうことはできないが、調査区の更に東西方向に伸びることが確認できる。覆土から平安時代の須恵器や土師器の破片が出土している。ＳＤ429溝跡を切る。

ＳＤ235溝跡（第22図）

Ａ区21－17～23－16区に位置し、東西方向に走る。幅0.8～１m、深さ0.2～0.3mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色のシルトを基調とする２層で、黄褐色砂質シルトの混入が認められる。底面から平安時代の須恵器坏（92）が出土している。検出された位置、方向、規模などから考えて、昨年の第３次調査で検出された溝跡に連続すると考えられ、後述するＢ区で検出されたＳＤ163溝跡に連続すると思われる。ＳＤ217溝跡を切り、ＳＥ280・281井戸跡、ＳＫ283土坑に切られる。

ＳＤ163溝跡（第22図）

Ｂ区25－15～27－15区に位置し、東西方向に走る。幅1.3～1.6m、深さ0.3mを測る。今回の調査で検出された溝跡の中では、最大規模の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は２層からなり、黒褐色のシルトを基調とする。上層で炭化物と土器片の混入が認められ、下層では黄褐色砂質シルトが混入する。底面で平安時代の須恵器甕（93）が出土している。検出位置、方向、規模などから考えて、Ａ区で検出されたＳＤ235溝跡に連続すると考えられる。更に東方に伸びることが確認できる。

ＳＤ282溝跡（第23図）

Ｂ区22－17区に位置し、東西方向に走っている。幅0.4～0.5m、深さ0.3mを測る。南側が一段深くなり、壁は急に立ち上がる。覆土は黒褐色のシルトで微量ながら黄褐色砂質シルトの混入が認められる。ＳＤ217溝跡を切り、ＳＥ218･213井戸跡に切られる。覆土からの遺物の出

土はなかったが、ＳＥ213井戸跡に切られることから平安時代のものと考えられる。

ＳＤ217溝跡（第23図）

Ａ区21－17～23－17区に位置し、幅0.4～0.7m、深さ0.2mを測る。覆土は２層からなり、暗褐色のシルトを基調とし、黄褐色砂質シルトの混入が見られる。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。西側をＳＤ235溝跡に、東側を213井戸跡に切られるため全体は不明である。検出された位置、規模、方向などから考えて、Ｂ区で検出されたＳＤ18溝跡に連続すると考えられる。覆土からの遺物の出土はなかったが、ＳＤ235溝跡に切られることから平安時代のものと考えられる。

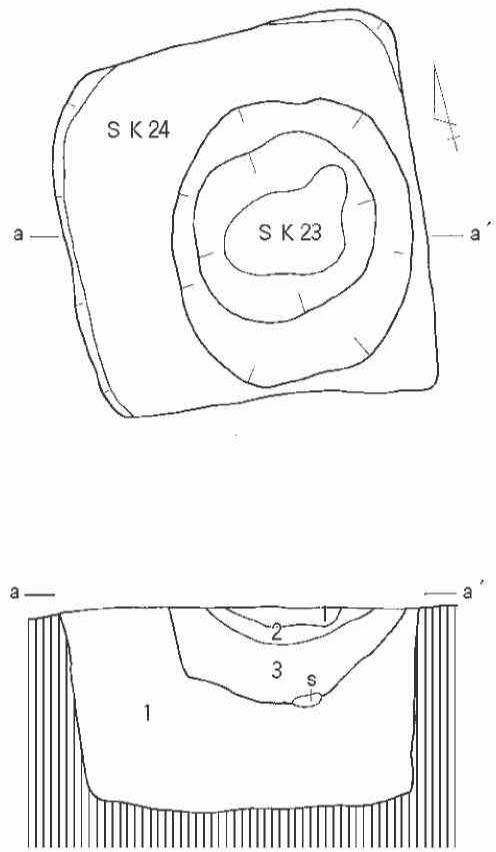
ＳＤ18溝跡（第23図・図版１）

Ｂ区25－16～27－16区に位置し、東西方向に走る。幅0.6～0.8m、深さ0.3mを測る。南壁は緩やかに、北壁は急に立ち上がり、溝の北側が一段深くなっている。覆土は、暗褐色のシルトを基調とする３層からなり、１層に土器片と炭化物が混入する。平安時代の須恵器坏（83）、須恵器高台付坏（85）、須恵器蓋（87）、土師器高台付坏（91）等が出土している。検出された位置、方向、及び規模などから考えて、Ａ区で検出されたＳＤ217溝跡に連続すると推測され、更に東方に伸びることが確認された。ＳＫ19土坑に切られる。

４　河川跡

ＳＧ171河川跡

Ｂ区北端及び、中央東側で砂の層の堆積を確認した。崩落の危険があるためトレンチを入れるだけの調査に留めたが、確認面から約50cmほどで湧水が見られた。一部分だけの検出のため断定はできないが、常時湧水が見られること、１m以上砂の堆積が確認できることから、河川跡と考えられる。また、２カ所で確認された河川跡が連続するものか否かは不明である。平安時代の須恵器高台付坏（97）、須恵器蓋（99）が出土している。ＳＫ24土坑、ＳＤ18・40溝跡に切られる。



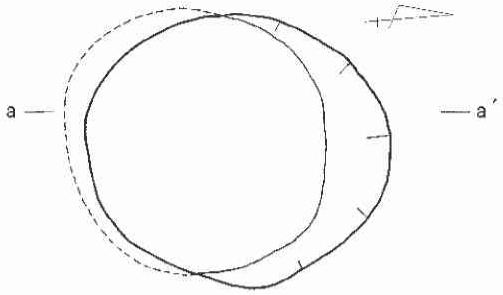
ＳＫ23
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ３/４暗褐色シルトの小ブロックを10％含む（小粒の炭化物を少量含む）
2　10ＹＲ２/２黒褐色シルト（焼土と小粒の炭化物を少量含む）
3　10ＹＲ1.7/１黒色土（焼土と炭化物が多量に入る、しまり弱い）

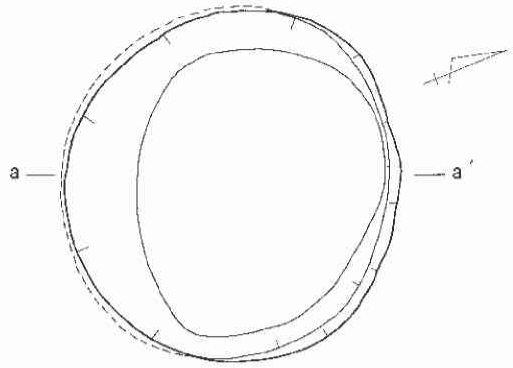
ＳＫ24
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色砂質シルトの小ブロックが斑に混じる（小粒の炭化物と焼土の小ブロックを含む）

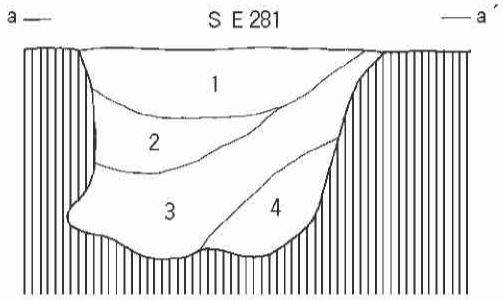
水糸標高96.5m

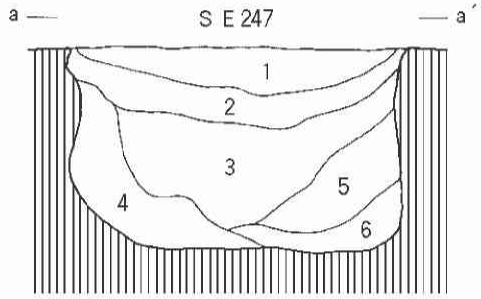
0　1m
（1：40）

第15図　ＳＫ23・24土坑



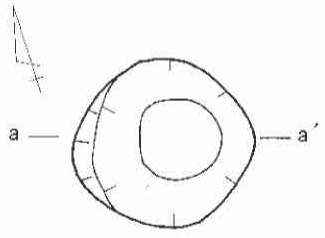


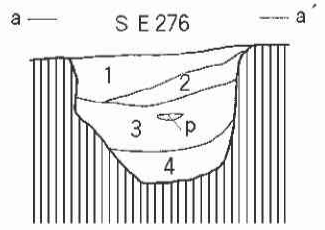




S E 281
1　10Y R 2/3 黒褐色シルト（炭化物と焼土を少量含む）
2　10Y R 2/3 黒褐色シルト
3　10Y R 2/2 黒褐色粘質土
4　10Y R 3/3 暗褐色砂質シルトに10Y R 4/3 にぶい黄褐色粘質シルトの小ブロックが斑に混じる

S E 247
1　10Y R 3/3 暗褐色シルトに10Y R 4/6 褐色細砂が斑に入る
2　10Y R 3/4 暗褐色シルト（小粒の炭化物を少量含む）
3　10Y R 3/3 暗褐色シルトと10Y R 4/6 褐色細砂がブロック状に斑に混じる
4　10Y R 4/1 褐灰色粘質土（やや砂質を帯びる）
5　10Y R 3/3 暗褐色シルトに10Y R 4/6 褐色細砂が斑に入る
6　3とほぼ同じ（やや粘る）



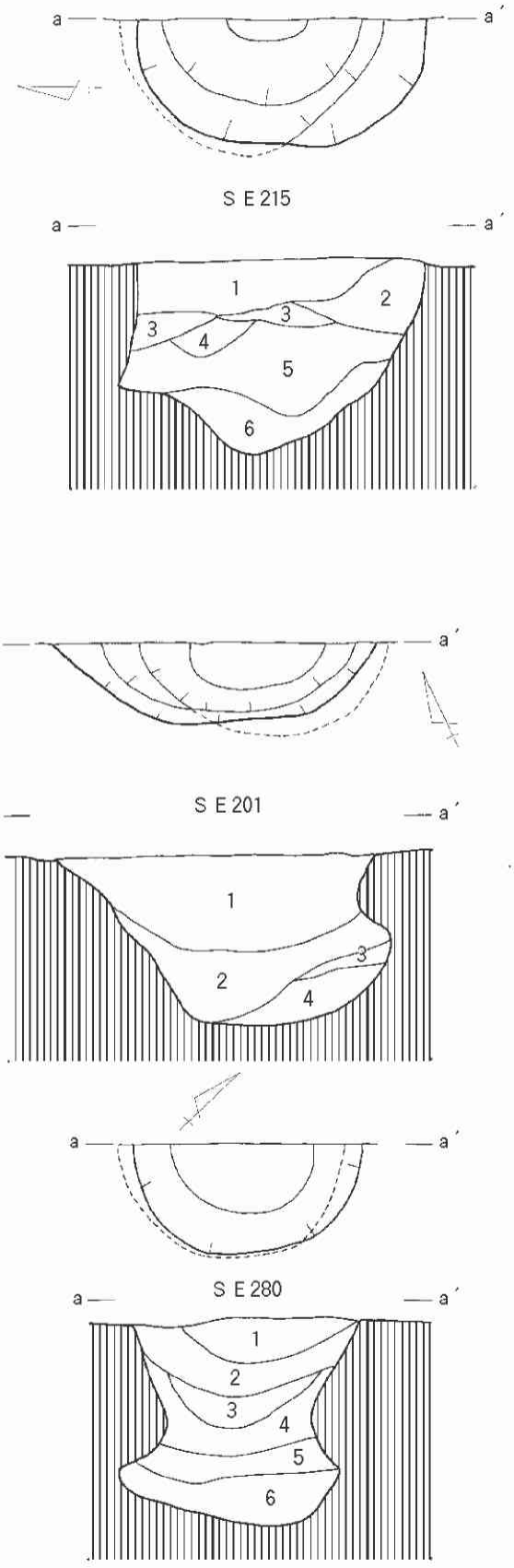


S E 276
1　10Y R 3/3 暗褐色シルト
2　10Y R 3/3 暗褐色シルトに10Y R 2/3 黒褐色シルトの小ブロックが20％入る（炭化物を少量含む）
3　1とほぼ同じ（やや粘る）
4　10Y R 2/2 黒褐色粘質土

水糸標高96.3m

0　1 m
（1：40）

第16図　S E 281・247・276井戸跡



S E 215
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ５/４にぶい黄褐色シルトの小ブロックが５％入る
2　１とほぼ同じ（小粒の炭化物を少量含む）
3　10ＹＲ５/４にぶい黄褐色シルトに10ＹＲ２/３黒褐色シルトの小ブロックが３％入る
4　10ＹＲ５/４にぶい黄褐色シルトと10ＹＲ２/３黒褐色シルトの小ブロックが斑に混じる
5　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ５/４にぶい黄褐色シルトの小ブロックが３％入る（やや粘質を帯びる）
6　10ＹＲ２/１黒色粘質シルト

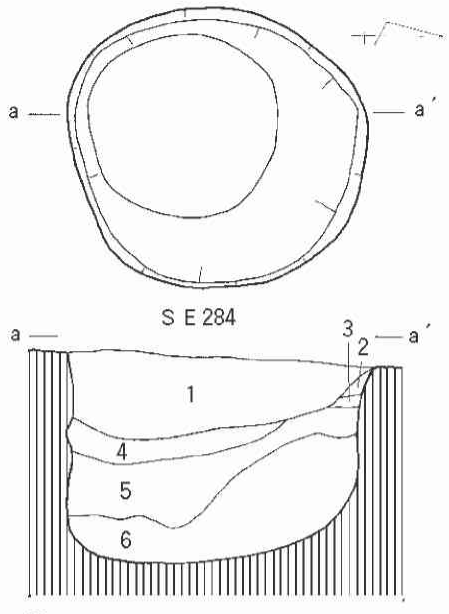
S E 201
1　10ＹＲ２/３黒褐色シルト
2　１とほぼ同じ（やや粘る）
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ５/４にぶい黄褐色シルトの小ブロックが３％入る
4　10ＹＲ２/１黒色粘質シルト

S E 280
1　10ＹＲ２/２黒褐色シルト（炭化物を少量含む）
2　10ＹＲ２/２黒褐色シルトに10ＹＲ３/３暗褐色砂質シルトがブロック状に入る
3　２とほぼ同じ(10ＹＲ３/３暗褐色砂質シルトがブロック状に多量に入る）
4　１とほぼ同じ（やや粘る）
5　10ＹＲ２/３粘質シルトに10ＹＲ３/３暗褐色砂質シルトの小ブロックが斑に混じる
6　10ＹＲ２/２黒褐色粘質土

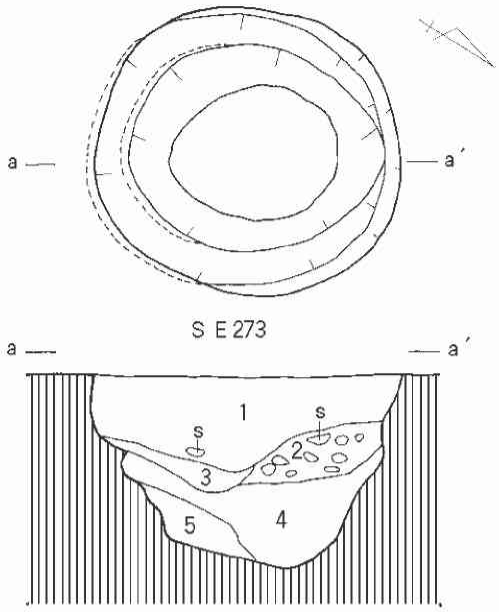
水糸標高96.3m

0　1m
（1：40）

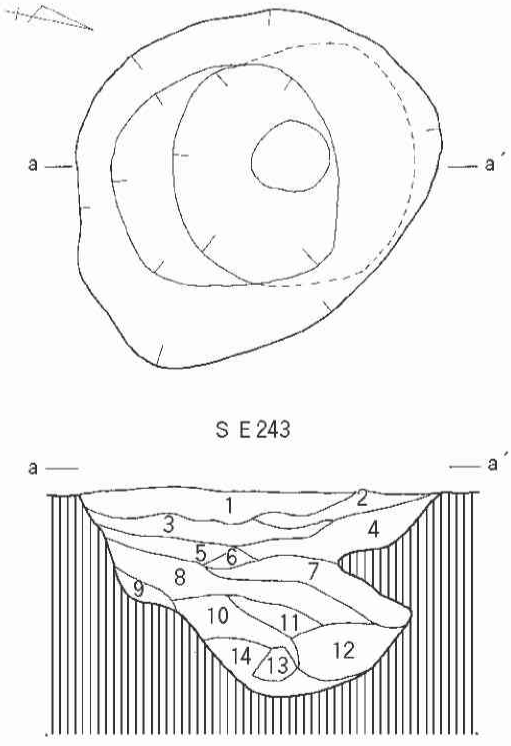
第17図　S E 215・201・280井戸跡



S E 284
1　10Y R 2/3黒褐色シルト(炭化物を少量含みやや砂質を帯びる)
2　10Y R 2/3黒褐色シルト
3　10Y R 2/3黒褐色粘質シルト（焼土を少量含む)
4　10Y R 3/2黒褐色粘質シルト
5　10Y R 2/2黒褐色粘質土
6　10Y R 2/2黒褐色シルトに10Y R 4/3にぶい黄褐色粘質土がブロック状に斑に混じる



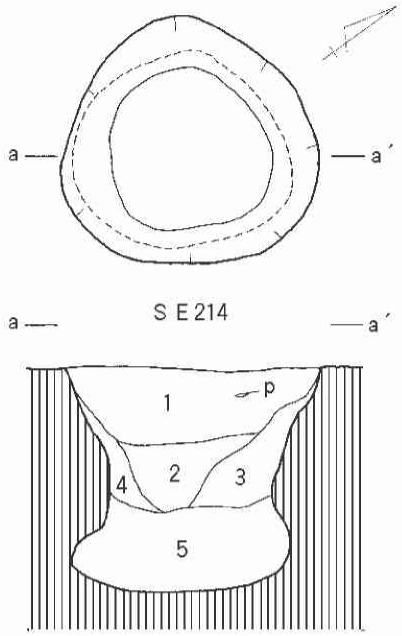
S E 273
1　10Y R 3/3暗褐色シルト(小粒の炭化物を少量含む下層ほど砂質を帯びる)
2　礫層
3　10Y R 2/3黒褐色シルト
4　10Y R 4/3にぶい黄褐色粘質土に10Y R 2/2黒褐色砂質シルトの小ブロックが入る
5　地山崩落土



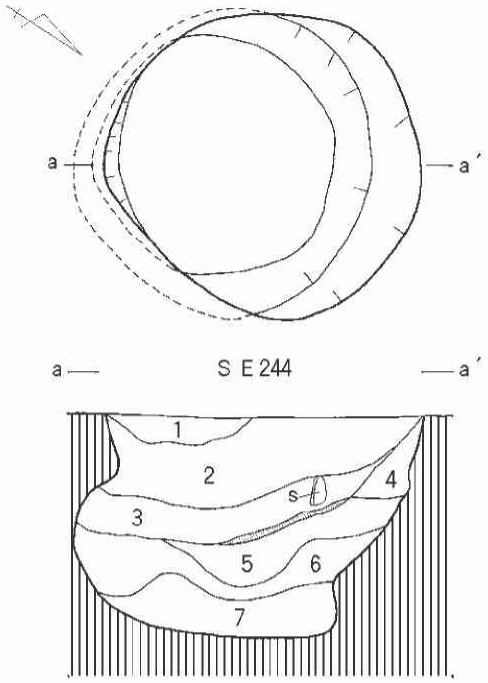
S E 243
1　10Y R 3/3暗褐色砂質シルト
2　1とほぼ同じ（砂質が強く小粒の炭化物を少量含む)
3　1とほぼ同じ（土器片を含む)
4　10Y R 2/3黒褐色シルト
5　4と同じ
6　1と同じ
7　4とほぼ同じ（小粒の炭化物を少量含む)
8　1とほぼ同じ
9　10Y R 2/2黒褐色砂質シルト
11　8と同じ（8より粘質が強い)
12　10Y R 4/3にぶい黄褐色細砂
13　10Y R 3/3暗褐色シルト
14　9と同じ

水糸標高96.3m　0　1m
（1：40)

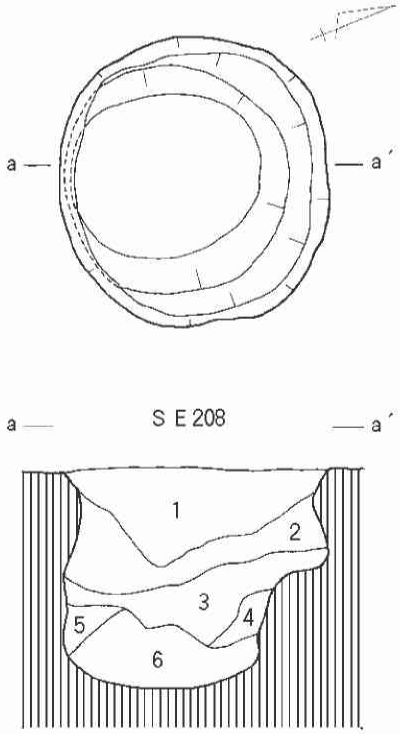
第18図　S E 284・273・243井戸跡



SE214
1　10YR2/3黒褐色シルト（土器片を含む）
2　10YR2/3黒褐色シルト（やや粘る）
3　10YR5/4にぶい黄褐色シルトに10YR2/3黒褐色シルトの小ブロックが3％入る（やや粘る）
4　2とほぼ同じ（粘質が強い）
5　10YR2/1黒色粘質シルト



SE244
1　10YR3/3暗褐色シルト（やや砂質を帯びる）
2　10YR2/3黒褐色シルト(小粒の炭化物と土器片を含む)
3　10YR2/3黒褐色シルト
4　3と同じ（少量の炭化物を含む）
5　3と同じ（4より粘質が強い）
6　10YR4/1褐灰色粘質土に10YR4/6褐色細砂が層状に混じる
7　10YR4/1褐灰色粘質土

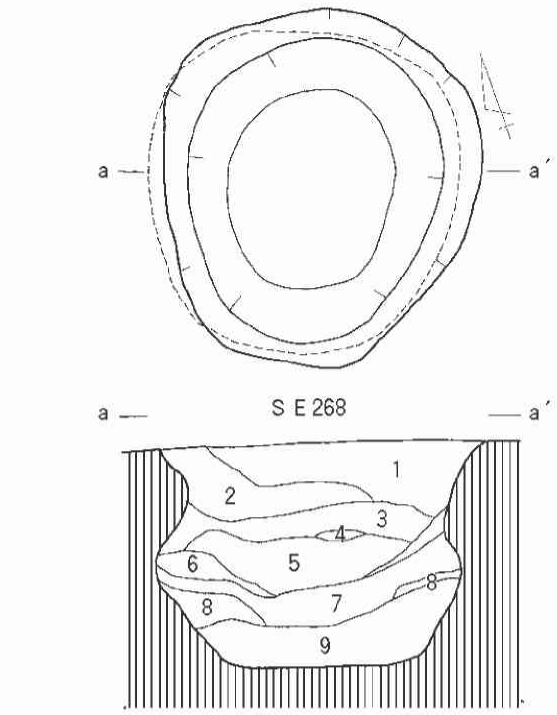


SE208
1　10YR2/2黒褐色シルト(炭化物と焼土を少量含む)
2　1とほぼ同じ（10YR4/6褐色細砂を少量含む）
3　1とほぼ同じ（やや粘る）
4　10YR2/2黒褐色シルト（土器片を含む）
5　10YR3/2黒褐色シルトと10YR3/4暗褐色砂質シルトがブロック状に斑に混じる
6　10YR3/2黒褐色粘質土

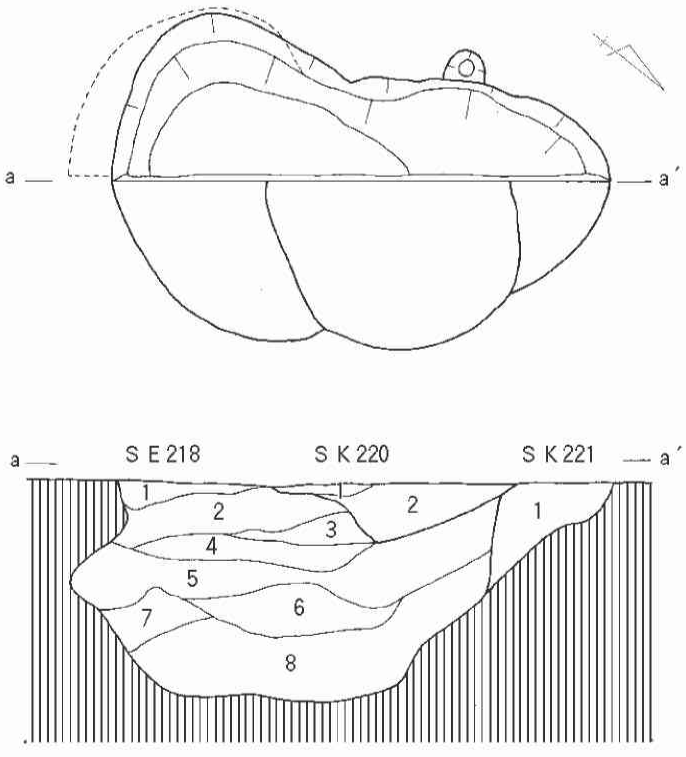
水糸標高96.3m

0　1m
（1：40）

第19図　SE214・244・208井戸跡



S E 268
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（小粒の炭化物を少量含むやや砂質を帯びる）
2　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ５/４にぶい黄褐色シルトの小ブロックが10％入る
3　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ５/４にぶい黄褐色シルトの小ブロックが２％入る
4　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色粘質土
5　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（小粒の炭化物を少量含むやや砂質を帯びる）
6　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色粘質土
7　10ＹＲ２/２黒褐色粘質土
8　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（地山が崩落したものか）
9　10ＹＲ４/１褐灰色粘質土



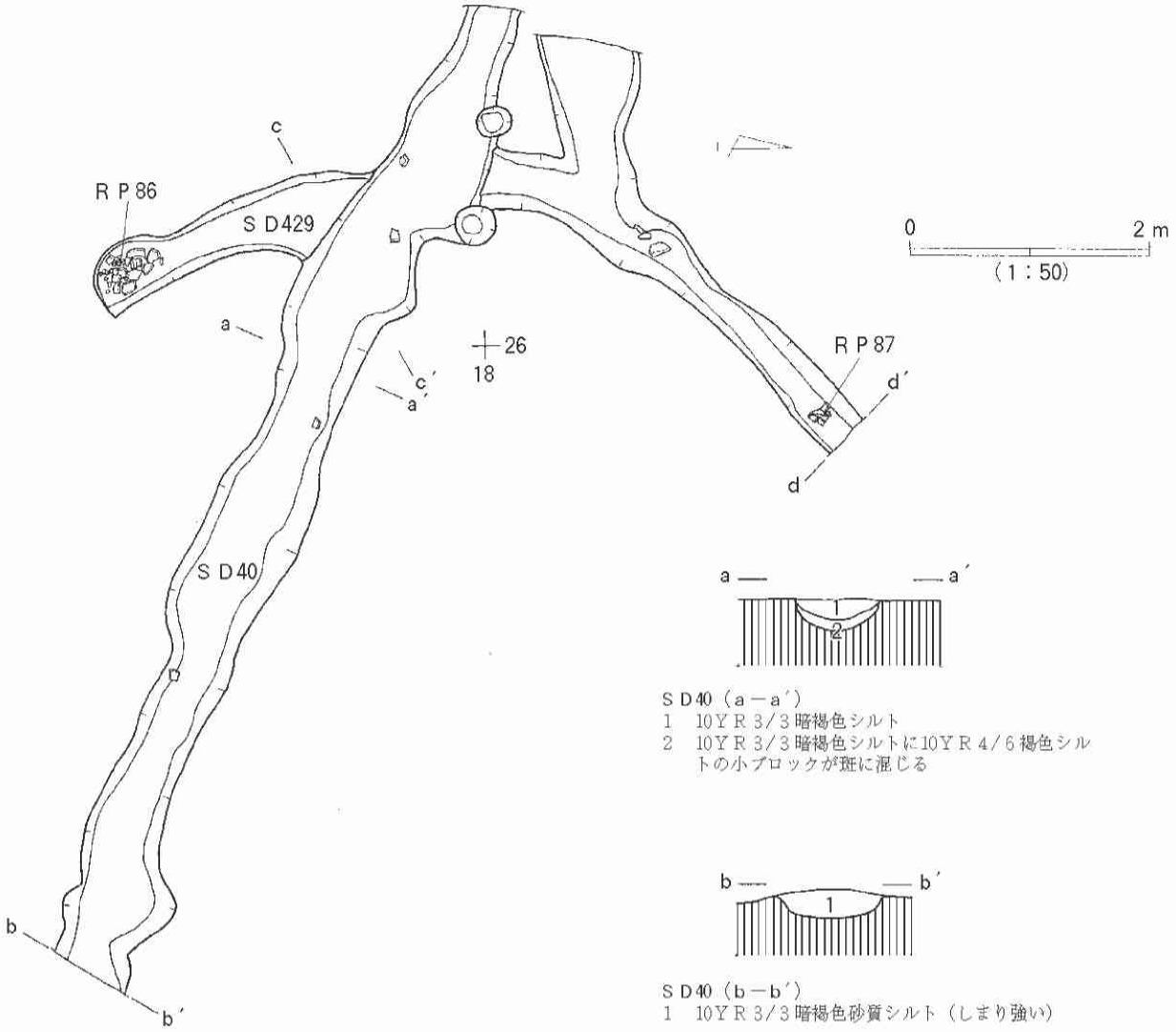
S K 220
1　10ＹＲ４/６褐色細砂
2　10ＹＲ３/３暗褐色シルト（炭化物を少量含む）

S E 218
1　10ＹＲ４/６褐色粗砂
2　10ＹＲ３/４暗褐色シルトに10ＹＲ４/６褐色細砂が斑に入る
3　２に10ＹＲ２/３黒褐色シルトの小ブロックが10％入る
4　10ＹＲ２/３黒褐色シルトに10ＹＲ４/４褐色細砂が斑に入る（炭化物を少量含む）
5　10ＹＲ３/２黒褐色砂質シルトに10ＹＲ４/４褐色細砂が斑に入る
6　10ＹＲ３/２黒褐色砂質シルトと10ＹＲ４/４褐色細砂がブロック状に斑に入る
7　10ＹＲ４/４褐色砂質シルト
8　10ＹＲ３/４暗褐色粘質土

S K 221
1　10ＹＲ３/３暗褐色シルトに10ＹＲ４/６褐色細砂が少量混じる（土器片を含む）

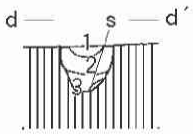
0　1 m
水糸標高96.3m　（１：40）

第20図　Ｓ Ｅ 268・218井戸跡・Ｓ Ｋ 220・221土坑

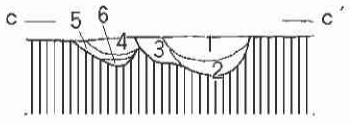


S D40（a－a′）
1　10Y R 3/3 暗褐色シルト
2　10Y R 3/3 暗褐色シルトに10Y R 4/6 褐色シルトの小ブロックが斑に混じる

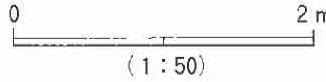
S D40（b－b′）
1　10Y R 3/3 暗褐色砂質シルト（しまり強い）



S D429（d－d′）
1　10Y R 2/2 黒褐色シルト
2　10Y R 4/3 黄褐色シルトに10Y R 3/3 暗褐色シルトの小ブロックが5％混じる
3　10Y R 2/2 黒褐色シルトに10Y R 4/3 黄褐色シルトの小ブロックが斑に混じる

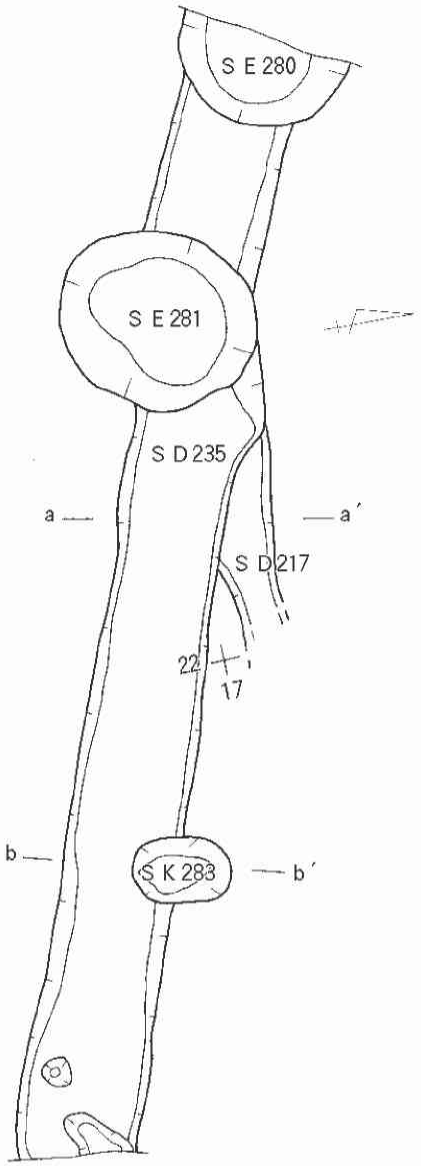


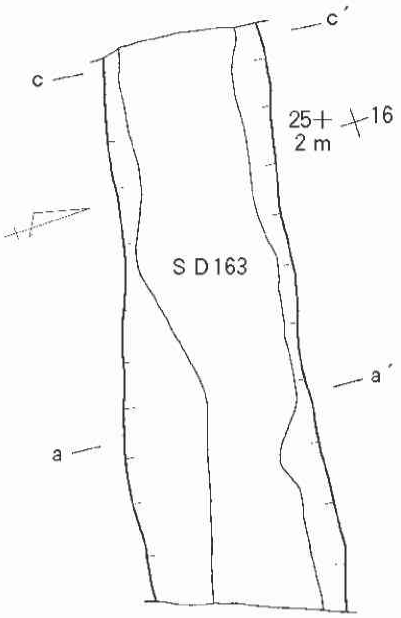
S D40（c－c′）
1　10Y R 3/3 暗褐色シルト（土器片を含む）
2　10Y R 3/3 暗褐色シルトに10Y R 4/6 褐色シルトの小ブロックが斑に混じる
3　2とほぼ同じ(10Y R 4/6 褐色シルトの小ブロックが多量に混じる)
4　10Y R 3/3 暗褐色シルト
5　10Y R 4/3 黄褐色シルトに10Y R 3/3 暗褐色シルトの小ブロックが10%混じる
6　10Y R 4/3 黄褐色シルトに10Y R 3/3 暗褐色シルトの小ブロックが斑に混じる



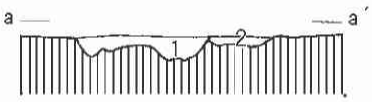
水糸標高96.6m

第21図　S D40・429溝跡

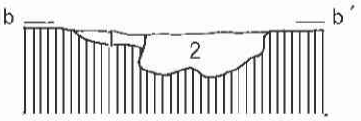




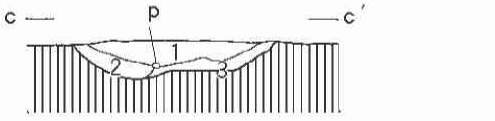
0 2 m
(1：60)



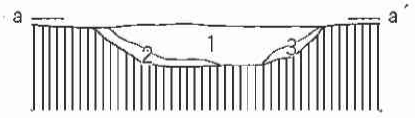
S D217・235（a－a′）
1　10YR3/3暗褐色粘質シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトが混じる
2　10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトが斑に混じる



S K283・S D235（b－b′）
1　10YR3/3暗褐色粘質シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトが混じる
2　10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトが斑状に入る（土器片を含む）



S D163（c－c′）
1　10YR3/2黒褐色シルト（小粒の炭化物と土器片を含む）
2　10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/3褐色シルトの小ブロックが10%入る（土器片と小粒の炭化物を含む）
3　10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/3褐色シルトの小ブロックが10%入る

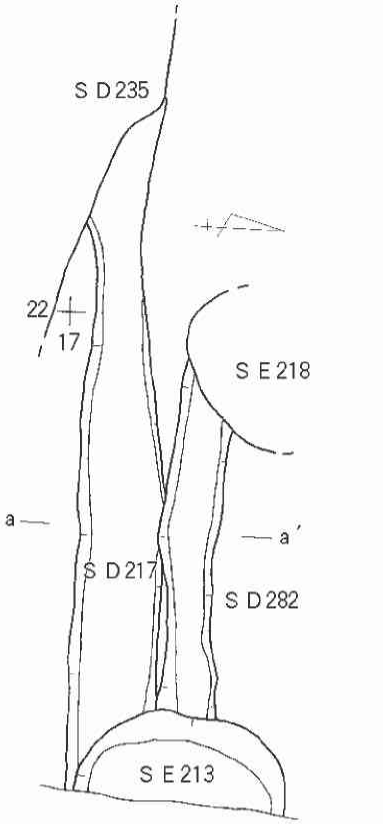


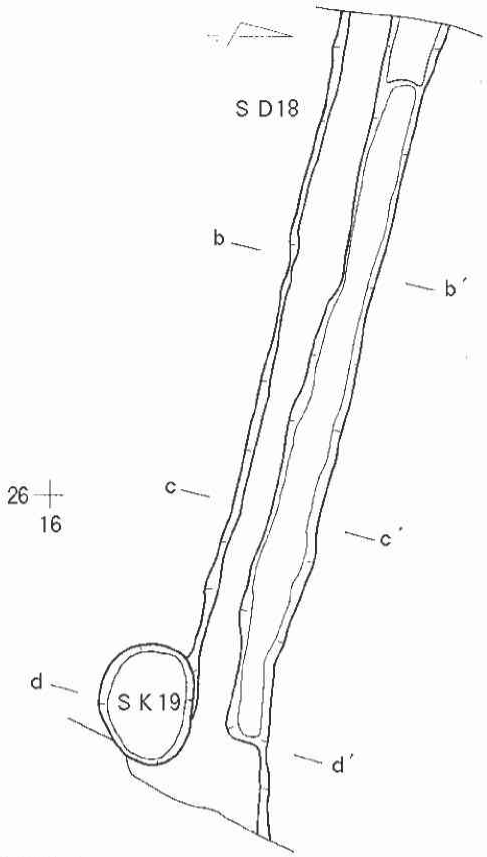
S D163（d－d′）
1　10YR3/2黒褐色シルト（小粒の炭化物と土器片を含む）
2　10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/3黄褐色砂質シルトの小ブロックが斑に入る
3　2と同じ

水糸標高96.3m

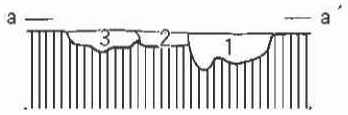
0 2 m
(1：50)

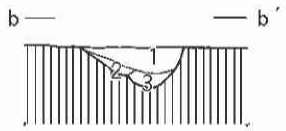
第22図　S D235・163溝跡

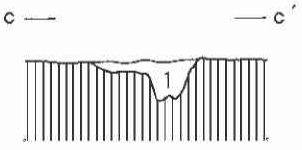


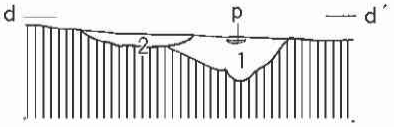


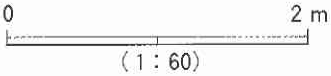
水糸標高96.3m

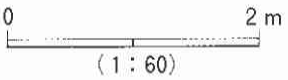












S D282・217（a－a′）
1　10YR3/3暗褐色粘質シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトが微量混じる
2　10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトが混じる
3　10YR3/2黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルト、鉄分が微量混じる

S D18（b－b′）
1　10YR3/3暗褐色シルト（土器片を少量含む）
2　1とほぼ同じ（やや砂質を帯びる）
3　10YR4/4褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトの小ブロックが斑に混じる

S D18（c－c′）
1　10YR3/3暗褐色シルト（土器片を少量含む）

S D18・S K19（d－d′）
1　10YR3/3暗褐色砂質シルト（小粒の炭化物と土器片を含む）
2　10YR2/3黒褐色砂質シルト（土器片を含む）

第23図　S D18・217・282溝跡

Ⅴ　出土した遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ30箱である。破片での出土が多く、図化できたものは127点である。土師器・須恵器を中心に、紡錘車や刀子などの鉄製品、砥石などの石製品が出土している。また、破片資料ではあるが弥生土器も十数点出土している。

1　平安時代

須恵器

須恵器は、図化できたものが43点である。主体をなすのは、供膳形態の坏類で29点を数える。底部切り離しが、回転糸切りによるものと回転ヘラ切りによるものとが見られ、いずれも無調整である。回転糸切りの坏は、器高指数（器高/口径×100）が30以上の値を示すものと、30未満の値を示すものに大別できる。体部や口縁部の形状から①体部が内弯気味に立ち上り、口縁部が緩やかに外反するもの（４・９）②体部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの（１・６）③体部が直線的に立ち上がり、皿状を呈するもの（76・83）がある。回転ヘラ切りの坏（97）は、１点出土している。破片資料のため全形は知り得ないが、口径に比して底径が大きいと推測できる。体部は内弯気味に立ち上がり、体部上部から口縁端部にかけて「く」の字状に外反している。

高台付坏は、底部切り離しが回転糸切りによるものと回転ヘラ切りによるものが見られ、いずれも無調整である。回転糸切りの高台付坏は、器高指数が40以上の値を示し、器高が高いことが特徴と言える。体部や口縁部の形状から①体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部分が緩やかに外反するもの（11・12）②体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部の外反が少なく口縁端部を丸く肥厚させ、外側に張り出させるもの（86）③体部から口縁端部まで直線的に立ち上がるもの（74）がある。すべて回転糸切り痕を明瞭に残す。回転ヘラ切りによるもの（98）は、１点出土している。底径指数（底径/口径×100）が64という値を示し、口径に比して底径が大きい。体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。双耳坏は底部回転糸切りで、体部は内弯気味に立ち上がり、回転糸切り痕は不明瞭である。

皿（51）は、回転糸切りによる。器高指数が20、底径指数が50という値を示す。体部は直線的に立ち上がり、大きく外傾しつつ伸び、口縁部は大きく外反している。

蓋は、２点出土している。87は破片資料のため全形を知り得ないが、摘みが大きく天井部から肩部が回転ヘラケズリされている。99は無調整で広く扁平な天井部を持ち、肩部が内弯気味に伸びる。摘みが小さく、口縁端部は垂直に摘み出されている。

貯蔵形態の甕は、全てが破片資料のため全形を知り得ないが、61・62・79は、大型であろうことがうかがえる。打圧調整のタタキとアテの組み合わせは、平行タタキと平行アテ（62）と平行タタキと同心円アテ（61・79・93）がある。

土師器

土師器は、図化できたものは61点である。供膳形態の坏は、底部切り離しは回転糸切りが主流を占める。回転糸切りの坏は、器高指数がおおむね35前後の値を示す。体部と口縁部の形状

から①体部が内弯気味に立ち上がり、体部下端に凹線が施されたもの（55・91）②体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの（20・21）③体部が直線的に立ち上がり口縁部が僅かに外反するもの（15・63）がある。55・91は、底部外周から口縁部まで整形した後、体部下端に凹線を施し、体部と底部の境を明瞭にする意図がうかがえる。その後回転糸切りにより切り離しを行うが、その範囲は底部外周より５㎜ほど中に入ったところとなる。なお、91は内面黒色処理が施されている。72は、底部に網代痕が認められ、非ロクロ整形である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部が僅かに内反する。体部外面に手持ちヘラケズリ調整、内面にミガキ調整が施され黒色処理されている。

高台付坏は、底部切り離しが回転糸切りで、総じて底径が大きい。①体部が内弯気味に立ち上がり、口縁が引き出され僅かに外反するもの（22・23）②体部が内弯気味に立ち上がり、内面にミガキ調整が施され黒色処理されたもの（24・25）がある。

煮沸・貯蔵形態の甕は、完形はなく破片資料での出土である。ロクロ整形の甕（33・69）は、外面がカキメ、ナデ調整が施されている。非ロクロ整形の甕は、内外面共ハケメ調整が施され、底部に網代痕や木葉痕が認められる（59・70）。煮沸形態の長胴甕（41・71）は、外面に縦位のハケメ調整、内面に横位のハケメ調整が施されている。堝（75）は、１点出土している。破片資料のため全形は知り得ないが、体部は内弯気味に立ち上がる。口縁部は「く」の字状に外反し、体部内外面共にハケメ調整が施されている。底部の形状は、丸底であったと推測している。

その他の遺物

今回の調査で出土した文字資料はＢ区より出土した墨書土器で、総数12点を数える。墨書される土器の器種は、須恵器坏４点、須恵器高台付坏４点、須恵器皿１点、土師器坏１点、土師器高台付坏２点である。出土遺構は、ＳＸ431土器捨て場より７点、竪穴住居跡より３点、溝跡より２点である。墨書される部位は、体部外面６点、底部６点である。墨書された字種は「十」７点、「不」１点、「木」１点、「十一？」１点、判読不能文字２点である。

石製品は３点出土している。109はＳＴ162竪穴住居跡覆土から出土した砥石である。材質は、デイサイトに類似している。非常に堅く砥面が４面確認できる。小口が生きており、カワが付着している。断面は方形に近く、幅よりも厚みが大きい。その形状からは古代の様相がうかがえる。よく使い込まれ、砥面がなめらかである。手持ち用の中砥と思われる。110は26－19区の包含層から出土した砥石である。砥面が３面認められ、他面は打ち欠かれており、一部条痕が認められる。カワが付着していると思われる面があるが、破断面の可能性もある。材質は軟質で、奥羽山系に産する凝灰岩に類似している。手持ち用の中砥と考えられる。111はＳＴ147竪穴住居跡覆土からの出土である。材質は110に類似しているが、110よりも軽く柔らかい感じを受ける。６面の面取りが施され、２カ所に穿孔が認められる。破片資料のため全形を知ることはできないが、孔に紐を通して使用する提げ砥の可能性が考えられる。しかし、砥面の面積が狭く、何らかの石製品の可能性も考えられる。

金属製品はＢ区を中心に16点出土している。紡錘車３点、刀子７点、鎌１点、性格不明５点である。出土した３点の紡錘車（112～114）はいずれも鉄製で、軸部が円盤部に差し込まれて

いる。残存する軸部の先端は鉤状である。刀子は６点出土している。破断面を観察すると、刀身の中心部分が空洞になっており、鉄板を折り返して作られたことがうかがえる。全て破損が見受けられ、全体の大きさを正確に把握することはできない。一部木部が残存するものもあるが、柄の部分か鞘の部分かは不明である。鎌（122）はＳＴ１竪穴住居跡覆土から出土している。その他にも５点の金属製品が出土している。いずれも鉄製であるが、破片のみの出土で全形を知り得ないため、種別を特定することはできなかった。

２　古墳時代

古墳時代の遺物としては土師器坏、甕、高坏、瓦泉の４点が出土している。以下に個別に記述する。95はＳＤ429溝跡から出土した土師器坏である。胎土は細砂が混入するが焼成は良好である。丸底で体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外弯する。内外面共ハケメ調整が施されている。図上復元から推定される口径は140㎜、器高は70㎜程度である。

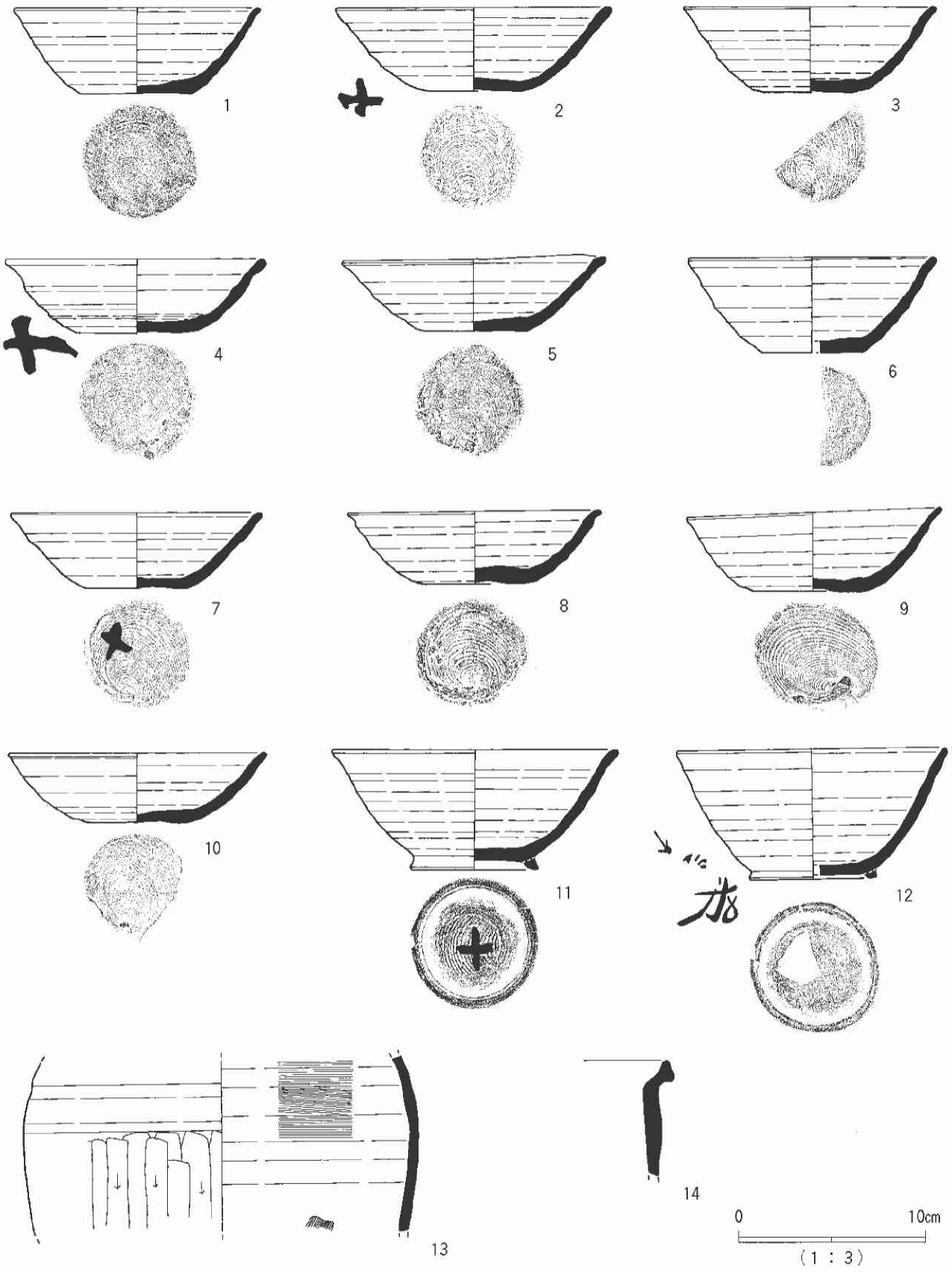
101はＳＫ16土坑から出土した高坏である。坏部に段を有し、口縁部は緩やかに外反する。胎土は緻密でよく精製され、焼成も堅緻で橙色を呈する。内外面共ヘラミガキが施されている。脚部と口縁部に破損が認められる。図上復元から推定される口径は230㎜、器高は120㎜程度が考えられる。古墳時代中期（５世紀）のものと思われる。

102はＳＸ431土器捨て場から出土した、古墳時代中期（５世紀）に比定される**𤭯**である。ＳＸ431土器捨て場に、一括して廃棄された平安時代の遺物に混じって出土している。体部のみの破片資料のため全形は知り得ない。胎土には細砂が混入するが、焼成は堅緻である。体部には刻み目、櫛描波状文、沈線が認められ、これらが体部を巡ると考えられる。

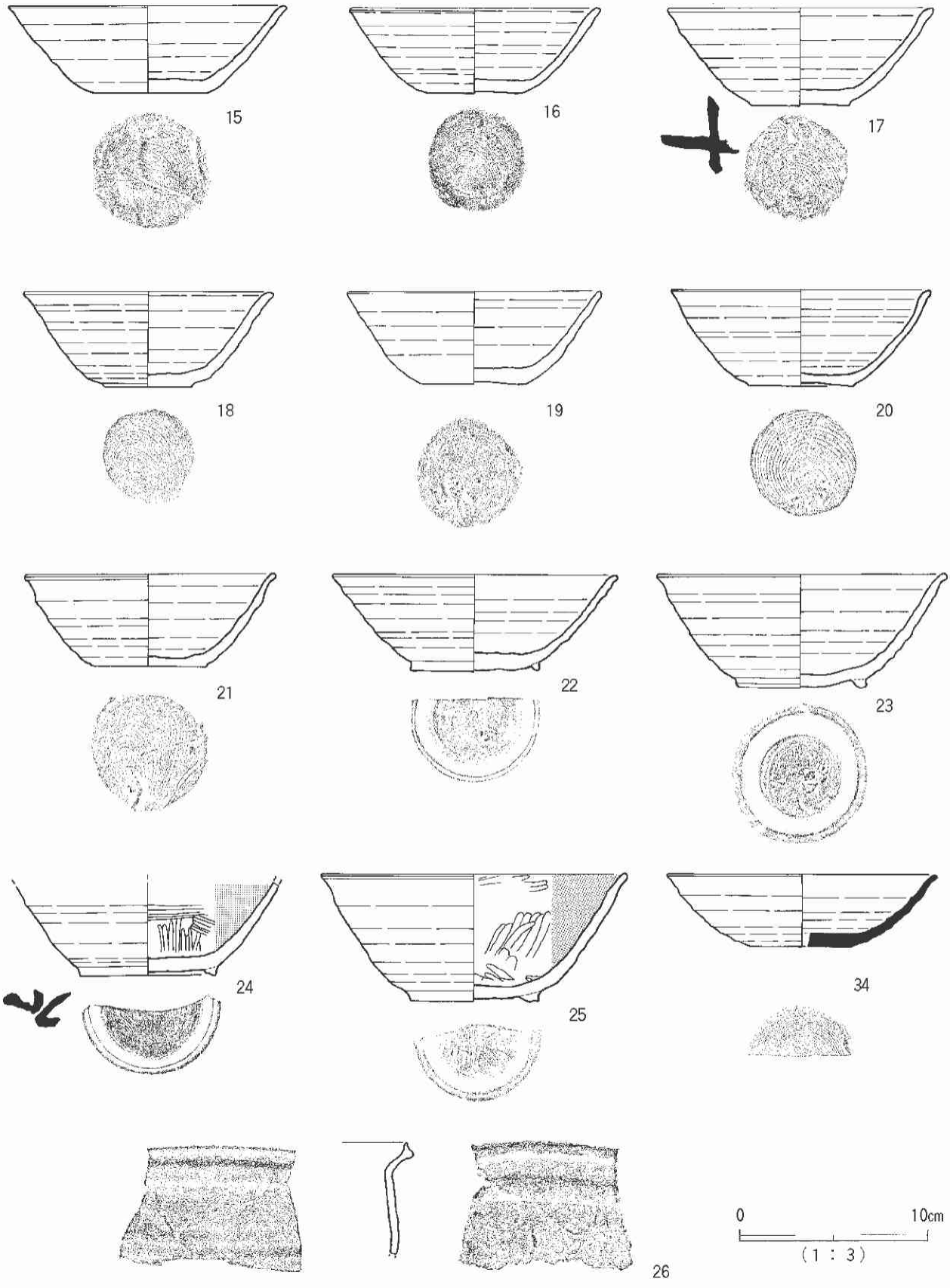
96は、ＳＤ429溝跡から出土した甕である。口縁部から体部中央まで復元できた。体部内外面共ハケメ調整が施されている。口縁部内面は横位のハケメ調整が施され、口縁部外面は斜位のハケメ調整が施されている。古墳時代中期（５世紀）のものと思われる。

３　弥生時代

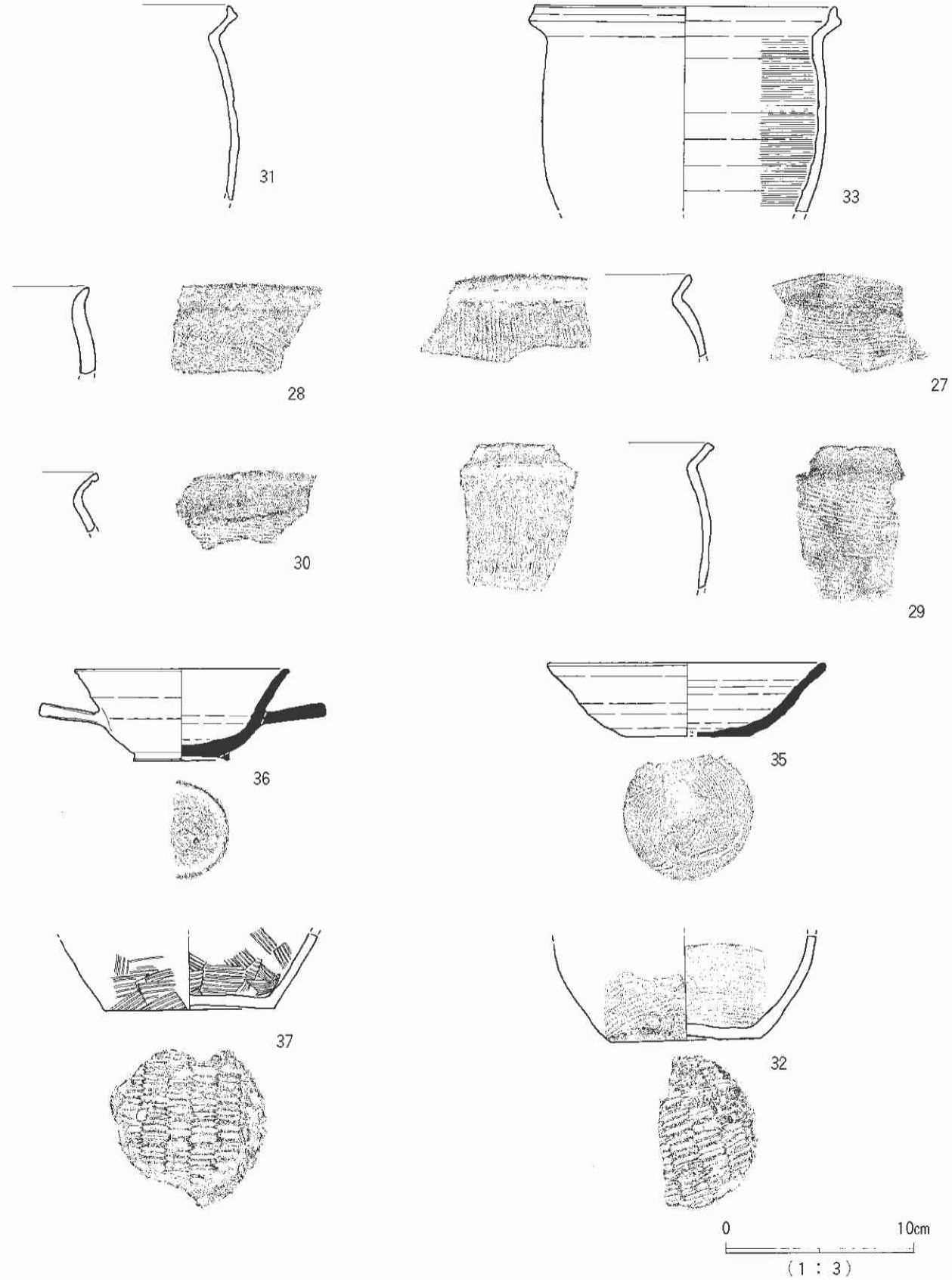
今回の調査では、10数点の弥生土器が出土している。いずれも破片による出土で、断面の摩耗が激しいこと、弥生時代と考えられる遺構が検出されていないことなどから、流れ込みの遺物と考えられる。復元できるものはなく全形は不明であるが、土器の形態には壺形、甕形、鉢形土器の３種が認められる。ここでは文様及び地文が良好に残り、時期を特定できるものについて個別に記述する。103はＢ区Ⅲ層から出土した甕である。外面にハケメ調整と半截竹管による連弧文が、内面にナデ調整が施されている。桜井式に比定される。104は、ＳＴ161竪穴住居跡覆土から出土した浅鉢であるる。外面に半截竹管による連弧文が施されており、桜井式に比定される。105は、Ｂ区Ⅲ層から出土した壺である。半截竹管による渦巻文が施されており、桜井式に比定される。106は、Ｂ区Ⅲ層から出土した甕の口縁部である。外面にＲＬ斜の地文と竹管刺突文が施されており、天王山式に比定される。107は、ＳＴ156竪穴住居跡覆土から出土した甕である。外面にＬＲの地文が認められる。刻目、沈線、刺突文が施されており、天王山式に比定される。108は、ＳＴ164竪穴住居跡覆土から出土した壺である。外面に撚糸Ｌによる調整が施され、天王山式に比定される。



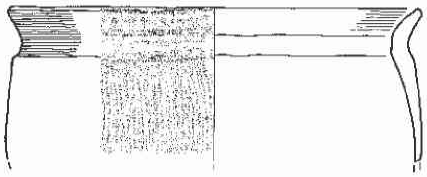
第24図　出土遺物（1）



第25図　出土遺物（２）

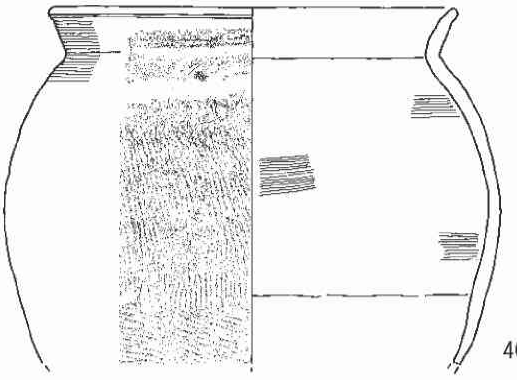


第26図　出土遺物（3）

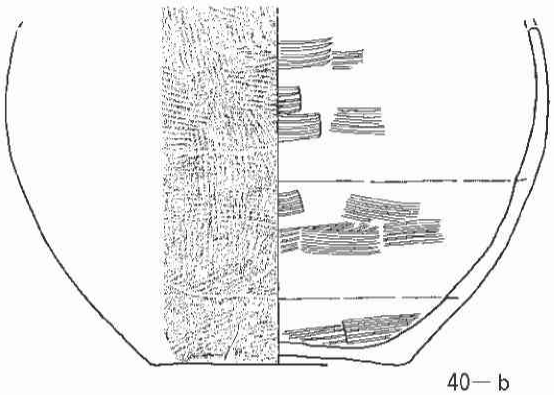


38

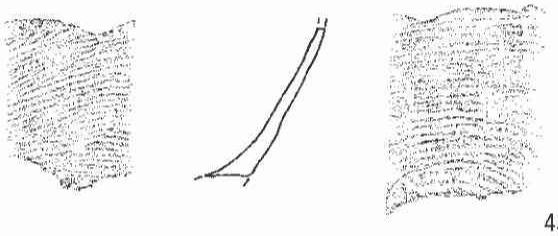
39



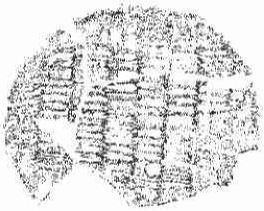
40－a



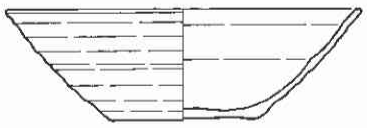
40－b



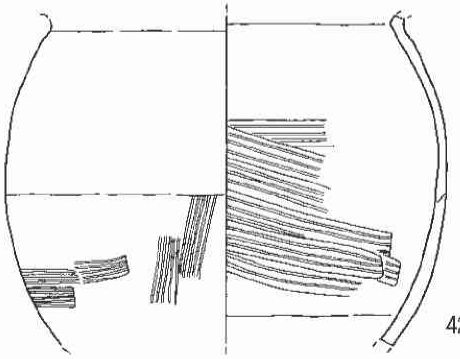
43



44



45

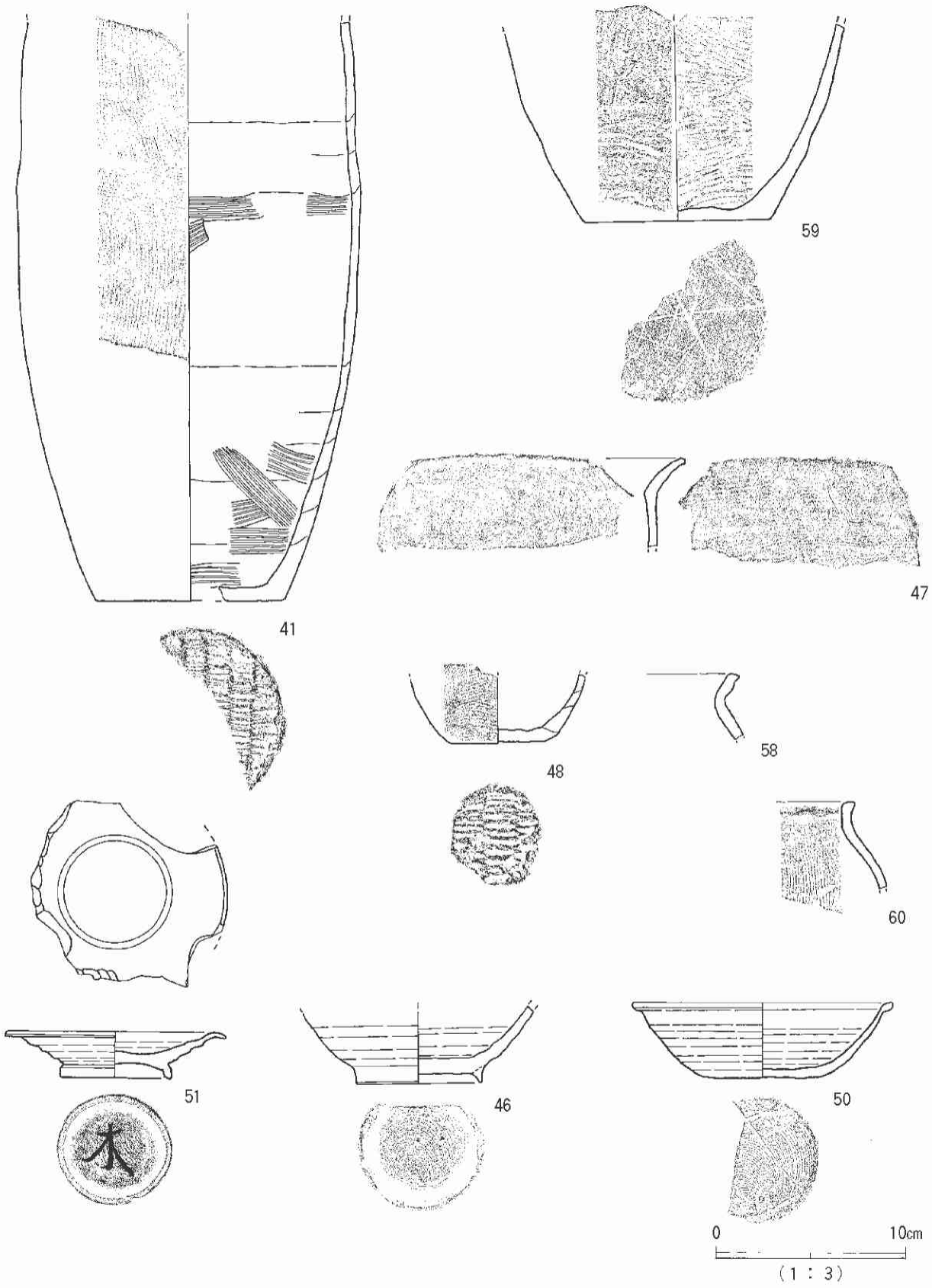


42

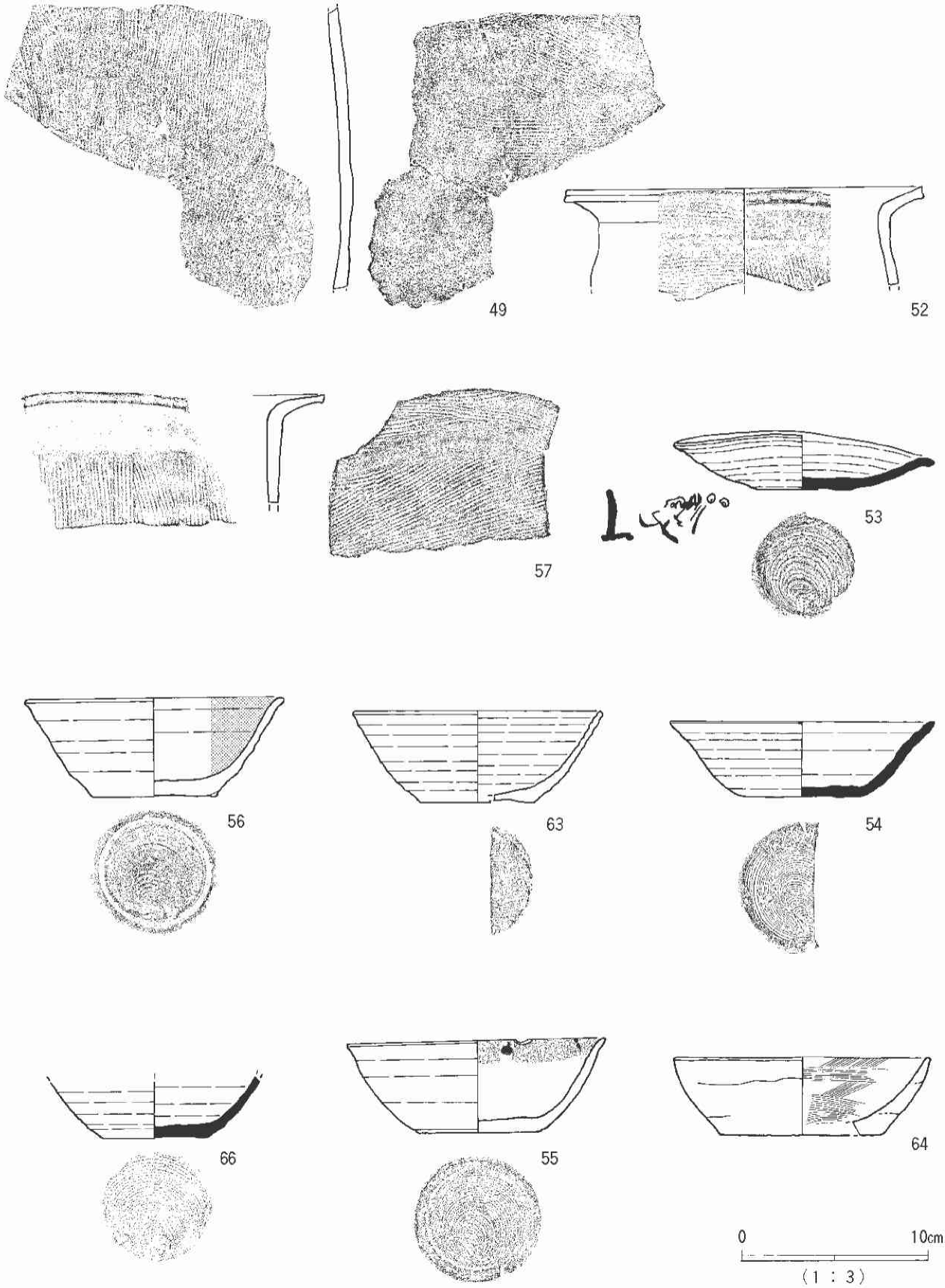
0　10cm

（1：3）

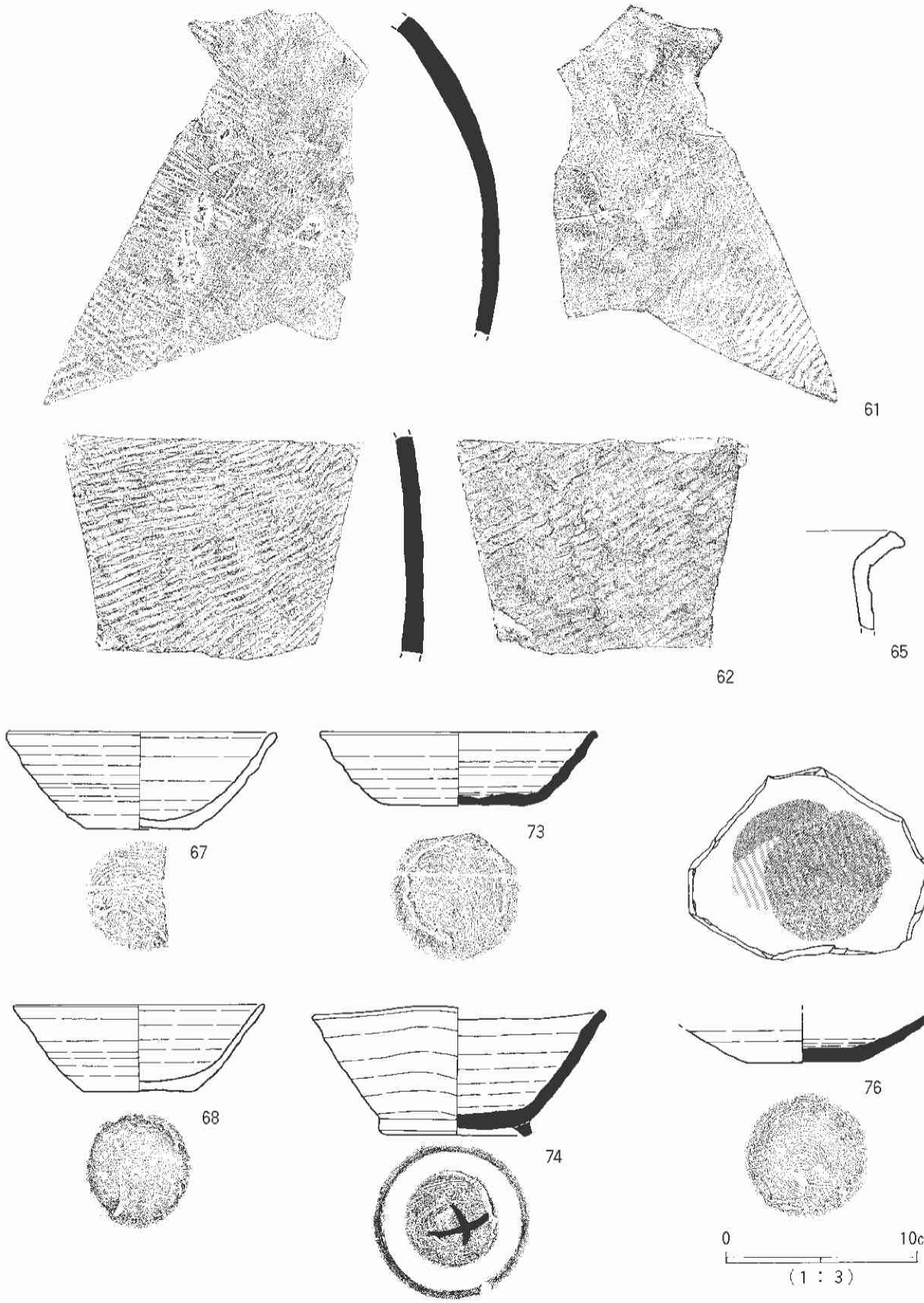
第27図　出土遺物（4）



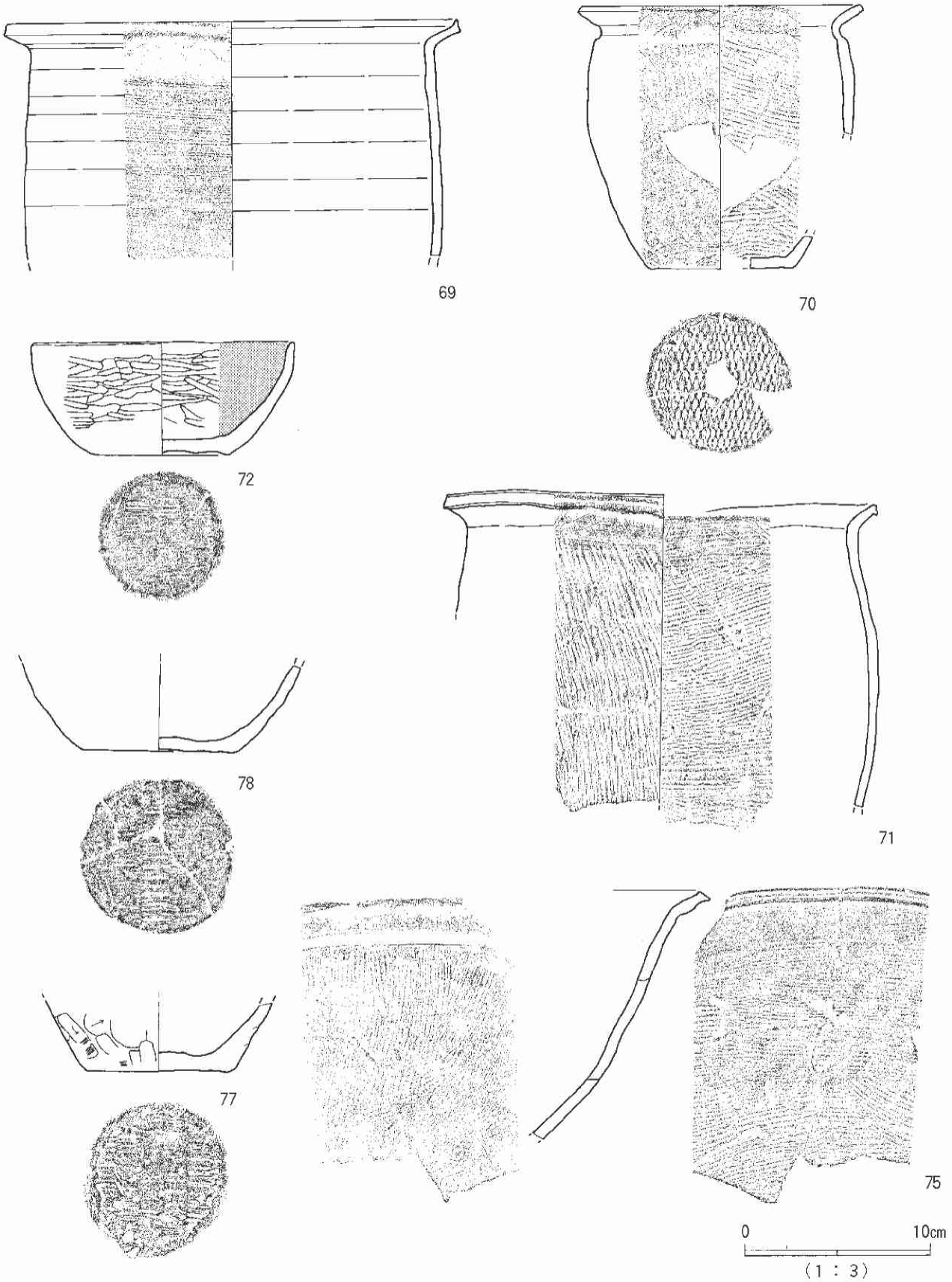
第28図　出土遺物（5）



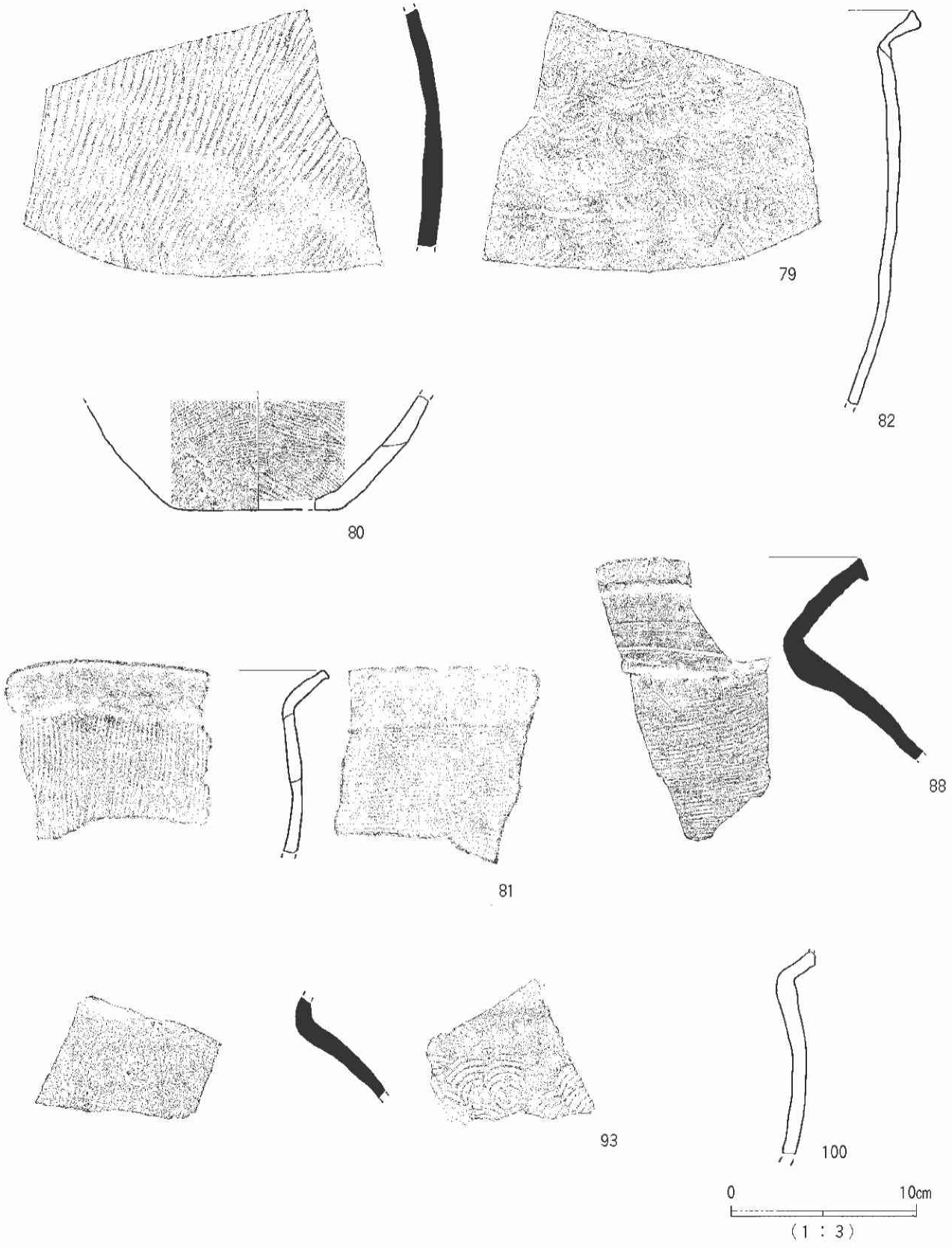
第29図　出土遺物（6）



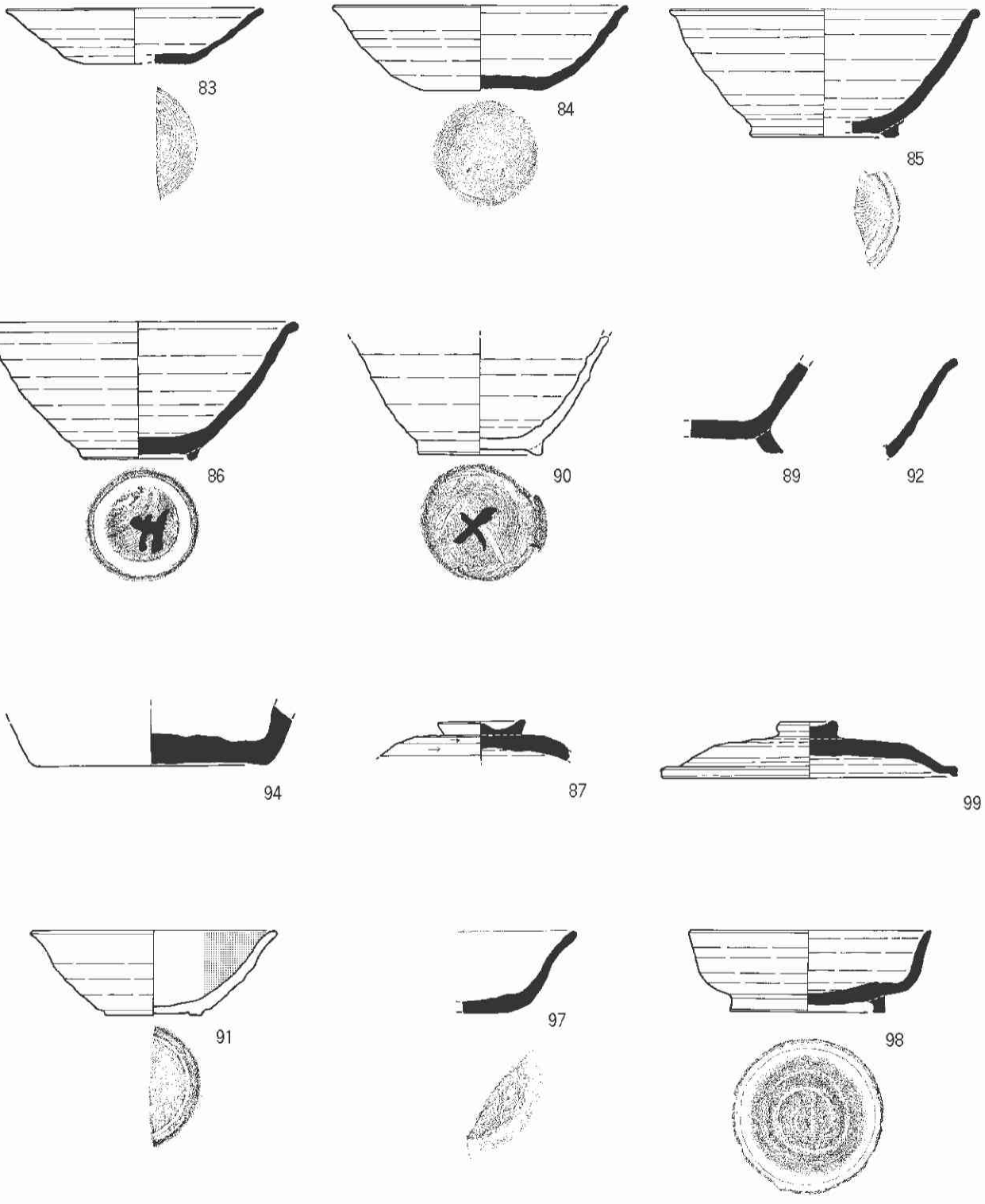
第30図　出土遺物（7）



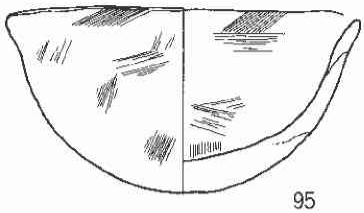
第31図　出土遺物（8）

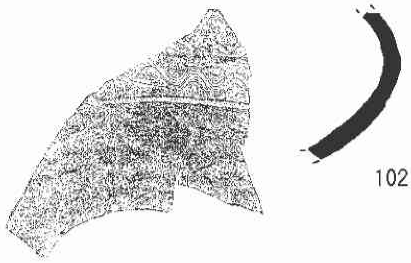


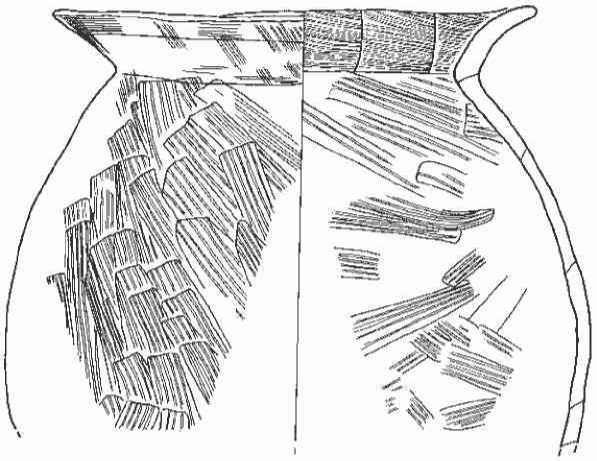
第32図　出土遺物（9）

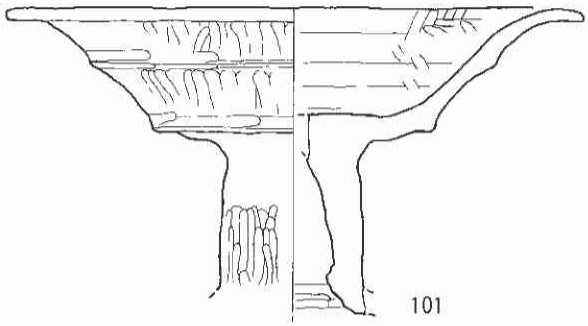


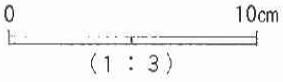
第33図　出土遺物（10）

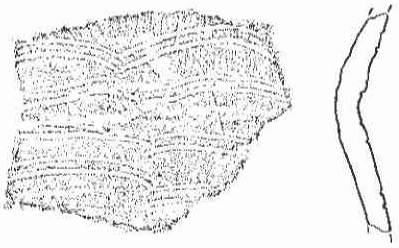


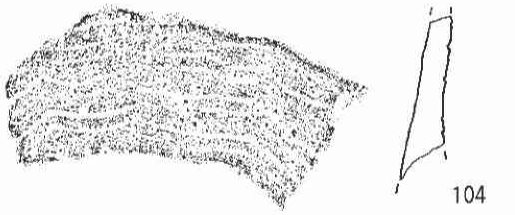


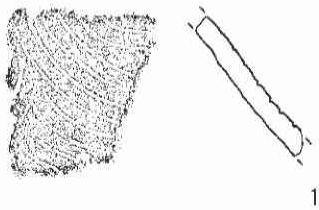


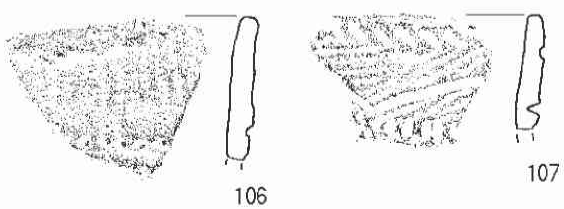


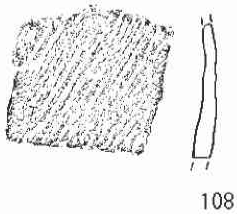


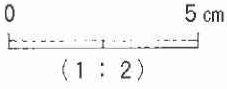




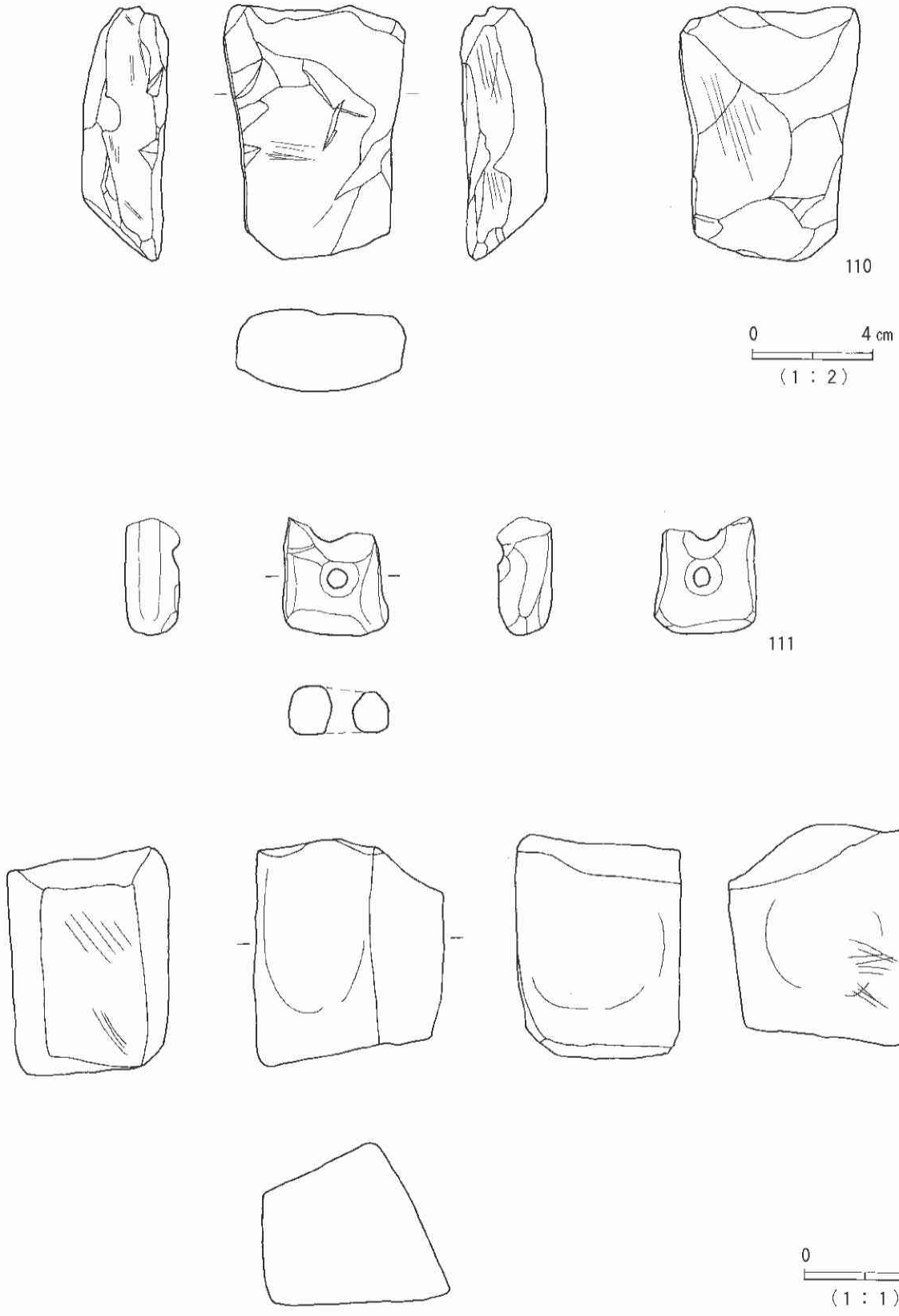




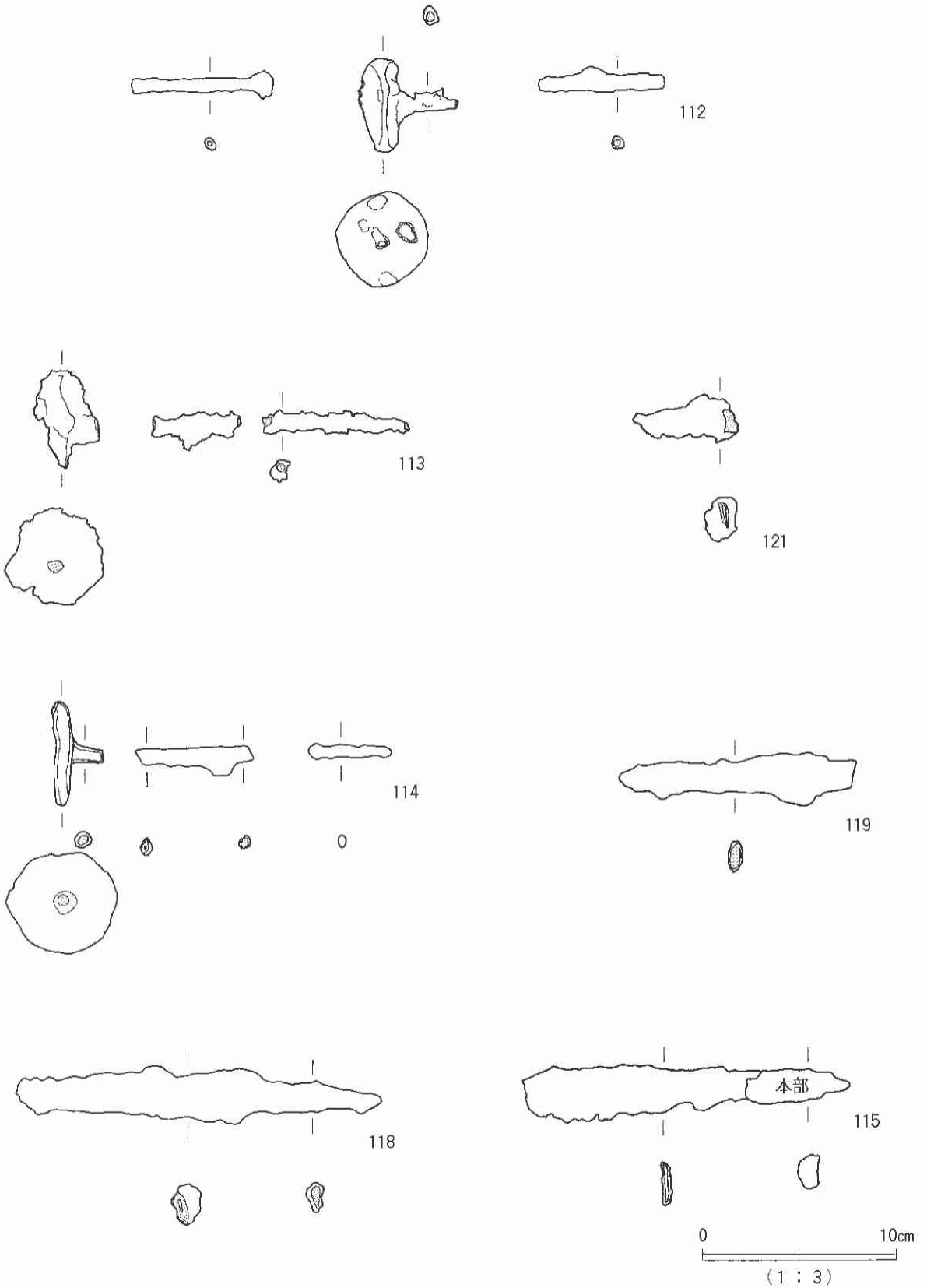




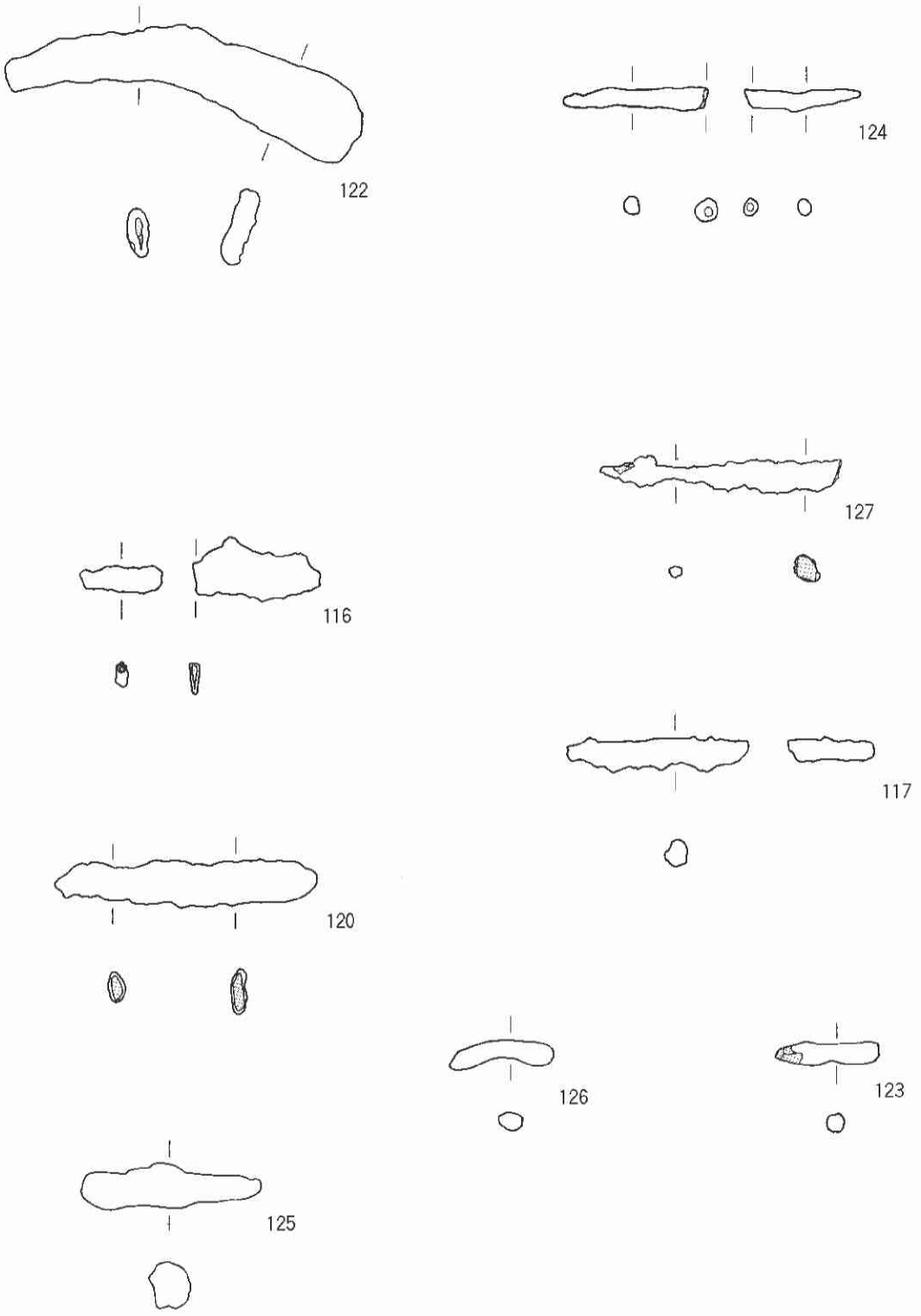
第34図　出土遺物（11）



第35図　出土遺物（12）



第36図　出土遺物（13）



第37図　出土遺物（14）

表２　出土遺物観察表１

挿図番号		種別	器種	計測値（mm）			胎土	焼成	色調	成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高				内面	外面	底部		
第24図	1	須恵器	坏	(132)	59	45	粗砂混　海綿骨針	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ135
	2	須恵器	坏	(146)	50	44	細砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	墨書「十」　ＲＰ137
	3	須恵器	坏	(134)	53	45	粗砂混　海綿骨針	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ107
	4	須恵器	坏	138	62	39	細砂混	良	オリーブ灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	墨書「十」ゆがみ　ＲＰ127
	5	須恵器	坏	140	52	39	粗砂混　海綿骨針	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ151
	6	須恵器	坏	(132)	(53)	50	粗砂混　海綿骨針	良	灰黄色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ゆがみ
	7	須恵器	坏	(134)	58	41	細砂混	良	オリーブ灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	墨書「十」　ＲＰ133
	8	須恵器	坏	138	52	38	細砂混	不良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ゆがみ
	9	須恵器	坏	135	58	44	細砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ155
	10	須恵器	坏	(136)	(50)	39	粗砂混　海綿骨針	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ゆがみ　転用硯
	11	須恵器	高台付坏	(152)	66	64	細砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	墨書「十」　ＲＰ135
	12	須恵器	高台付坏	(144)	68	65	細砂混	良	青灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	墨書「□」　ＲＰ121
	13	須恵器	甕				細砂混　海綿骨針	良	灰色	ﾛｸﾛ　ﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛ　ｹｽﾘ　ｶｷﾒ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ125
	14	須恵器	甕				細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ150
第25図	15	土師器	坏	(146)	60	46	細砂混　海綿骨針	良	浅黄橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ139
	16	土師器	坏	131	51	45	細砂混	良	橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ゆがみ　ＲＰ99
	17	土師器	坏	140	53	51	細砂混	良	橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	墨書「十」　ＲＰ144
	18	土師器	坏	(132)	46	50	細砂混　海綿骨針	良	浅黄橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ108
	19	土師器	坏	134	55	49	細砂混	良	橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ120
	20	土師器	坏	(137)	55	50	細砂混　海綿骨針	良	橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ113
	21	土師器	坏	(132)	63	50	雲母	良	にぶい橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ154
	22	土師器	高台付坏	(150)	68	50	細砂混　雲母　海綿骨針	良	橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	高台接合後のナデ明瞭　RP103
	23	土師器	高台付坏	(150)	64	60	粗砂混　雲母　海綿骨針	良	橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ153
	24	土師器	高台付坏		(72)		緻密	良	橙色	ﾛｸﾛ　ミガキ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	墨書「不」内面黒色処理　RP152
	25	土師器	高台付坏	(161)	(67)	67	細砂混　海綿骨針	良	にぶい橙色	ﾛｸﾛ　ミガキ	ロクロ	回転糸切	ＳＸ431　土器捨て場	内面黒色処理　ＲＰ145
	26	土師器	甕				粗砂混　雲母　海綿骨針	良	橙色	ロクロ	ロクロ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ140
	34	須恵器	坏	(141)	(52)	38	細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ２Ｆ	ＲＰ124
第26図	27	土師器	甕				細砂混	良	にぶい橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ146
	28	土師器	甕				細砂混	良	にぶい橙色	ハケメ　ナデ	ハケメ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ146
	29	土師器	甕				細砂混	良	にぶい橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＸ431　土器捨て場	外面炭化物付着　ＲＰ146
	30	土師器	甕				細砂混	良	橙色	ハケメ	ナデ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ146
	31	土師器	甕				細砂混	良	橙色	ロクロ	ロクロ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ131
	32	土師器	甕		(78)		細砂混	良	にぶい橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＸ431　土器捨て場	内面黒色付着物網代痕　RP115
	33	土師器	甕	(158)			細砂混	良	にぶい橙色	カキメ　ナデ	ナデ		ＳＸ431　土器捨て場	ＲＰ110
	35	須恵器	坏	(145)	(68)	38	細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ２　ＥＬ148	ＲＰ146
	36	須恵器	双耳坏	(110)	(50)	48	細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ２Ｆ	ゆがみ
	37	土師器	甕		(90)		粗砂混	良	にぶい橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ２Ｆ	網代痕　ＲＰ142
第27図	38	土師器	甕	(168)			粗砂混	良	橙色	ナデ	ナデ		ＳＴ２Ｆ	ＲＰ123
	39	土師器	甕	(91)			粗砂混　雲母	良	橙色				ＳＴ２Ｙ	ＲＰ141
	40-a	土師器	甕	(157)			粗砂混　雲母	良	橙色	ハケメ　ナデ	ハケメ　ナデ		ＳＴ２Ｙ	ＲＰ97
	40-b	土師器	甕		(100)		粗砂混　雲母	良	橙色	ハケメ　ナデ	ハケメ　ナデ		ＳＴ２Ｙ	網代痕　ＲＰ977
	42	土師器	甕				粗砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ２　ＥＬ148	ＲＰ67
	43	土師器	甕				細砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ190Ｙ	ＲＰ171
	44	須恵器	甕				粗砂混	良	黒色	ﾛｸﾛ　ナデ	ロクロ		ＳＴ４Ｙ	ＲＰ51
	45	土師器	坏	(142)	59	44	細砂混	良	浅黄橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ４Ｆ	ＲＰ97
第28図	41	土師器	甕		96		粗砂混	良	淡橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ２Ｙ	網代痕　ＲＰ97
	46	土師器	高台付坏		66		粗砂混　雲母	良	浅黄橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ４Ｙ	ＲＰ52
	47	土師器	甕				粗砂混　雲母	良	浅黄橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ４Ｙ	ＲＰ54
	48	土師器	甕		48		粗砂混　雲母	良	灰白色	ミガキ	ハケメ		ＳＴ４Ｙ	網代痕　ＲＰ56
	50	須恵器	坏	(135)	60	39	粗砂混　海綿骨針	不良	浅黄色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ147Ｙ	
	51	須恵器	皿	(115)	58	24	細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ147Ｙ	墨書「木」　ＲＰ65
	58	土師器	甕				細砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ１　ＥＬ149	ＲＰ84

表３　出土遺物観察表２

挿図番号		種別	器種	計測値（mm）			胎土	焼成	色調	成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高				内面	外面	底部		
第28図	59	土師器	甕		(96)		細砂混	良	明赤褐色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ１　ＥＬ149	木葉痕　ＲＰ84
	60	土師器	甕				細砂混	良	にぶい橙色	ナデ	ハケメナデ		ＳＴ１　ＥＬ149	ＲＰ84
第29図	49	土師器	甕				混	良	浅黄橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ150Ｙ	ＲＰ71
	52	土師器	甕				細砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメナデ		ＳＴ147Ｙ	ＲＰ62
	53	須恵器	坏	131	54	33	細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ１　ＥＬ149	転用硯　墨書「□」　ＲＰ85
	54	須恵器	坏	(140)	62	40	細砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ１　ＥＫ379	ＲＰ175
	55	土師器	坏	136	67	50	細砂混	良	にぶい橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ１　ＥＫ379	付着物有　灯明皿？　ＲＰ174
	56	土師器	高台付坏	138	66	52	細砂混	良	にぶい橙色	ミガキ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ１　ＥＫ379	内面黒色処理　ＲＰ176
	57	土師器	甕				細砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメナデ		ＳＴ１　ＥＬ149	ＲＰ84
	63	土師器	坏	(132)	(60)	48	細砂混	良	明赤褐色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ172Ｆ	ＲＰ161
	64	土師器	鉢	(134)	(83)	41	粗砂混	不良	橙色	ナデ	ナデ		ＳＴ172Ｙ	ＲＰ158
	66	須恵器	坏		57		粗砂	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ94Ｙ	ＲＰ50
第30図	61	須恵器	甕				細砂混	良	オリーブ黒色	ｱﾃ痕　ﾊｹﾒ	ﾀﾀｷ　ﾊｹﾒ		ＳＴ172Ｆ	ＲＰ165
	62	須恵器	甕				細砂混	良	黒色	アテ痕	タタキ		ＳＴ172Ｙ	ＲＰ163
	65	土師器	甕				粗砂混	良	橙色	ロクロ	ロクロ		ＳＴ172Ｙ	ＲＰ162
	67	土師器	坏	(139)	56	49	細砂混　雲母	良	にぶい橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ94Ｙ	ＲＰ43
	68	土師器	坏	130	57	45	粗砂混　雲母	良	浅黄橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ94Ｙ	ＲＰ36
	73	須恵器	坏	(144)	70	38	細砂混	不良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ186　ＥＫ357	ＲＰ127
	74	須恵器	高台付坏	151	81	66	粗砂混	不良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ156Ｙ	墨書「十」　ゆがみ　ＲＰ169
	76	須恵器	坏		60		細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＴ３Ｆ	転用硯　朱墨痕　ＲＰ59
第31図	69	土師器	甕	(242)			細砂混　雲母	良	橙色	ロクロ	ﾛｸﾛ ﾅﾃﾞ ﾊｹﾒ		ＳＴ94Ｙ	外面炭化物付着
	70	土師器	甕	(134)	76	140	粗砂混	良	浅黄橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ94Ｙ	外面炭化物付着　網代痕　ＲＰ40
	71	土師器	甕	227			細砂混	良	淡橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ94Ｙ	内外面炭化物付着　ＲＰ48
	72	土師器	坏	139	68	58	緻密	良	橙色	ケズリ	ケズリ		ＳＴ５Ｆ	内面黒色処理　網代痕　ＲＰ32
	75	土師器	塝				粗砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ156Ｙ	内面黒色付着物　ＲＰ117
	77	土師器	甕		76		細砂混	良	橙色	ナデ	ハケメ		ＳＴ３Ｙ	網代痕　ＲＰ60
	78	土師器	甕		82		粗砂混	良	浅黄橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ５　ＥＬ144	網代痕　ＲＰ61
第32図	79	須恵器	甕				細砂混	良	黒色	アテ痕	タタキ		ＳＴ161Ｙ	ＲＰ53
	80	土師器	甕		(83)		粗砂混	良	にぶい橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ161Ｙ	網代痕　ＲＰ57
	81	土師器	甕				粗砂混	良	にぶい橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＴ161Ｙ	内外面炭化物付着　ＲＰ177
	82	土師器	甕				細砂混	良	にぶい橙色	ロクロ	ﾛｸﾛ　ﾅﾃﾞ		ＳＴ179Ｙ	ＲＰ91
	88	須恵器	甕				粗砂混	良	灰色	ｱﾃ痕　ﾅﾃﾞ	タタキ		ＳＤ18Ｙ	ＲＰ３
	93	須恵器	甕				粗砂混	良	灰色	アテ痕	タタキ		ＳＤ163Ｙ	ＲＰ81
	100	土師器	甕				粗砂混　石英	良	橙色	ロクロ	ロクロ		ＳＧ171Ｆ	ＲＰ170
第33図	83	須恵器	坏	(129)	(54)	27	緻密	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＤ18Ｙ	ＲＰ２
	84	須恵器	坏	(148)	50	42	粗砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＤ18Ｙ	ＲＰ11
	85	須恵器	高台付坏			63	細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＤ18Ｙ	ＲＰ21
	86	須恵器	高台付坏		58	65	細砂混	良	オリーブ灰色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＤ18Ｙ	墨書「十一？」　ＲＰ６
	87	須恵器	蓋			15	細砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ		ＳＤ18Ｙ	
	89	須恵器	蓋				細砂混	良	灰色	ロクロ	ナデ	回転糸切	ＳＤ18Ｙ	ＲＰ７
	90	土師器	坏		(62)		細砂混	良	橙色	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ＳＤ18Ｙ	墨書「十」　ＲＰ14
	91	土師器	高台付坏	(132)	(50)	42	細砂混	良	灰白色	ミガキ	ロクロ	回転糸切	ＳＤ18Ｙ	内面黒色処理　ＲＰ23
	92	須恵器	坏				細砂混	良	黄灰色	ロクロ	ロクロ		ＳＤ235Ｙ	
	94	須恵器	甕		(114)		粗砂混	良	灰色				ＳＤ163Ｙ	ＲＰ78
	97	須恵器	坏			39	粗砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転篦切	ＳＧ171Ｆ	ＲＰ73
	98	須恵器	高台付坏	119	77	42	細砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	回転篦切	ＳＧ171Ｆ	ＲＰ74
	99	須恵器	蓋	148		28	粗砂混	良	灰白色	ロクロ	ロクロ		ＳＧ171Ｆ	ＲＰ75
第34図	95	土師器	坏	(140)	(10)	73	細砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＤ40Ｙ	丸底　ＲＰ87
	96	土師器	甕				粗砂混	良	橙色	ハケメ	ハケメ		ＳＤ40Ｙ	口縁部被熱　ＲＰ86
	101	土師器	高坏	(230)		121	緻密	良	橙色	ナデ　ミガキ	ミガキ　ナデ		ＳＫ16Ｙ	ＲＰ31
	102	須恵器	甕				細砂混	良	灰色	ロクロ	ロクロナデ		ＳＴ188Ｆ	外面に波状文、刻み目、沈線

表４　弥生土器観察表

挿図番号		器種	胎土	文様	地文	型式	出土地点	備考
第34図	103	甕	金雲母　石英　砂混	連弧文	ハケ目	桜井式	Ｂ区Ⅲ	内面ナデ　半截竹管
	104	浅鉢	石英　砂混	連弧文		桜井式	ＳＴ161Ｆ	半截竹管
	105	壷	金雲母　石英　砂混	渦巻文		桜井式	Ｂ区Ⅲ	半截竹管
	106	甕	石英　砂混	竹管刺突	ＲＬ斜	天王山式	Ｂ区Ⅲ	
	107	甕	石英	刻目　沈線　刺突	ＬＲ	天王山式	ＳＴ156Ｆ	
	108	壷？	金雲母　石英		撚糸Ｌ	天王山式？	ＳＴ164Ｆ	

表５　石製品観察表

挿図番号		器種	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損の有無	調整その他	素材	出土地点	備考
第35図	109	砥石		27	27	48.6	有	砥面４面	凝灰岩？	ＳＴ162Ｆ	
	110	砥石		60	26	164.0	有	砥面３面、他面打欠き	堆積岩？	26－19Ⅲ	
	111	砥石？		17	8	2.0	有	６面面取り裏	凝灰岩？	ＳＴ147Ｙ	２カ所穿孔、携帯用砥石？　ＲＱ64

表６　金属製品観察表

挿図番号		品別	材質	計測値 径(mm)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	破損有無	出土地点	備考
第36図	112	紡錘車	鉄	円盤　47 軸部　8	136		20	57.54	有	ＳＴ147Ｆ	軸部を円盤に差し込む　中央軸部以外に突起有　ＲＭ46
	113	紡錘車	鉄	円盤　50 軸部　13	11.8		30	61.03	有	ＳＴ４Ｙ	軸部を円盤に差し込む　ＲＭ55
	114	紡錘車	鉄	円盤　51 軸部　15	10.1		9	44.02	有	ＳＴ１－ＥＫ379	軸部を円盤に差し込む　ＲＭ173
	115	刀子	鉄		167	24	4	48.17	有	ＳＴ161Ｙ	木部残存　ＲＭ88
	118	刀子	鉄		185	28	14	57.21	有	ＳＴ157Ｆ	ＲＭ89
	119	刀子	鉄		120	17	7	35.90	有	ＳＴ186Ｙ	ＲＭ167
	121	刀子	鉄		52	21	16	17.74	有	ＳＴ３Ｙ	
第37図	120	刀子	鉄		120	20	9	28.13	有	ＳＴ186Ｆ	ＲＭ92
	116	刀子	鉄		96	13	4	26.78	有	ＳＴ４Ｆ	
	117	刀子	鉄		12.5	12	11	21.16	有	ＳＰ182Ｆ	
	122	鎌	鉄		165	34	11	106.15	有	ＳＴ147Ｙ	ＲＭ47
	123	不明	鉄		45	8	8	6.45	有	ＳＴ１Ｙ	
	124	不明	鉄		137	11	11	11.70	有	ＳＥ273Ｆ	
	125	不明	鉄		84	20	20	46.09	有	ＳＴ186Ｙ	ＲＭ166
	126	不明	鉄		49	8	11	9.40	有	ＳＴ186－ＥＰ307	
	127	不明	鉄		111	12	9	20.74	有	ＳＴ２Ｆ	ＲＭ93

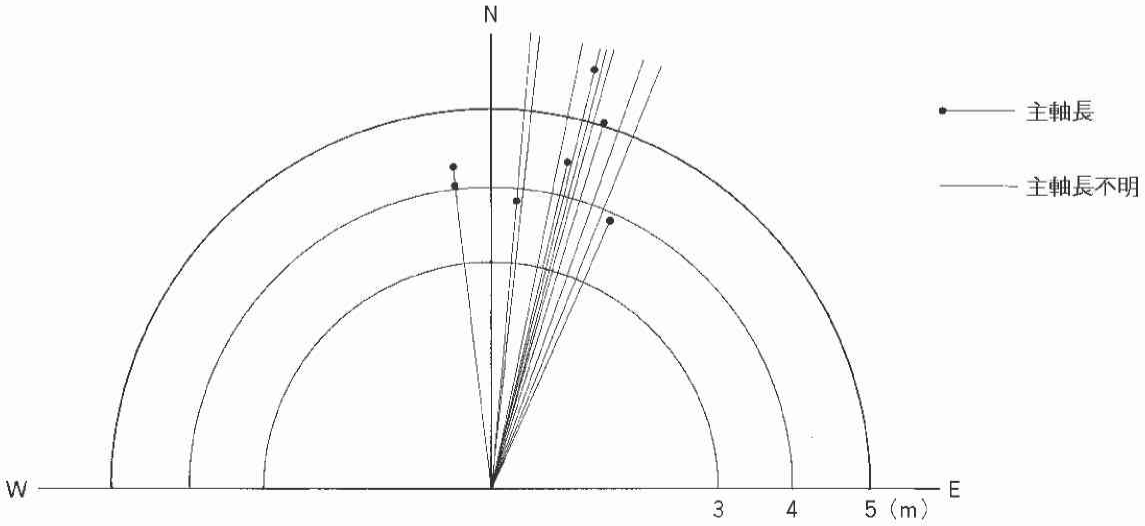
Ⅵ　まとめと考察

遺構

今年度の調査では、17棟に及ぶ竪穴住居跡をはじめとして、井戸跡、溝跡等総数430基に及ぶ遺構が検出された。

竪穴住居は全て、９世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。ＳＧ171河川跡に切られるもの、ＳＧ171を切るものが存在することから、河川埋没前から埋没後にかけて営まれた集落といえる。カマドを持つものと、カマドを持たないものがあり、カマドを有する場合は、礫を袖の芯材としている。部分的な検出にとどまった例が多いことから、北辺に垂直な軸を主軸とし、住居が示す主軸方位について考察した。なお、プランが不明であるＳＴ156・200は除いた。この結果、主軸方位は３群に大別される。第１群は、磁北から西に振れるもの、第２群は、磁北から東に振れる角度が12°未満のもの、第３群は、磁北から東に振れる角度が12°以上のものである。第１群にはＳＴ４・５が含まれ、共にＳＧ171を切る。ＳＧ171を切るＳＤ18・40と同時期の遺構と考えられ、最も新しい竪穴住居群である。１辺が４ｍ前後であり、床面積は17㎡程である。カマドを持たない点で共通しているが、周溝の有無や柱穴など、構造的には違いが見られる。第２・３群には、新旧の竪穴住居が混在する。主軸方向にやや幅があり、規模や構造にも差があるが、時系列的な違いは認められない。切り合い関係から考察すると、一時期に存在した竪穴住居の数は、２～３軒である。

溝跡が７条検出されている。古墳時代の溝跡が１条、平安時代の溝跡が６条である。古墳時代の溝跡がやや湾曲しながら南北方向に走るのに対して、平安時代の溝跡はいずれも東西方向に走る。平安時代のＳＤ235・163・18溝跡は、３次調査で検出された溝跡に連続することが確認でき、これらの溝跡が更に東方まで伸びることから、遺跡範囲が東方に広がっていることがうかがえる。また、検出された14基の井戸跡がＳＤ235溝跡の周囲に集中して分布しており、３次調査と同じ傾向を示している。



第38図　竪穴住居跡主軸方位及び主軸長一覧

Ｂ区で河川跡と推測できる砂の堆積が２カ所確認できる。一部分だけの検出であり、これらの河川跡が連続するか否かは断定できない。しかし、立地と環境でも述べたとおり、本遺跡の北方100ｍを白川が西流しており、白川との何らかの関係が考えられる。

遺物

出土遺物の中で特筆されるのは、ＳＴ147竪穴住居跡床面から出土した須恵器皿（51）とＳＴ３竪穴住居跡覆土から出土した須恵器坏（76）である。51は内面見込みに墨を擦ったことでできた滑らかな面がが認められることから、転用硯と考えている。口縁部の９割ほどが破損している。破断面には、意図的に打ち欠かかれたと考えられる痕跡が10数カ所確認でき、転用するために意図的に成形したことがうかがえる。76も転用硯である。見込み内面に墨痕が認めら、朱墨と思われる痕跡も明確に認められる。体部中央から口縁部までが破損し、底部から体部中央までが残存している。51ほど明確に打ち欠かれた痕跡は認められないが、転用するために意図的に打ち欠いたと考えることも可能であろう。土師器坏の中には、灯明皿として転用されたもの（55）が出土している。口縁内部にすすと思われるものが帯状に付着し、芯があった痕跡が明確に認められる。出土遺物でも述べたとおり、体部下端に凹線を施し、体部と底部の境を明瞭にする意図がうかがえ、須恵器高台付坏を模して制作されたと考えられる。このタイプの土師器坏は２点出土しており、91は内面にミガキ調整が施され、黒色処理されている。

文字資料としては、出土遺物でも記述した墨書土器があげられる。墨書された字種が、「十」や「十一？」等の数に関係するものが多いのが特徴と言えよう。解読不能の文字の中には、何らかの絵のように見えるもの（53）もあり、異質な感じを受ける。

本遺跡の南方2.5㎞に、役所的な機能を備えた集落、あるいは祭祀関連の集落と想定される今塚遺跡がある。今回の調査では、祭祀に関連する遺構や遺物は確認されていないため断定はできないが、距離的に近いこと、９世紀という時代観が一致すること、朱墨痕のある転用硯や絵のように見える文字資料が出土していることなどから、今塚遺跡との間に何らかの関連があるのだろうか、今後の資料の増加を待ちたい。

出土文字資料の解読にあたっては、米沢女子短期大学の三上喜孝氏に指導・助言を賜った。

〈参考文献〉

須賀井新人他「今塚遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第７集：1994
佐藤庄一他「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第17集：1979

報 告 書 抄 録

ふ り が な	むかいがわらいせきだい4じはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	向河原遺跡第4次発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第107集
編 著 者 名	黒沼昭夫・竹田純子
編 集 機 関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL 023-672-5301
発 行 年 月 日	2002年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
むかいがわらいせき 向河原遺跡	やまがたけんやまがた 山形県山形 しおおあざしぶえ 市大字渋江 あざむかいがわら 字向河原	6201	平成2年 度登録	38度 18分 40秒	140度 19分 27秒	20010710 ～ 20011012	1,000	特定道路 山形羽入 線道路改 築工事

種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特 記 事 項
集落跡	奈良・平安	竪穴住居 川 土坑 柱穴 溝 井戸	17 1 10 320 7 14	須恵器・土師器 鉄製品・石製品	平安時代の竪穴住居跡が重複して17棟検出された。また、井戸跡が14基、3次調査で確認された溝跡が更に東側に連続することが確認された (総出土箱数：30)

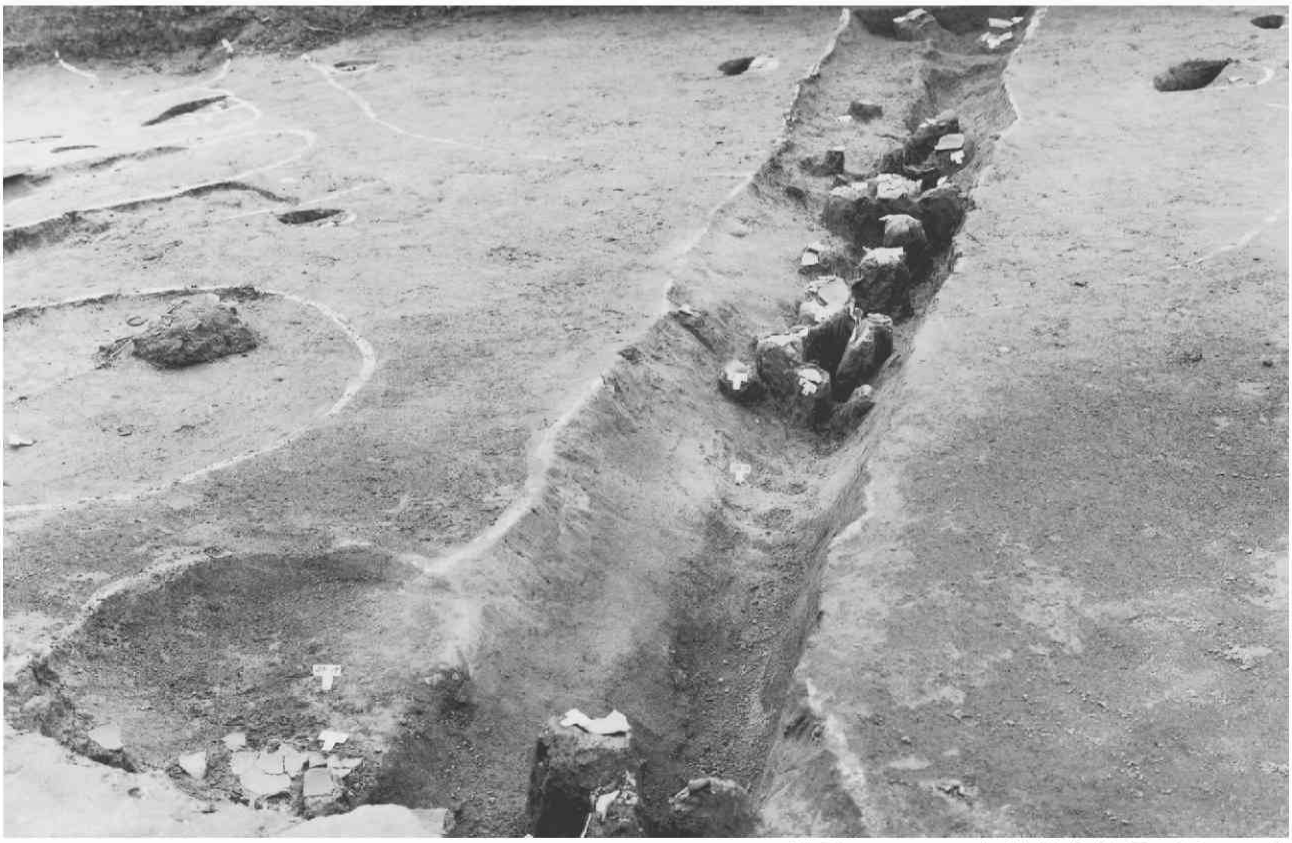
図　　版

重機粗掘状況（北より）

遺構精査状況（北より）

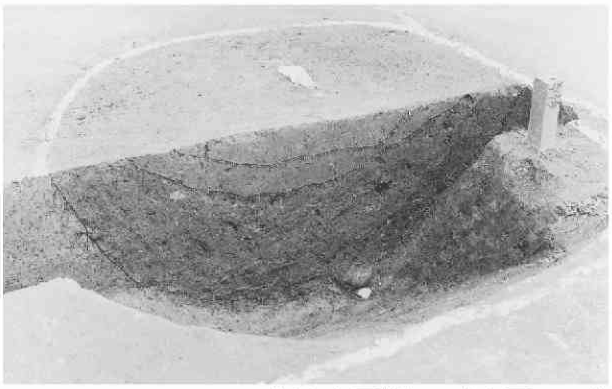
平面図作成状況（南より）

調査説明会状況



ＳＤ18溝跡・ＳＫ19土坑精査状況（東より）

図版２

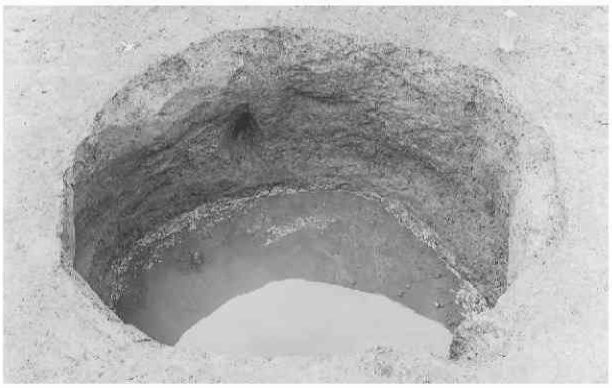


ＳＫ23土坑土層断面（南西より）

ＳＫ23土坑完掘状況（南西より）

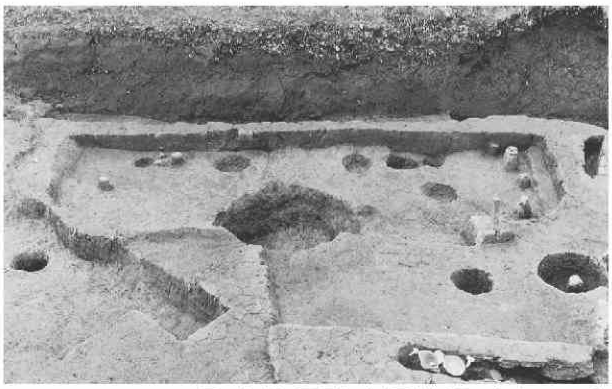
ＳＥ280井戸跡土層断面（東より）

ＳＥ273井戸跡土層断面（西より）

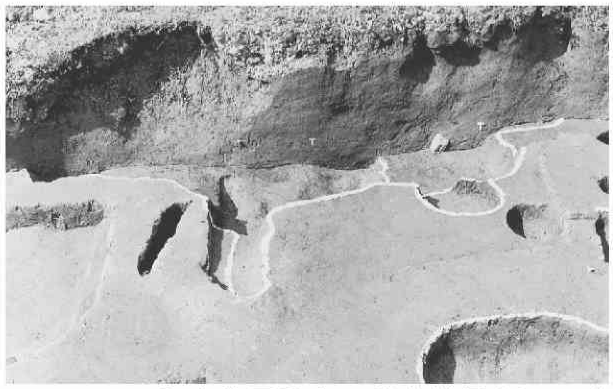


ＳＥ247井戸跡完掘状況（東より）

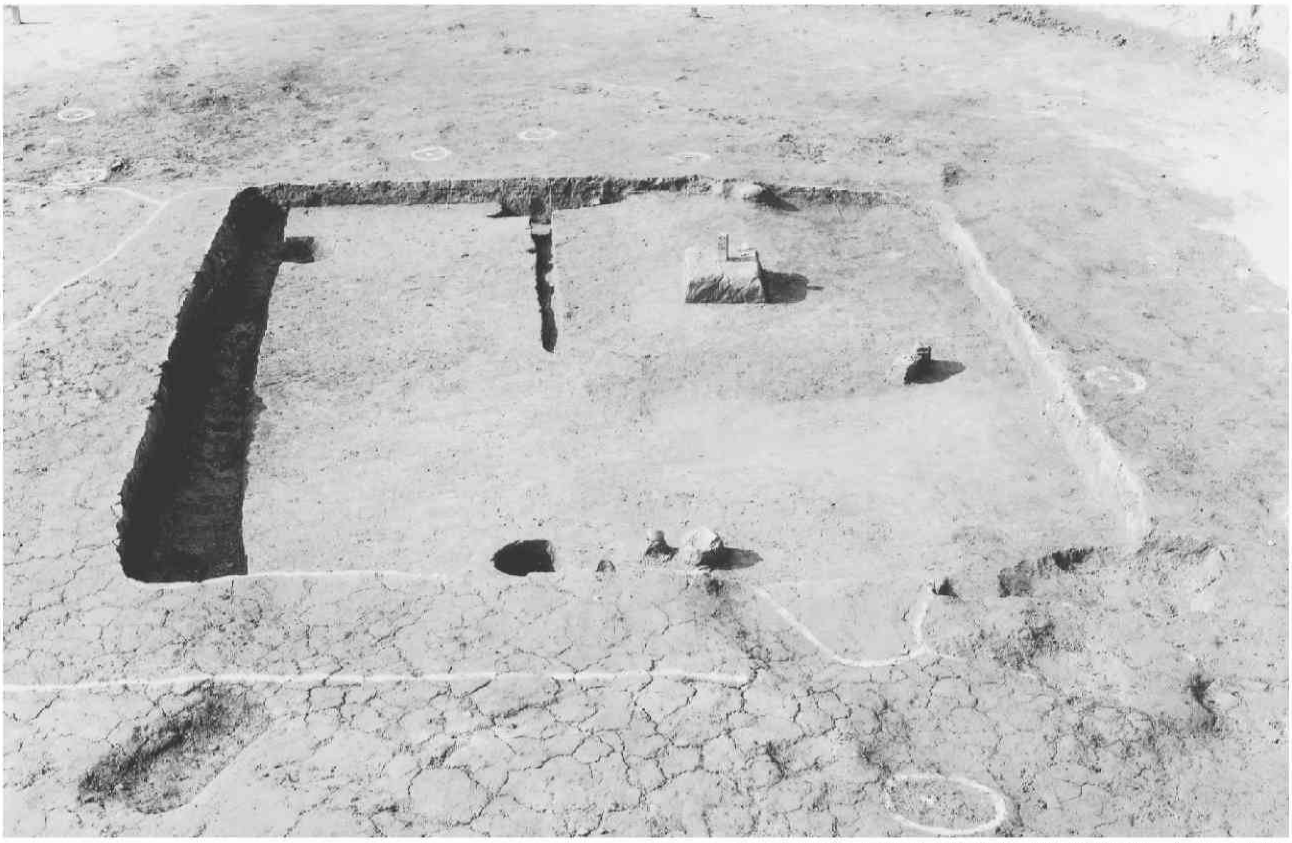
ＳＥ268井戸跡完掘状況（南より）



ＳＴ172竪穴住居跡完掘状況（東より）



ST157・179竪穴住居跡床面検出状況（東より）

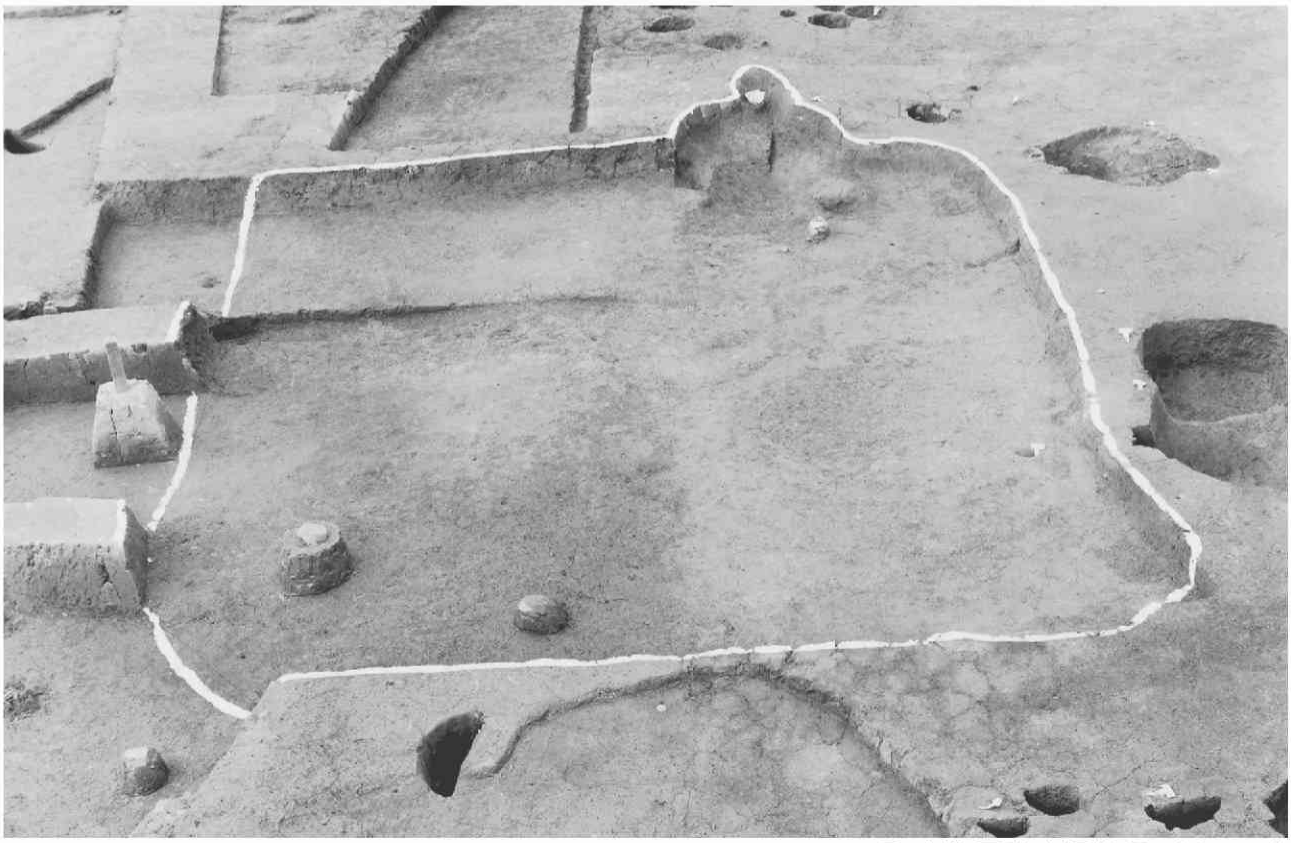


ＳＴ５竪穴住居跡床面検出状況（南より）

ＳＴ５竪穴住居跡完掘状況（南より）

図版４

ＳＴ３竪穴住居跡床面炭化物検出状況（南より）

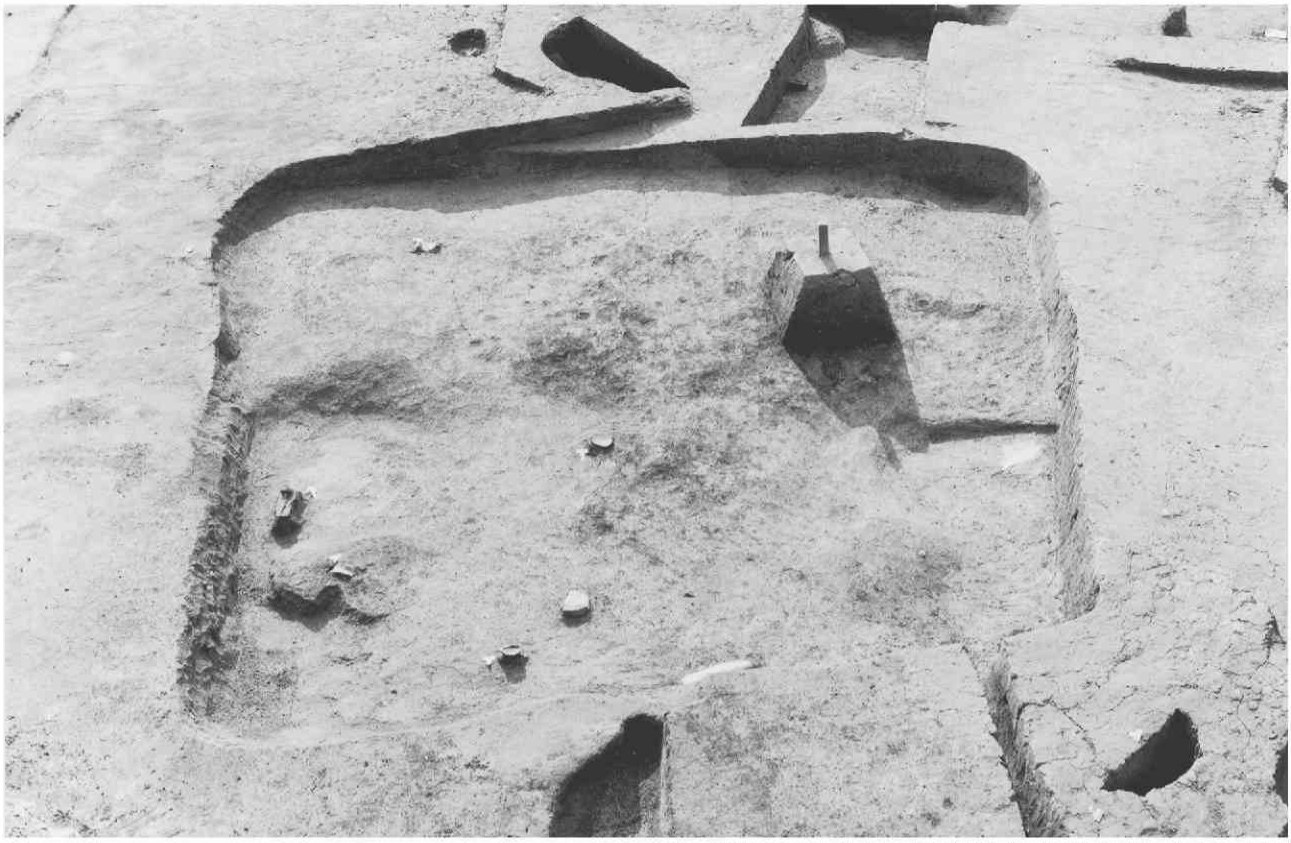


ＳＴ３竪穴住居跡完掘状況（南より）

ＳＴ147竪穴住居跡床面検出状況（北東より）

ＳＴ147竪穴住居跡完掘状況（北東より）

図版６



ＳＴ４竪穴住居跡床面炭化物検出状況（東より）

ＳＴ190竪穴住居跡完掘状況（北より）

ＳＴ186竪穴住居跡完掘状況（北より）

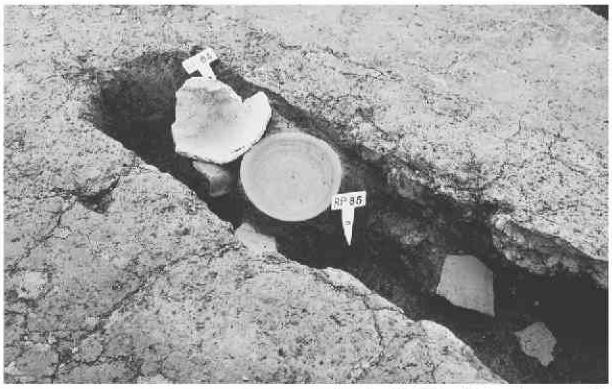
ＳＴ186－ＥＬ180完掘状況（北より）

図版８

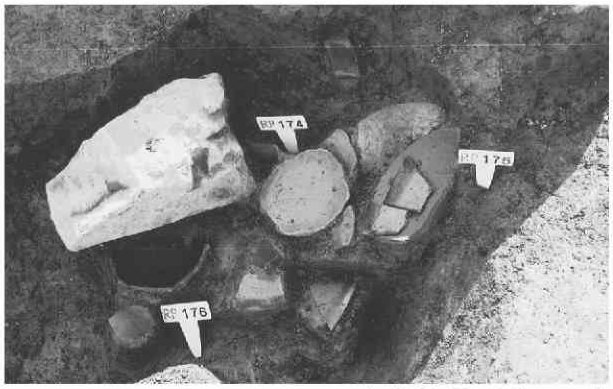
ＳＴ１竪穴住居跡完掘状況（北より）

ＳＴ１－ＥＬ149完掘状況（北より）

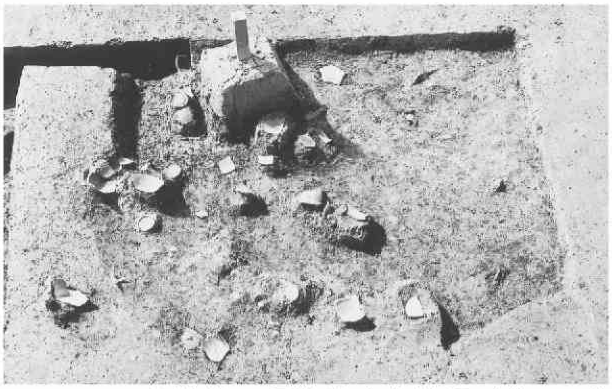
ＳＴ１－ＥＫ379出土状況（北より）



ＳＴ１－ＥＬ149出土状況（北東より）

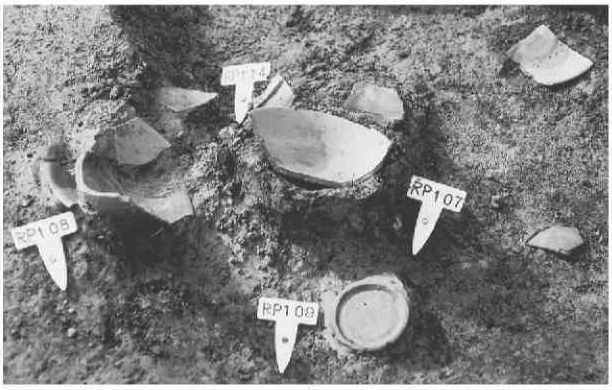


ＳＴ１－ＥＫ379出土状況（北より）



土器捨て場遺物出土状況（北より）

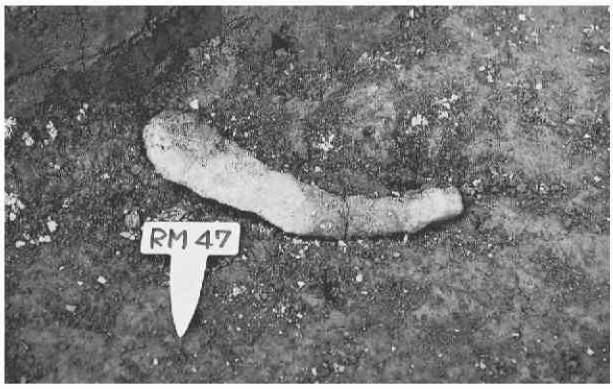
ＲＰ145出土状況



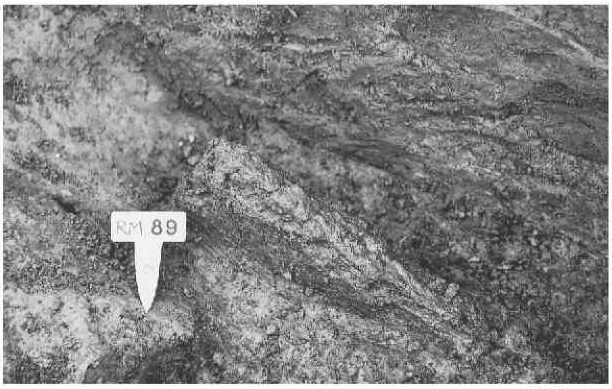
遺物出土状況

ＲＰ147出土状況

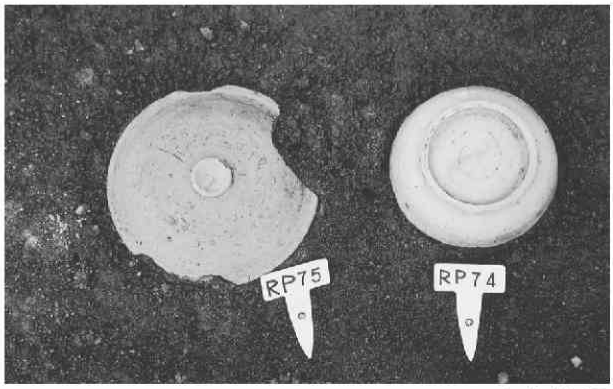
ＲＭ46出土状況



ＲＭ47出土状況



ＲＭ89出土状況

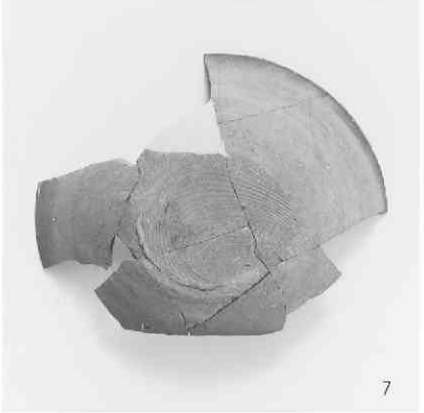


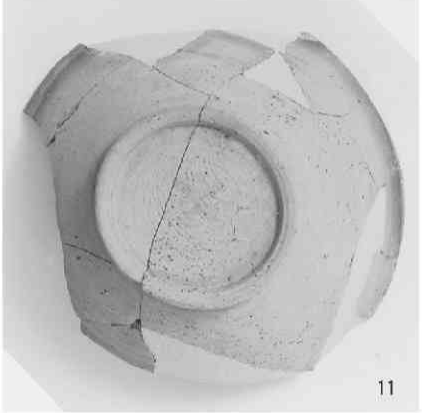
ＲＰ74・75出土状況

図版10

1

3


7


11

5

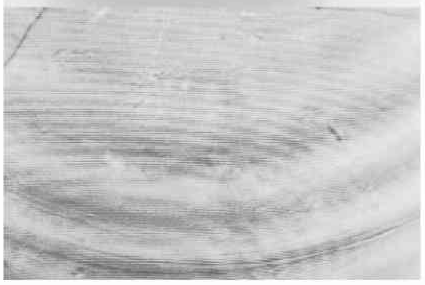
6

8

2

4

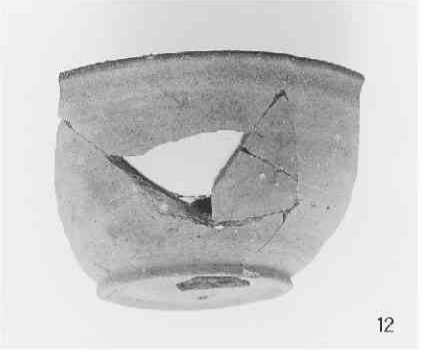
9



出土遺物（1）

10

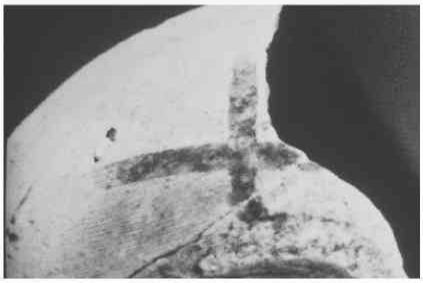
15


12

17

16

21

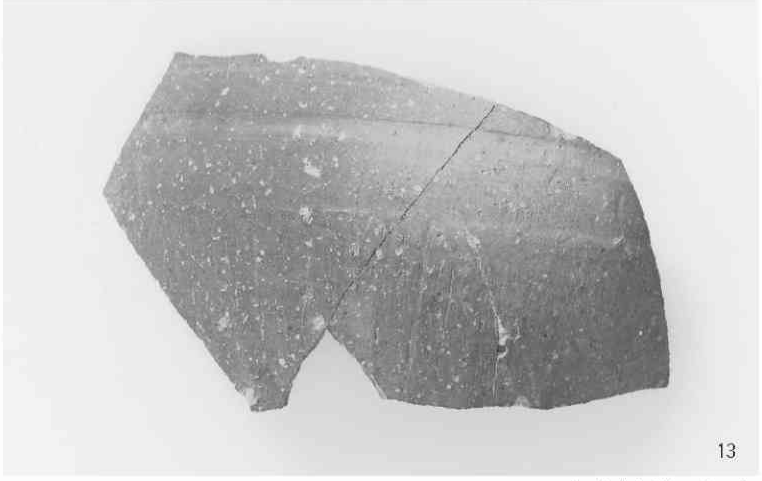


18

14

19

20


13

出土遺物（２）

図版12

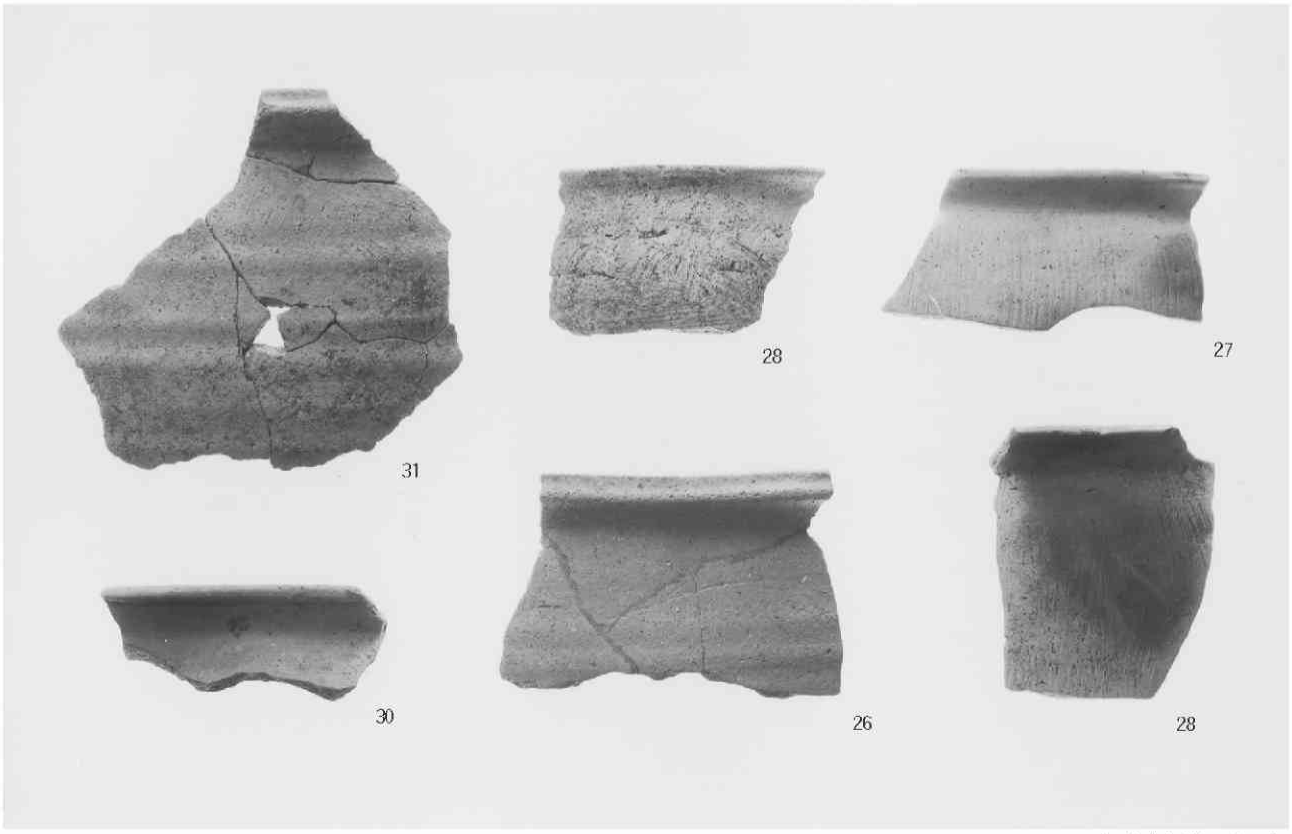
22

23

25

24

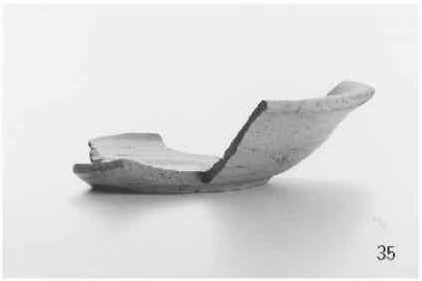
32



出土遺物（３）

38

34

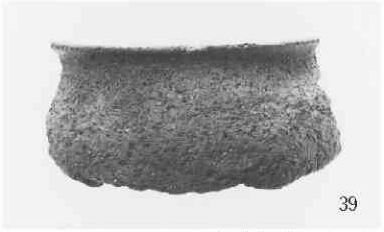

35

33

36

37

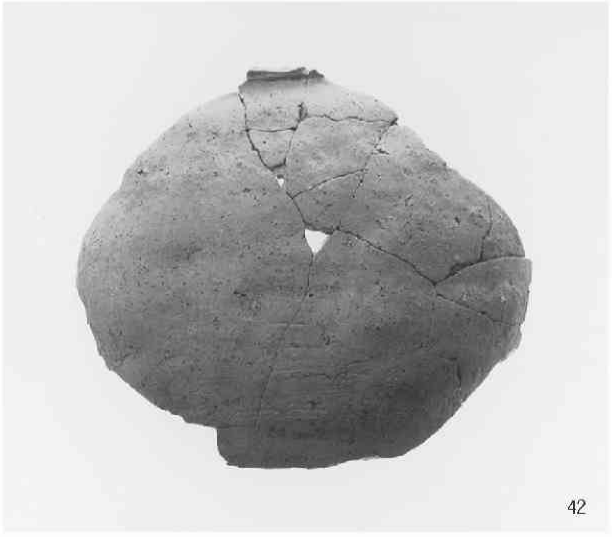
43


39

出土遺物（4）

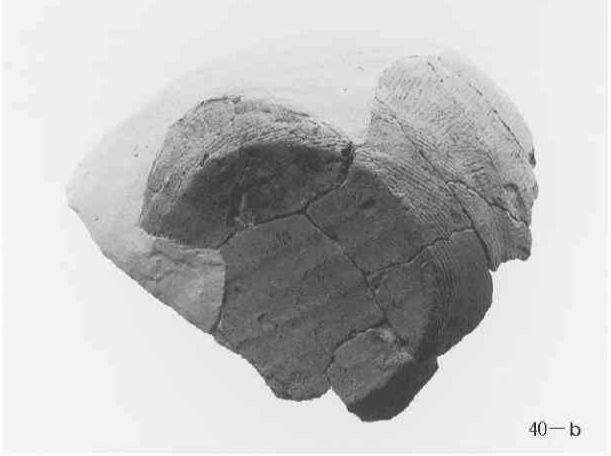
図版14

41

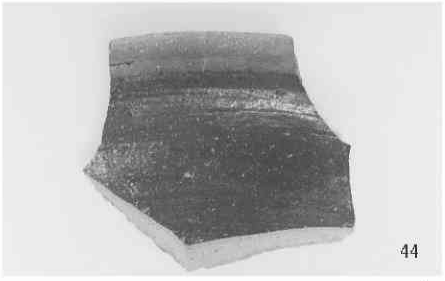


42

40－a

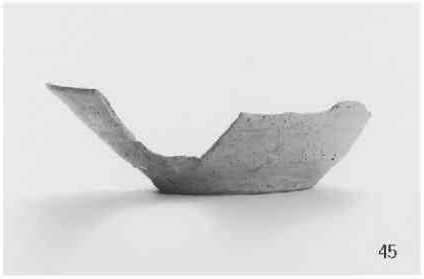


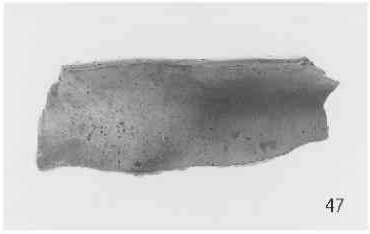
40－b



44

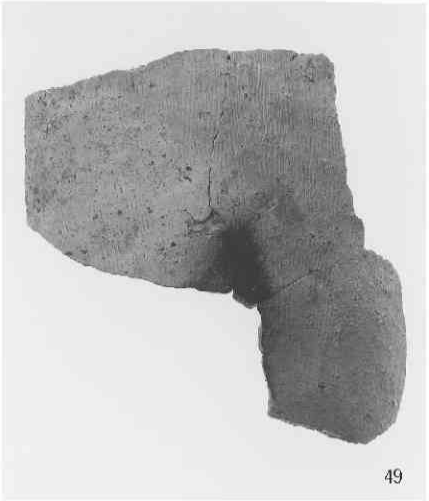
出土遺物（５）


45


47

46

30


49

50

51

53

54

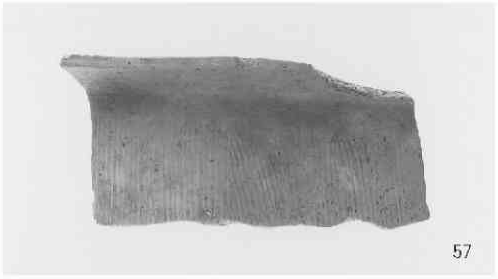
55

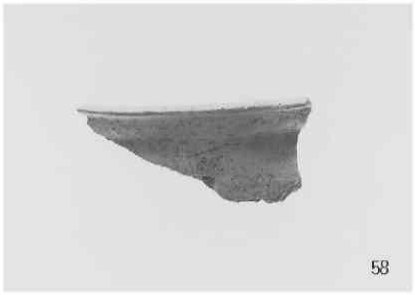
56

出土遺物（6）

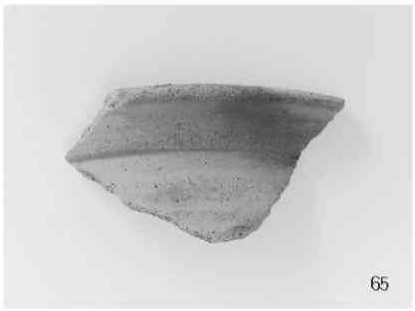
図版16

52


57

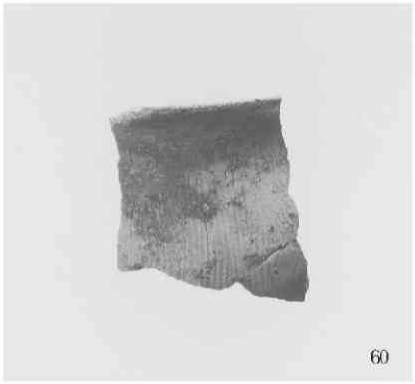

58

64

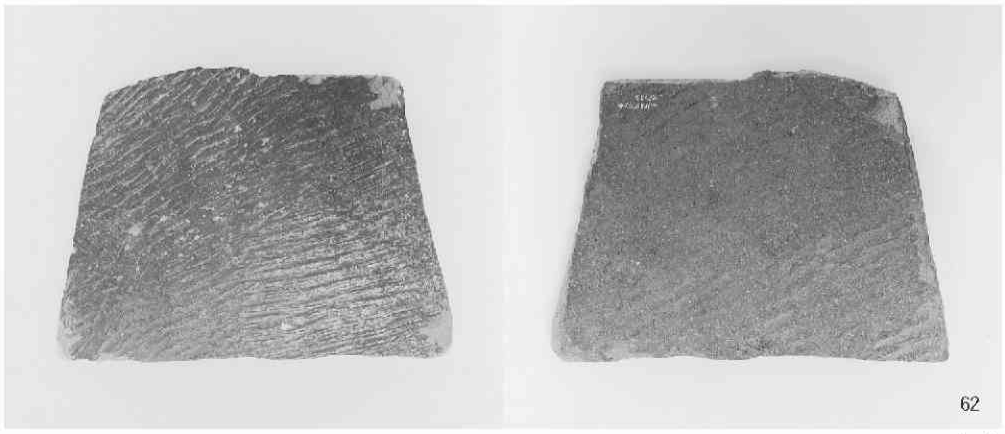

65

63

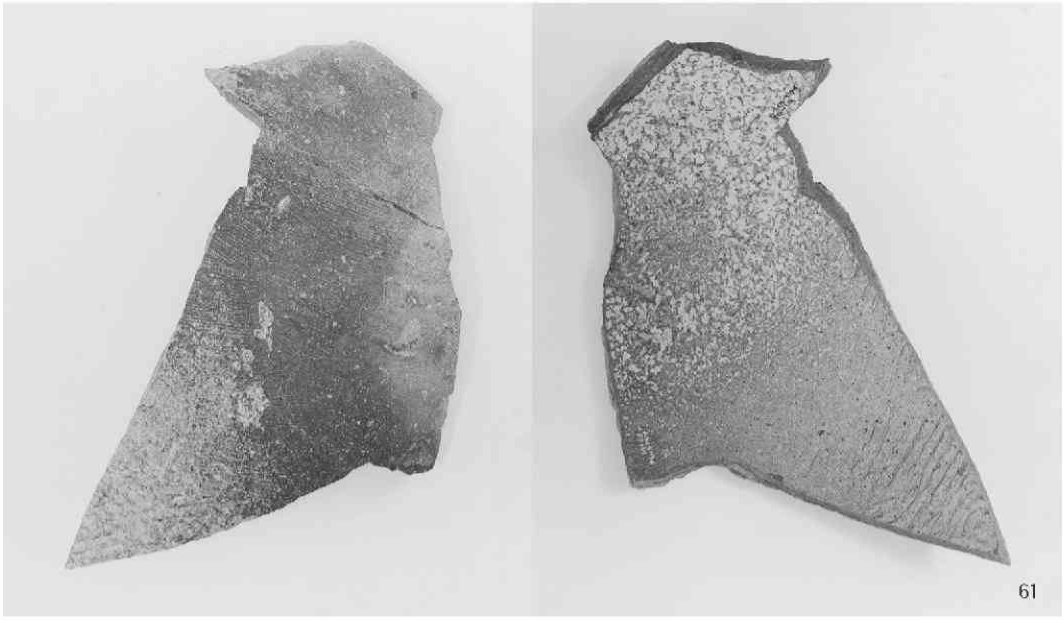
59

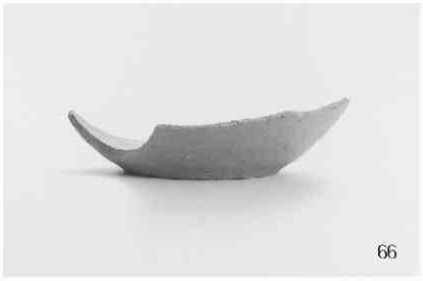

60

73


62

出土遺物（７）

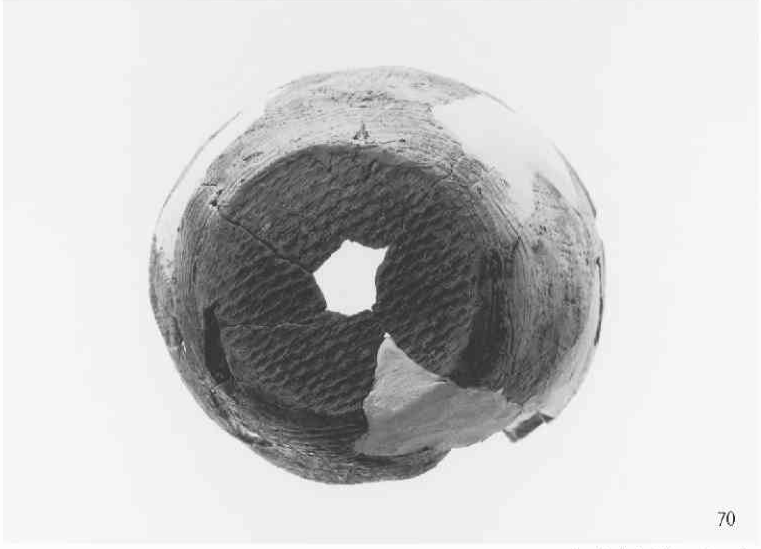

61


66

67

68

76


70

出土遺物（8）

図版18

69

78

77

71

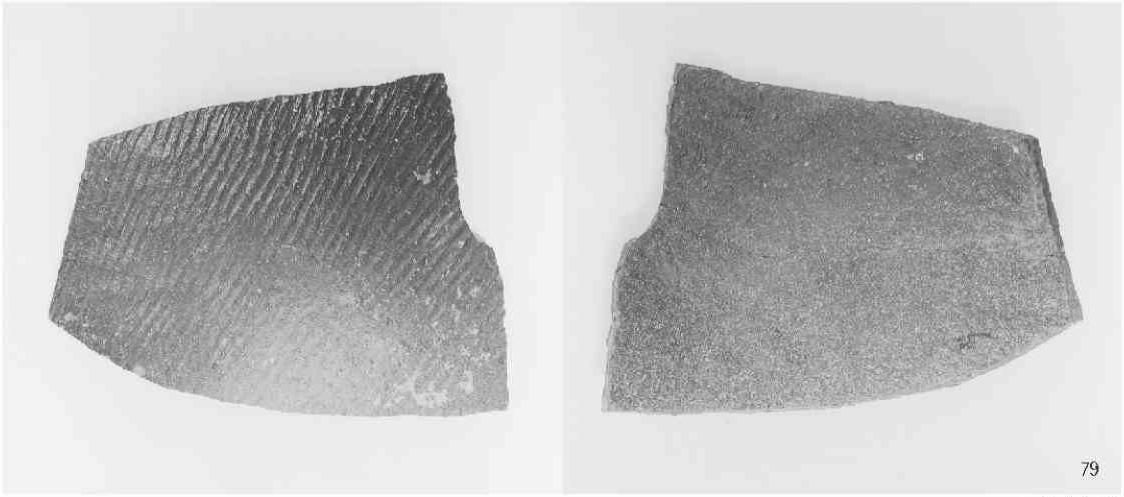
出土遺物（９）

75

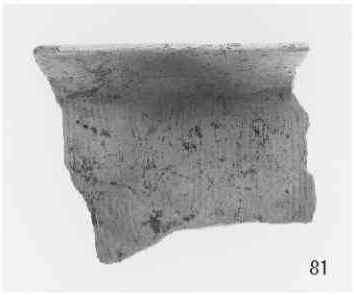
74

72

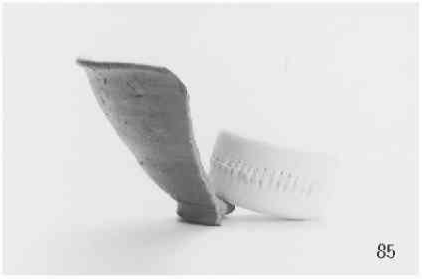
80


79

図版20


81

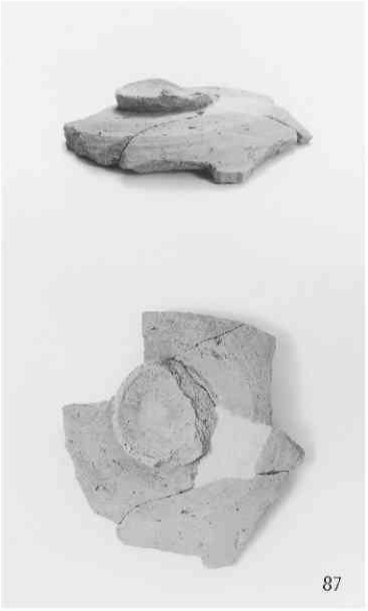
86


85

89

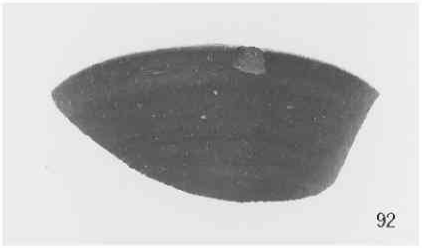
82

88

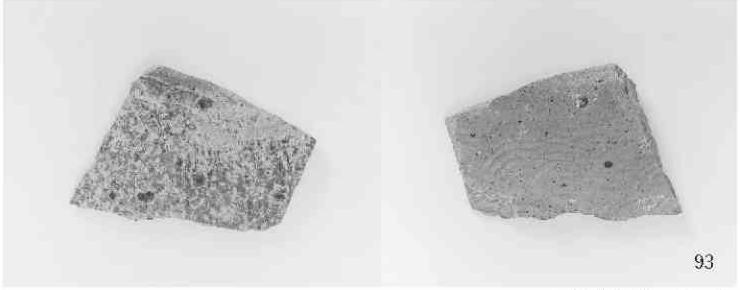

87

91

83


92

84


93

出土遺物（11）

94

95

90

97

98

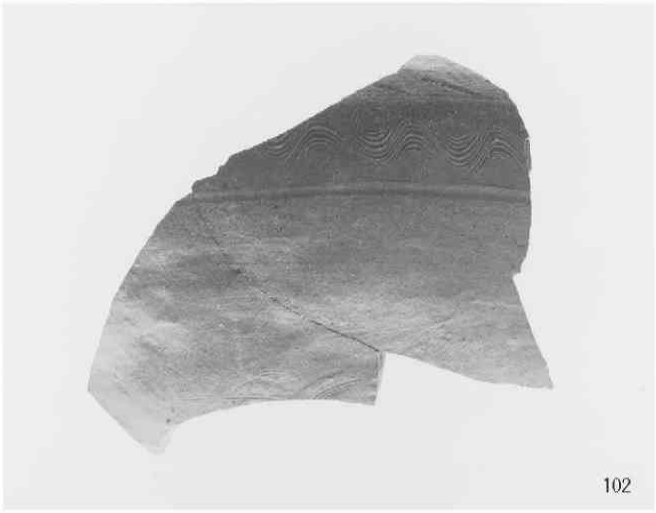
100

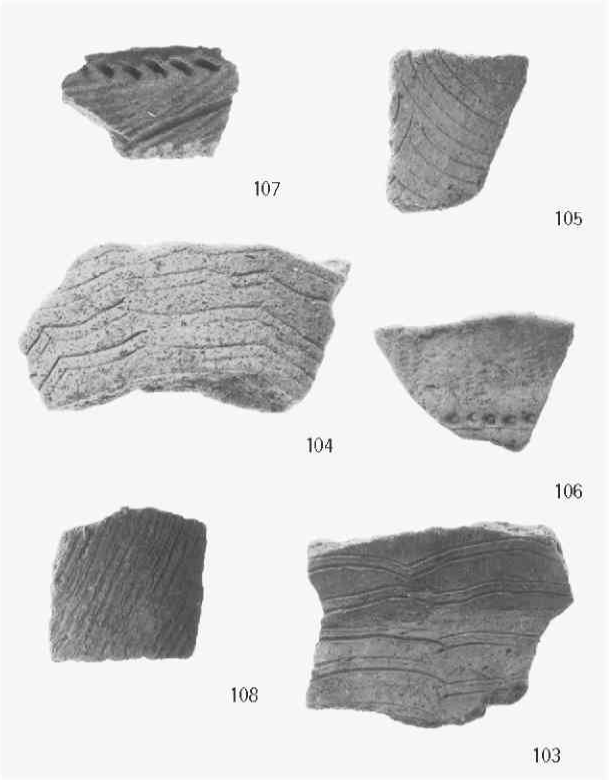
101

99

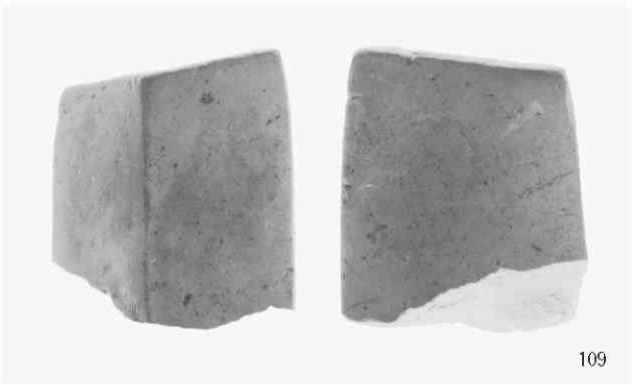
出土遺物（12）

図版22

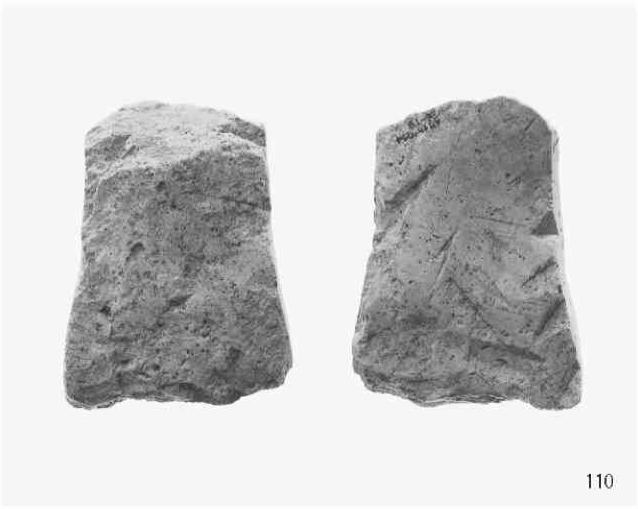




出土遺物（13）



109

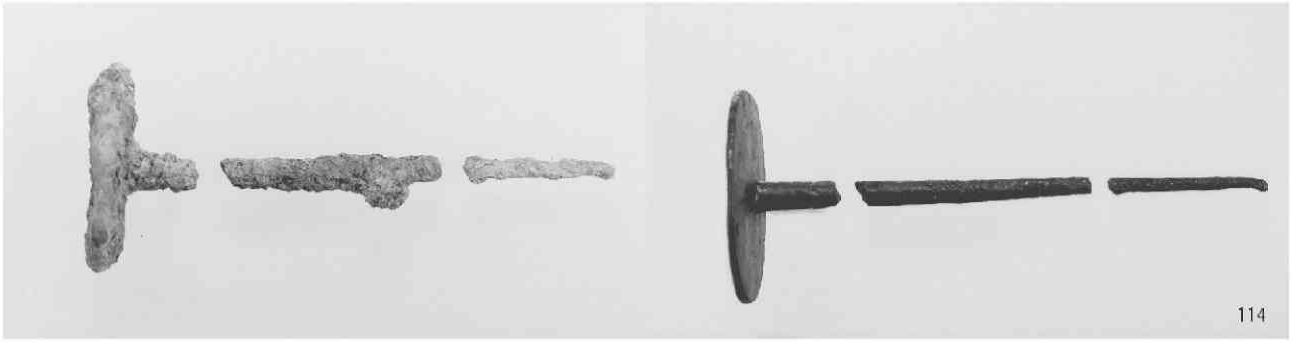


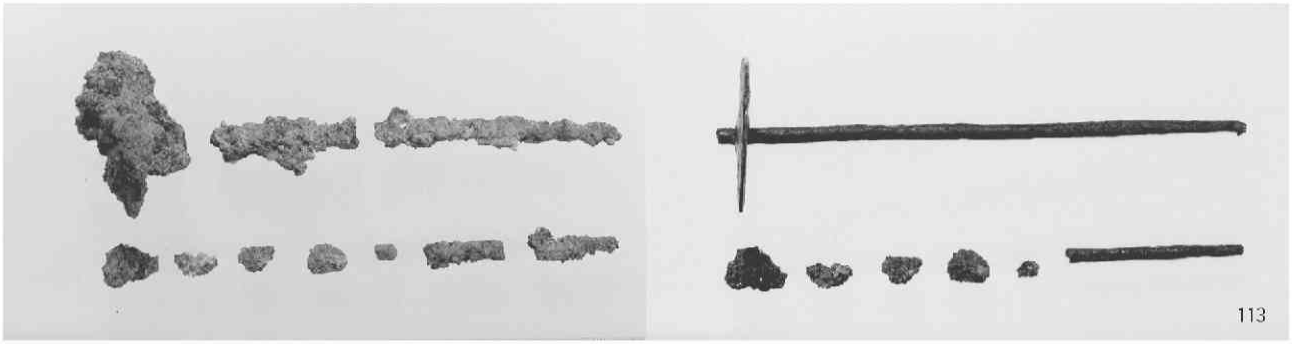
110

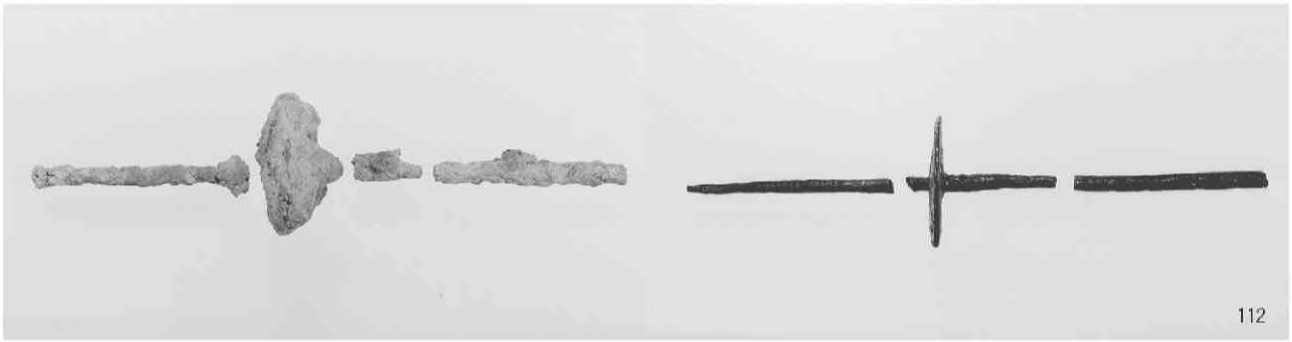
111

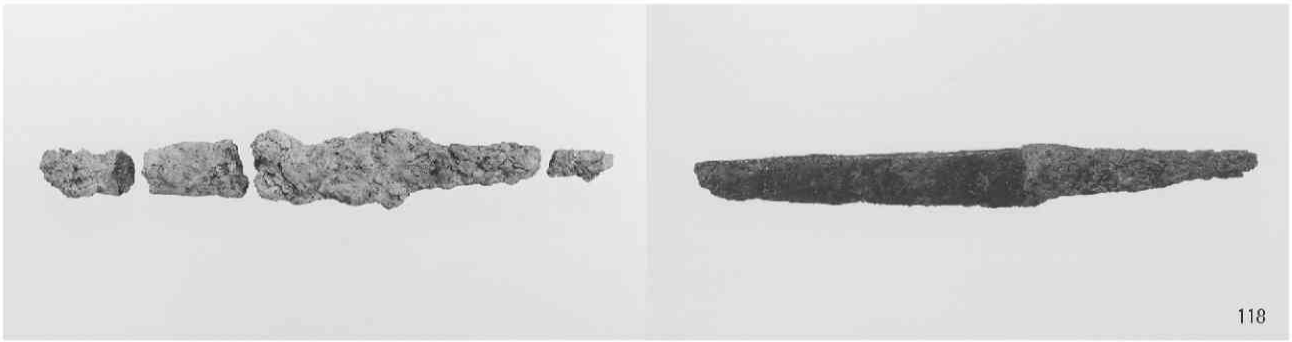
出土遺物（14）

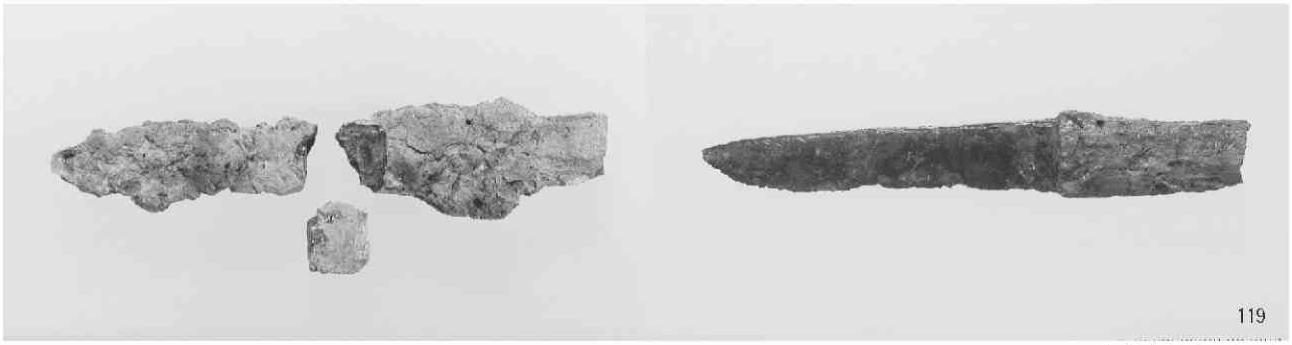
図版24



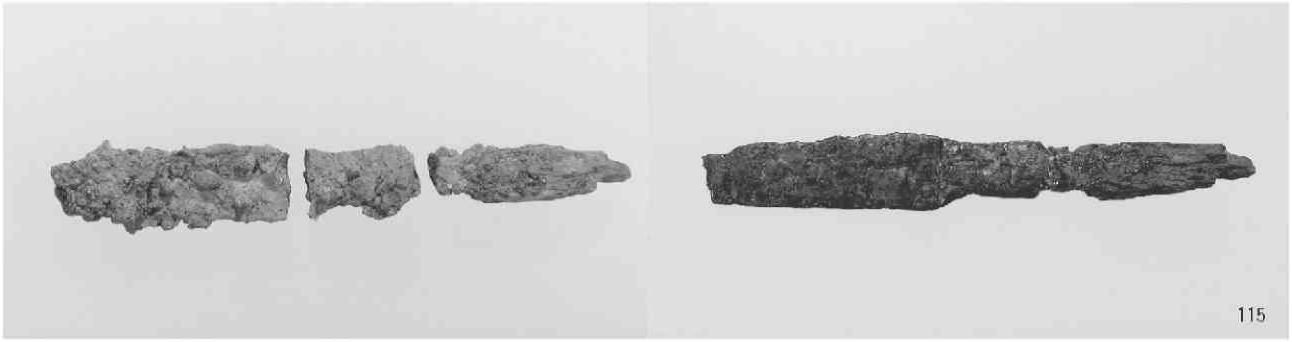


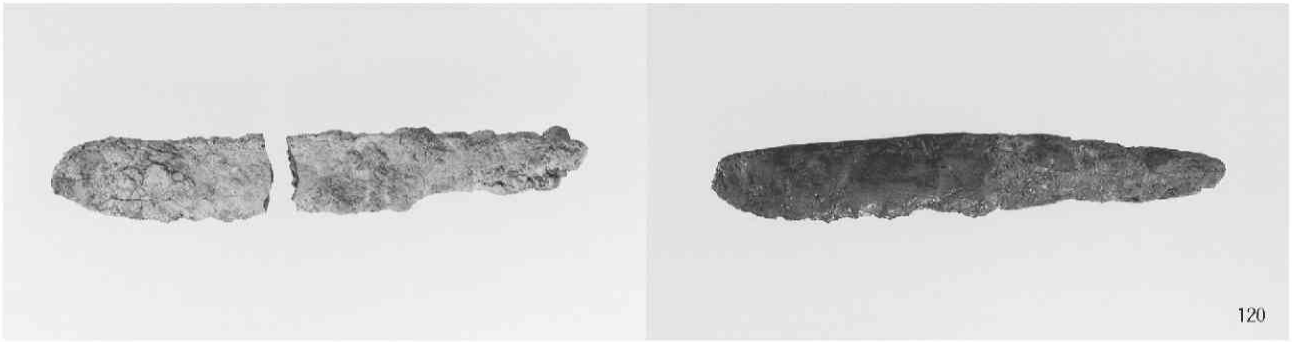


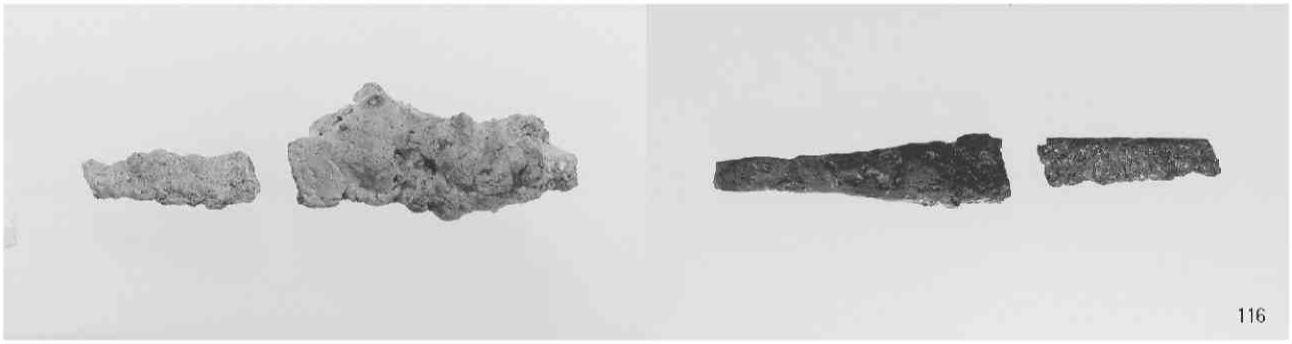


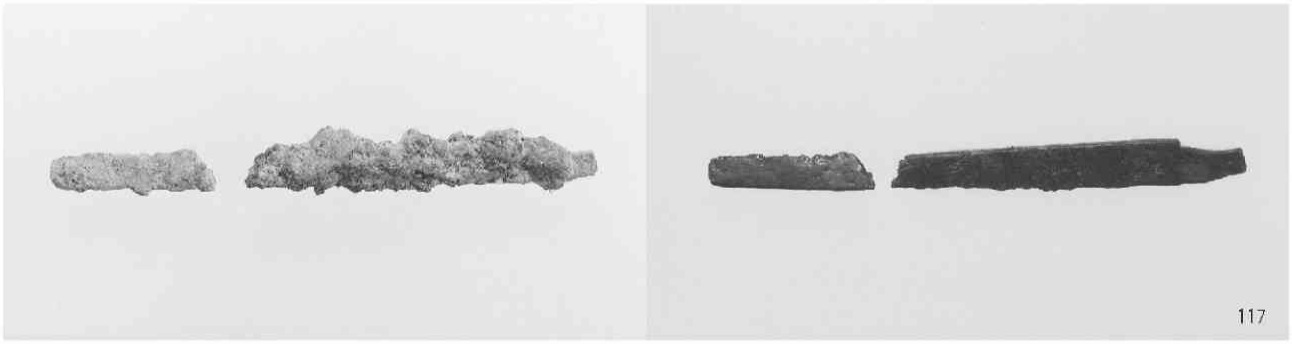


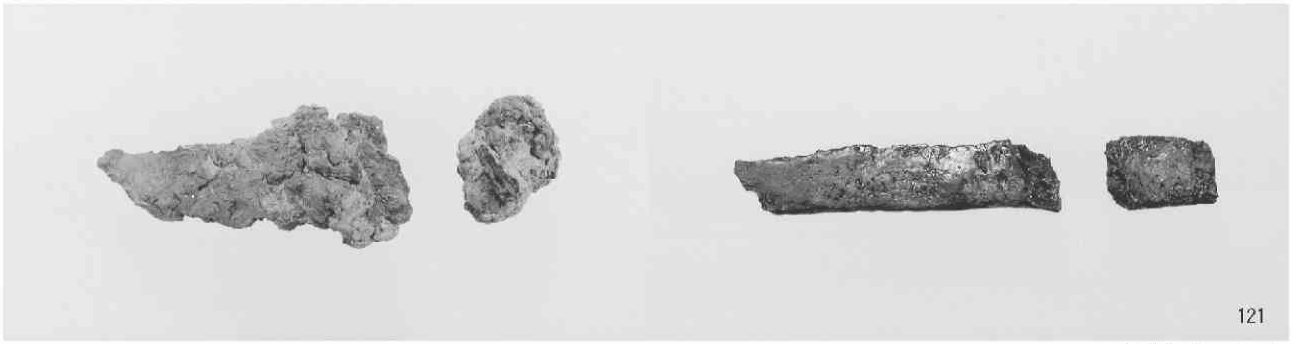
出土遺物（15）





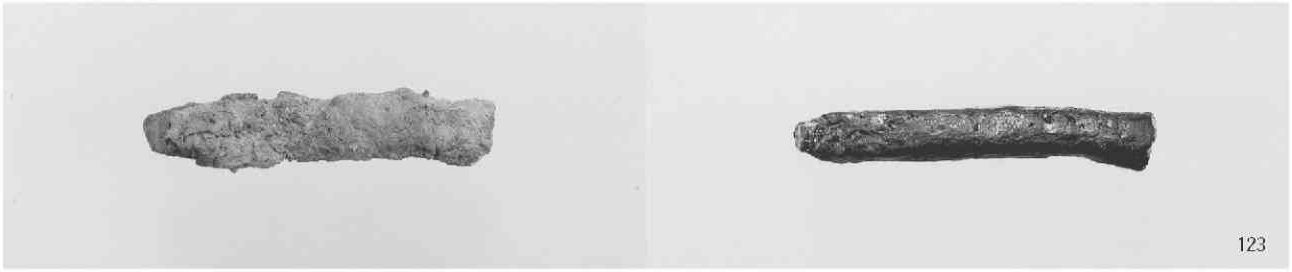


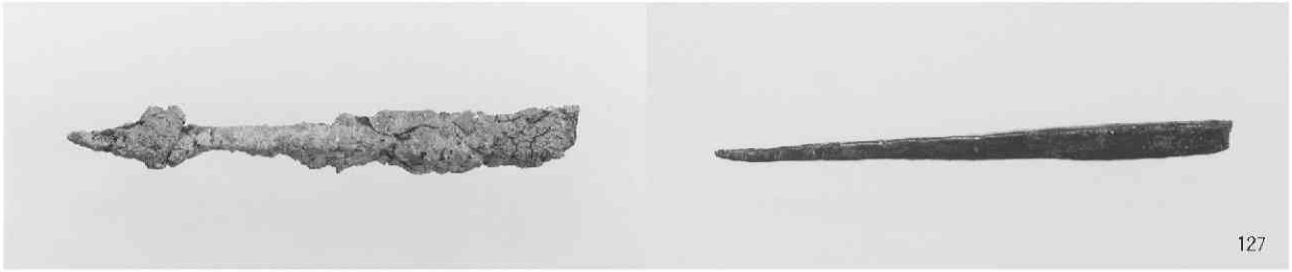


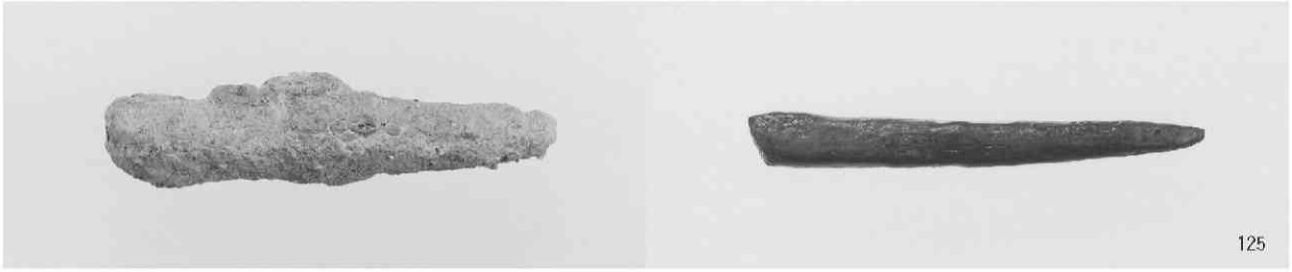


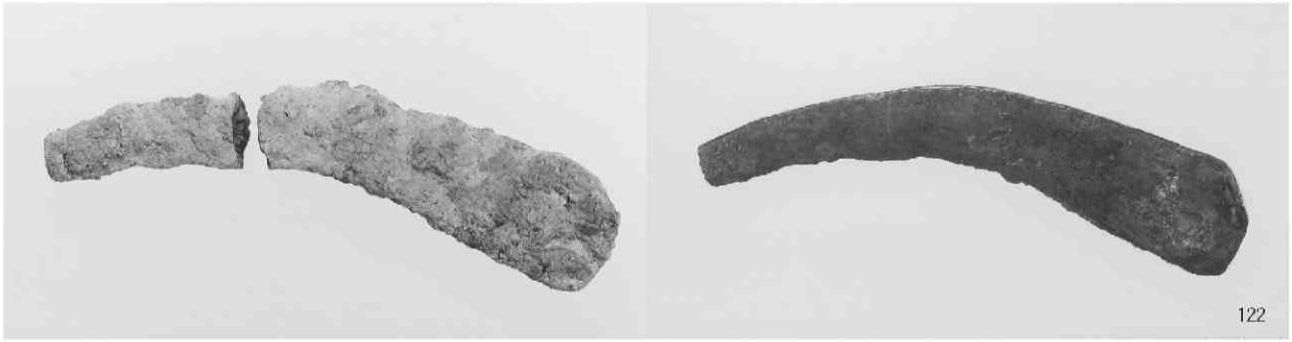
出土遺物（16）

図版26

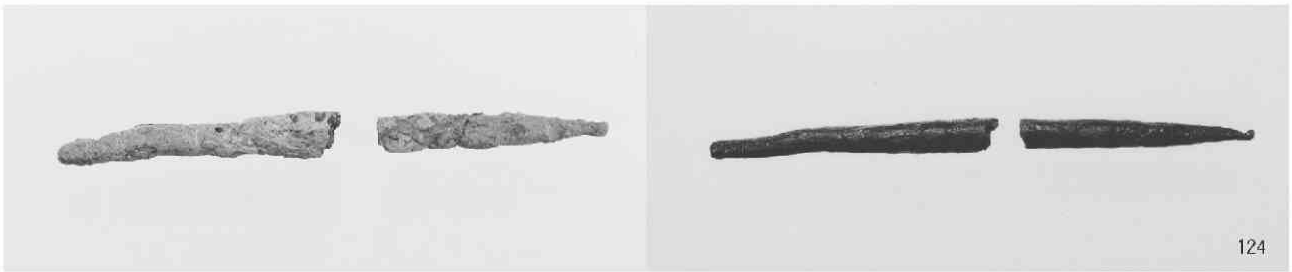

123


127


125


122

126


124

出土遺物（17）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第107集

向河原（むかいがわら）遺跡第４次発掘調査報告書

2002年３月25日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023－672－5301
印刷　山形印刷株式会社